昭和八年四月二十日印刷納本
昭和八年五月一日發行
毎月一回一日發行

精神分析

〔東京精神分析學研究所機關誌〕

昭和八年五月

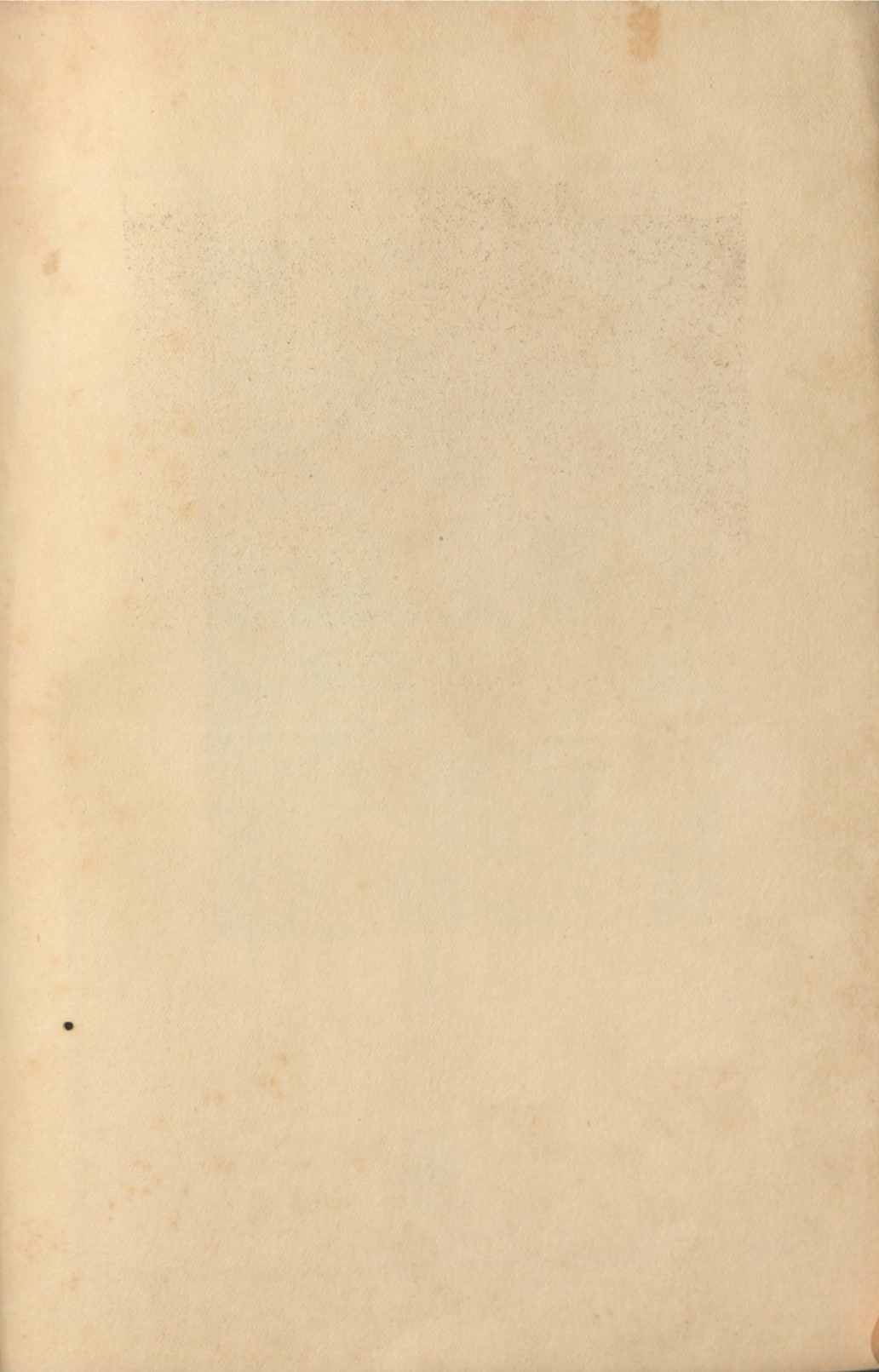
創刊號

東京 不二出版社 日本橋

SIGM. FREUD

(*1926*)

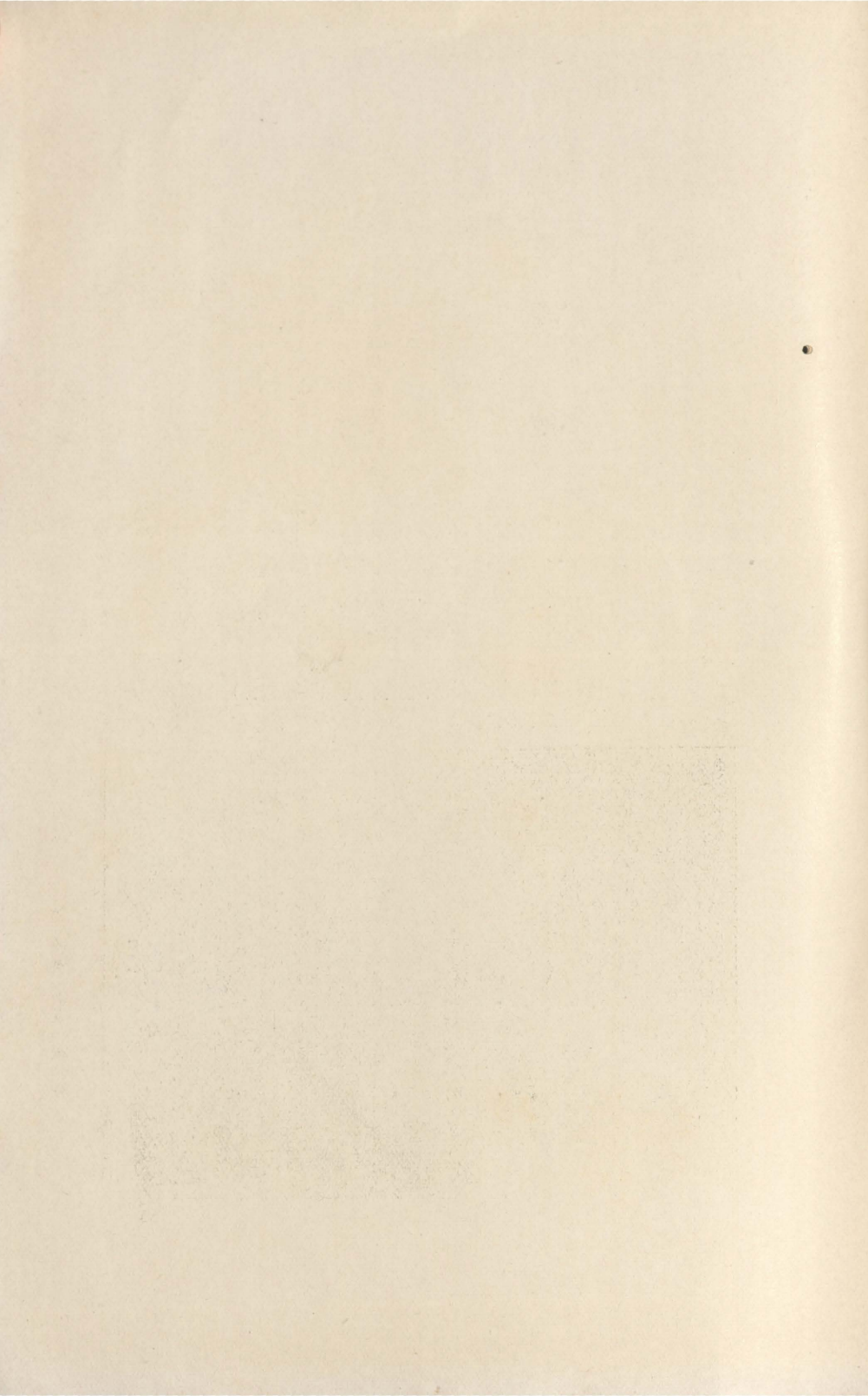
Nach einer Zeichnung von Prof. Ferdinand Schmutzer

神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカリーに
於ける精神分析研究學會例會（最近撮影）

Freunden der Psychoanalyse in Tokio.
Einemonatliche Versammlung unseres Institutes.

寫眞右より（後列）

荒川龍彦
普後俊六
田内長太郎
時平さきた
廣井重一
永田道彦
棚谷仲彦
小林五郎
長崎文治
伊藤豐夫
川又昇
長谷川浩三

（前列）

大槻憲二
江戸川亂歩
小山良修
長谷川誠也
武田忠哉
松居桃多郎
松居松翁
中山太郎
加藤朝鳥

我が國の文明と精神分析

——本誌創刊の辭に代へて——

大槻憲二

我等こゝに東京精神分析學研究所の機關雜誌として本誌を創刊するに當り、わが國に於ける斯學の過現未に就いて一言を費しておきたいと思ふ。

斯學がわが國に始めて輸入されたのは、大正改元と殆んど同時であつた。拙著『精神分析概論』の中にも、ざつと『我が國に於ける研究史』を論じてをいたが、私の知つてゐる限りでは、大正元年七月號の『心理研究』所載、上野陽一氏稿『やり損ひの話』と云ふのが、最初の紹介であらうと信ずる。上野氏や、大槻快尊氏は、元來心理學者であるから、わが國への精神分析の紹介に就いては醫家でもなく、哲學者でもなく、實に心理學者がその最初の功を樹てられたものと云はねばならない。その後遙かに降つて、精神分析に關して獨立の論著あるものは、醫學博士榊保三郎氏（大正八年）、教育學者前野喜代治氏（大正十四年）、醫學博士丸井清泰氏（昭和三年）、文學博士久保良英氏等であるが傳説學者として斯學の貢獻に最も早く着眼したるものに文學博士松村武雄氏（大正十年頃？『婦人公論』誌上）がある。

榊、丸井の兩博士は醫家としては最も先覺者であつて、殊に後者の如き、東北帝國大學醫學部精神科の主任として

終始不變、斯學への興味を失はず、研究を續行し來られたことは、誠に欽慕に堪へざる次第である。が、概して云へば、醫家は、斯學へのその反感と無理解とに於いて、西歐諸國に於けると遺憾ながら軌を同じくし、甚だしき暴言と嘲笑と戲畫化とを斯學に加へたるもの、余の直接見聞した範圍內だけでも一二にして止らず、その間接の傳承に至つては無數であると云つて過言でない。その一例を擧げれば、醫學博士下田光造氏の如き、『婦人公論』大正十四年十二月號に於いてヒステリーを講じた文中でから云つてゐる。

『……肉彈で有名な櫻井と云ふ方が、何でも旅順かどこかで負傷をして、どつちかの手が剛直を起した。さうすると女中さんがそこに來て間もなく同じく手の剛直を起した。それはヒステリー性の剛直であつたのである。さう云ふのを精神分析學者は如何に說明するかと云ふと、例へば手の剛直と云ふことは、子供の時に壓迫された性慾關係のシムボルである。即ちこれは○○した○○のシムボルであると云ふ風に說明する。併しながらこれはフロイド一流の說明であつて、大多數の學者は贊成してゐない』云々と。

こんな說明なら反對する『大多數の學者』の中にフロイド自身も率先參加することを勿論辭するものでなからう。下田氏は全然精神分析を理解してゐない。理解せざるものが、理解せざる說明を下して、自分自身の誤解に反對してフロイド說に反對してゐると妄想してゐるのだから誠に始末が惡い。この女中の腕の剛直がヒステリー性のものであらうことは、私も疑ひないと思ふ。併しこれが○○した○○のシムボルであるなどゝは、とても滑稽な解釋である。精神分析を誤解せる大抵の人々の見解はまづみなこの程度である。この女中が、主人への父コムプレクスに依る轉嫁愛 Uebertragungsliebe は恐らく我々も否定し得ないであらう。其の轉嫁愛が同情となり、同一化となつて、かゝる症狀を來したものであらうと、私は直接本人を診斷はしないが、想像される。誠に貴重の材料を目前にしてゐながら、かゝる淺薄なる觀察に依つて眞理探究の好機を逸せられたことは、學者として氏のために誠に遺憾の極みでなければ

ならない。

一体、精神分析なるものは無意識の學問である。自分の無意識を多少とも意識化し得た人、或は意識化し得る能力あるものゝみが、斯學に理解と同感とを持つのだと云つて過言でない。それは未だ訪れざる國の地理を口頭又は文字で語られるやうなものである。もしかつてその國を訪れた經驗のあるものならば、その文字又は口頭に依る多少の描寫に依つて、その實体の何たるかを直ちに想起し、聯想し、把握することが出來るが、もしその國を見たことのないものは、描寫と說明と分析とが愈々細緻であればあるほど、愈々不明な、難解なものとなつて來るであらう、さうして自分の國（意識界）ではからであるのに、そんな馬鹿げた國があらうとは思へぬと一概に排斥し、嘲笑するのである。故に、精神分析者として、根本的の、第一義的の必要條件、又は資格は、その人が自家の無意識界に出入する能力ありや否やと云ふことである。その人の後天的教育は第二義的重要さを要求し得るに過ぎない。

これまで精神分析に興味を寄せた人は多かつたが、有体に云へば、眞にこの根本資格に於いて十分であつたと云ふ人はあまり多くはなかつたことを認めざるを得ない。フロイドの『分析入門』を譯して、斯學の弘通に大きな貢献をなした安田德太郎博士の如きも、精神分析に對して殆ど何等の自信を有せざるものゝ如く、譯本『ヒステリー』の序文に於いて、ひそかにフロイドへの別れを告げ、また植田正雄氏譯するところのザピール、ライヒ兩氏の論を輯めた『フロイド主義と辨證法的唯物論』（昭和七年三月）の序文に於いてもかう云つてゐる。

『私の「入門」譯が出て以來、私は二方面から批難を受けた。第一に馬鹿な本を譯したとブルヂョア學界の物笑ひとなつた。第二にマルクス主義が世界を席捲する現代に馬鹿な主義をかついだとマルクス主義陣營の物笑ひの種となつた。……（中略）……私は醫學者としてフロイド本を飜譯したゞけであつた。レーニンの飜譯者必ずしもレーニン主義者でない如く、私もまたフロイド主義者でなかつた。私の飜譯をきつかけに、日本にフロイド主義の紹介が流布さ

れ、フロイドは忽ち時代の寵兒となり、而してまたフロイドは、めざましいテムポの中を一瞬にして時代の尖端から沒落した』と。

何と云ふ自信のなさであらう。輕薄さであらう。精神分析は果して既に『時代の尖端から沒落』してしまつたのであらうか。入門の大著を孜々として譯了した安田氏から、かくの如き無自信（と云ふよりは左翼ジャーナリズムへの阿附）を聞かうとは私は豫期しなかつた。氏は單に醫學者として精神分析を譯したと云ふが、實質的價値を認め得ざる著述を譯するにそれほどの努力を拂ふとは、氏の商賣熱心に對して、私は寧ろ驚嘆の聲を禁じ得ない。かゝる矛盾はこれまた氏に無意識國への實地探檢の經驗なきための醜態であると云つて差支へないと思ふ。雜誌「變態心理」を經營して永年精神醫學と精神分析とへの研鑽を積まれた中村古峽氏にもまた、これほど甚だしくはないまでも、これと似たやうな無自信が見られたのではなからうか。氏はフロイドを譯し、ユングを紹介してゐられるが、現在の氏の療法は森田正馬博士あたりの立場に近いのではなからうかと遠察してゐる。或は私の誤解であるかも知れない。始めから精神分析への無理解を公示せられた森田正馬氏は寧ろ正直であり、勇敢である。氏の立場への批評はやがて私が本誌上に試みるであらう。

かくの如く自信なく、定見なき精神分析研究者の群の間に立つて、嶄然巨岩の如く終始その態度を二三にせざるものに丸井博士がある。氏は東北醫大の精神科を背負ひつゝ他の官立大學に率先して、この官學並びに漸次官學化しつゝある諸私立大學に嫌はるゝ精神分析を奉じて既に十餘年、治療に、研究に、子弟の薫育に不斷の努力を拂はれつゝあることは、誠に敬服の至りであつて、遂に最近は同大學研究室の業報として「精神分析論叢」を不定期に公刊せらるゝこととなつた。その實績と內容とに就いては、他日細評の機會あるであらうが、只今はたゞこの事實の指摘と推讃とに止めておくであらう。

右に述べて來たやうに、これまで醫家は、概して云へば、精神分析への理解者としても、同情者としても、大して大きな貢献をなされたと云ふわけには行かない。最初の紹介者が心理學者であつたごとく、今日の一般化の貢献が醫家出身者以外の人々の努力に負ふところ大であつたことを我々は認めざるを得ない。そのことは英國やフランスに於ける斯學弘道の歴史と大体似たやうな經緯をなしてゐるやうに思はれる。然るに只今となつては、醫家が精神分析を自家の專有として壟斷し置かむとの傾向が、既に早くも現れかけてゐることは、歐洲諸國に於ける場合とその軌を一にして、誠に面白い現象と云はねばならない。現に精神衛生學會發行するところの雜誌『腦』の本年二月號に於いて同誌記者は『精神分析學論叢』第二號を紹介した文中でかう云つてゐる。

『近來、精神分析に關する著書、市井に簇出し、斯學に何等經驗なき人の手になる著書、譯書なども刊行され、剰へ醫家に非ざる者の精神分析療法さへ營まるゝ狀態にあり、正當なる斯學の流布發達を妨げられ、誤認され勝ちな氣配さへ見られたが……』云々と。

『斯學に何等經驗なき人の手になる著書』の存在はわれまだ知らないが、『譯書』の方は慥に存在してやるやうである。然もそれが醫學博士や大學教授の肩書の下にかくれて横行してゐることは、醫學者（恐らくは、醫家出身であるらしい『腦』記者を包含して）自身の責任ではなからうか。また『醫家に非ざるものゝ精神分析療法さへ行はるゝ狀態』と云ふ一句に至つては、同誌記者自身の精神分析への無知を曝露せるものである。試みにフロイドの『精神分析五講』や『精神分析運動史』や『非醫者の分析可否の問題』などの諸論を精讀せよ。斯學の鼻祖が醫家に斯學壟斷權のないことを如何に痛論せるかを發見するであらう。前にも私が既に論じた通り、精神分析への理解可能の第一條件は、その人に無意識國探検の經驗ありや否やに在る。それと同樣に、分析治療者としての第一の資格は、その人に他人の無意識心理への感情移入力（感じ込みの力 Einfuehlungskraft）ありや否やにかゝつてゐる。フロイドは勘（Fein-

hörigkeit 微妙な知解力)(註)と云ふ語を用ゐてゐるが、云はゞ讀心術である。この正確微妙な讀心能力の存在が分析には先づ第一に必要な資格であり、素質である。これが缺けてゐたのでは、如何に醫學上の知識があつても、分析者としては落第である。

註 拙譯『分析療法論』二六九頁參照。

勿論、醫學の知識は必要ではあるが、この方面の知識は、他の諸々の精神科學上の知識と共に、必要なれども未だ十分ならざる知識であつて『必要にして且つ十分なる』知識では、決してないのである。或る醫師がフロイドの分析治療を受けつゝ、フロイドに向つて、近頃非醫者にして分析治療をなすもの丶多きを憤慨せる對し、フロイドはかく答へたことが、彼の『分析療法論』の中に書かれてある。『我々は既に三ケ月間互に分析治療の事に從つて來たが、その間一度でも醫學上の知識を必要とすると信ぜられた場合があつたか』と。それに對して患者なる醫師は否と答へざるを得なかつたので、フロイドはそれ見よ、そんなに偏狹なことを云ふに及ばないではないか、と答へたと云つてゐる。併し心身の相互關係が密接であることが明かである以上、勿論醫學上の知識は必要である。フロイドは決してこれを拒否するものではない。併し精神分析にとつては、醫學の知識は相對的重要さを要求し得べきものであつて、それは民俗學の知識、夢の知識、傳說、神話、文藝學の知識などゝ並行して必要とせらるゝ知識である。分析者としての第二次の重要條件は、その人が優秀なる他の分析者に依つて完全に分析せられた人であることである。この意味に於いての有資格は、遺憾ながら現在日本の醫家の間には一人もないことは彼等自身のよく知るところであるが、併し私はさらまで極端に形式的資格論を云々すべきでないと考へてゐる。我々は『腦』記者、並びにそれと同程度の分析知識所有者が、徒らに無意義なる反感と、利己的な特權感情とを振廻すことなく、諸方面の知識を互に精神分析の他の分野のものと交換し、融通することに依つて眞理の大道に提携邁進するの雅量と友情とを示されむことを希ふて

やまざるものである。
精神分析學は将來の醫學に、教育學に、文學に、民俗學に、社會學に、その他およそ精神科學に交渉あるあらゆる分野に於いて、重大なる興味と交渉とを有すべき學問である。我等こゝに本誌を創刊するは、實にその期するところ遠く且つ深し。乞ふ、天下の衆智、われ等と協力して、わが國の文明を一層顯揚し、わが民族の進展を一層自由ならしむるに努め給はむことを。

附言 本誌はフロイドの精神分析を中心として、日本民族の無意識心理の研究と論評とを目的とするが、他派の分析學に對して末社的偏狹を示すものに非ず、心理學一般への必然的聯關を無視するものに非ず、極めて廣汎なる興味と公平なる立場とに即するものであることを明言してをく。本號は『フロイド喜壽祝祭劇』の上演臺本の掲載などありて、その編輯方針は臨時的であるが、原則としては、論說欄、研究欄、時評欄、所報欄海外斯學界消息欄、相談欄、文藝欄などより成立すべきものであることを斷つておく。

7

エディポス物語と佛典中の類似傳説

長谷川誠也

有名なエディポス劇の基となつた傳說の起原については、神話傳說の硏究者の間に、種々の說があり、また、その解釋にも異つた見方があるから、假りにもこの物語について何事かを書くとすれば、諸說の要點だけでも紹介しなければならぬ。しかし、それだけを書くにしても、十數ページを要することであり、また實は容易な仕事でもないからこゝには一切それらを省くことにして、ただこれだけのことを言つて置く。この物語の構造は、決してギリシヤ特有のものではなく、世界いづれの民族も、これと同じい骨組のものに種々異なつた衣裳（外形）を着せた傳說をもつてゐると言つて差支へなからう。勿論、類似傳說をもたない民族の例もあらうが、これはその民族が初めからこれを持たなかつたのではなく、その倫理思想の發達が、これを押潰してしまつたか、あるひは藝術的才能が巧みに塗り隱してしまつたから、絕無のやうに見えるのであらう。實にこの構造の骨子は世界的に行渡つてゐるもの、あるひは發生してゐるもので、外形上は全く異なつた神話傳說でも、これを仔細に分析して見れば、この核子の現れて來る例が意外に多からう。

こゝに佛典中から、この物語に類似の例を擧げよう。これらは佛教書を繙く人の能く知つてゐる話であるから、今

さら列記する必要もないやうなものだが、精神分析の立ち場から見るならば、說教や教訓の例としての意義以外に、何等かの內容をもつてゐると思はれるから、新らしい研究題目のつもりで、二三を拾ひだして見よう。

エディポス物語と頗る好く似てゐて、しかも露骨であるものは、摩訶提婆（大天）にまつはつてゐる傳說である。大天は何時頃の人か、判然としてゐないが、專門家の說に據れば、阿育王の時代か、あるひはそれを去ること遠くない時代の人である。彼は鷄園寺の布薩會の時に、五事の新說を唱へて、教團を駭かした人で、この學說のために、上座部と大衆部とが分離したとさへ傳へられてゐるところから見れば、彼は當時の佛教界における進步主義の自由思想家であつたに相違ない。

註 布薩には、善宿、淨住、長養などの譯語がある。その意味は、僧侶が集まつて清淨の修養をすること。五事の新說とは（一）餘所誘（二）無知（三）猶豫（四）他令入（五）道因聲故起のことで、いづれも心理學的研究の好題目となるものであるが、今は些少の說明をも加へないことにして置く。

ところで、彼の品性に關しては、正反對の說が傳へられてゐる。即ち一方には、彼こそ當代無比の學德兼備の大士であつたと言ひ、他方には、曾て三逆罪を犯した極惡人の改心した者であつたと傳へてゐる。この兩說、いづれが正しいかを詮議するのは、佛教史の研究者にとつて、非常に興味多いことであらうが、われ〳〵の問題ではない。われ〳〵にとつて興味ある點は、三逆罪を犯した人と言ふことだ。その傳說によれば、かうである。彼は摩揭陀國の東南に當る末土羅（あるひは摩土羅）の商人の子で、父の不在中、母に通じ、父の還へるや、事の發覺を恐れ、母と共に父を殺して、巴連弗城に逃げた。こゝで、曾て供養したことのある羅漢に遇つたが、その人によつて、醜事の傳へられることを懼れて、これを殺した。その後、母が他と通じたことを知り、怒つてまた母をも殺した。かやうに三逆罪

を犯したので、深く恐怖し、後悔して鷄園寺で出家した。彼は天性聰敏であつたから、久しからずして三藏に通じ、國王の歸依を受けて宮中に出入するやうになつたが、遂に王妃とも通じたと。

大天が、傳說にある通りの來歷の人であつたか、どうかは分からないが、三逆罪は、おそらく保守主義の教徒が、自由思想家たる彼に塗りつけたものであらう。戒律を重んずる佛教徒から見れば、異說を唱へる者を非難する最上の方法は、彼を罪業極重の者とすることであつて、それには、夢想に現れる不倫關係並びにそれを中心とする行爲を、彼の一身上の事實として附會する策に勝るものはあるまい。かやうな不倫關係が、太古において盛んに行はれたか、どうかは別問題として、かやうな夢想が、大昔から人類を惱ましたこと、また、人類の指導者が、教化のため、あるひは異端征伐のための材料として、これを利用したことは、想像するに難くない。インドにをいても、有史以前からこの夢想の投射と見なすべき物語が、種々の形態と目的とをもつて語り傳へられたに相違なく、さうして大天は、保守派から嫌はれたために、このやうな傳說の衣を着せられた一例となつたのだらう。

なほ大天傳說と類似の例を擧げれば、『大般涅槃經』の「梵行品」の四に出てゐるものだ。曰く「波羅奈城に、長者子の阿逸多と名づくる有り、その母に通ずるが故に、その父を殺す。母更に外に通し、尋いで復たこれを害す。阿羅漢あり、これその知識なり。この知識にをいて愧恥を生じて即ちこれを殺す。殺し已りて即ち祇洹精舍に到りて出家を求欲す」と。實に大天傳說そのまゝである。この兩傳說のいづれが古いものか。それはこの經典の作られた年代を判定すれば、おのづから分ることであらうが、それを檢べたところで、兩傳說を特異な、獨自な變種として取扱ふならば見當違ひであらう。兩者の根柢が、無意識的過程から發生する夢想の形態にあることは、研究者の常に念ずべき要件であらう。西洋の例について言へば、若しエディポス傳說とイスカリオテのユダ傳說とを比較して、全く別種な根元から發生してゐると論斷するならば、たゞに史的研究不足の非難を蒙るばかりではなく、心理學的考察の缺乏

といふ譏をも免れ難いだらう。

さて、母子との不倫關係はなくとも、殺父の大罪を犯した例は、佛典中に多く擧げてある。その最も有名なのは阿闍世王の傳說である、阿闍世は摩揭陀國王、頻婆裟羅の子で、釋迦時代の人、最初は佛陀の法敵たる提婆達多に歸依し、父王を弑し、母后韋提希を幽して王位に即いたが、後には釋尊の敎訓によつて熱心な佛敎徒となり、且また四隣の强國を征服し、中インドの盟主となり、佛敎のために大いに盡力し、佛滅後、第一回の佛說結集の時に、大きな援護を與へたと傳へてある。彼の惡行については、前記の經典中、「菩薩品」に傳へてあるものが簡單であるから、左にその要點を摘記しよう。

「時に提婆達多……善見太子（阿闍世の別名）の所に往至す。善見見已りて即ち問ふ、聖人何が故ぞ顏容憔悴し憂色あるやと。提婆の言はく、我常に是の如し、汝知らざるか。善見答へて言はく、願くはその意を說け、何の因緣もて爾るや。提婆言はく、我今汝と極めて親愛を成ず、外人、汝を罵りて以て非理となす。我是の事を聞く豈憂ひざるを得んや、と。善見太子復た是の言を作す。國人云何が我を罵辱すと。提婆言はく、國人汝を罵りて未生怨となす。善見言はく、何が故ぞ我を名づけて未生怨となす、誰かこの名を作すと。提婆言はく、汝未生の時、一切の相師皆この言をなさく、是の兒、生じ已りて當にその父を殺すべし、この故に、外人皆悉く汝を號して未生怨となす。（母后は相師の言を聞いたので）毗提夫人（韋提希）旣に汝が身を生じて高樓の上において之を地に棄て、汝が一指を壞す。この因緣を以て人また汝を號して婆羅留枝（折指と譯す）となす。我これを聞き已りて心に愁憒を生ずれども、しかもまた汝に向ひてこれを說く能はずと。

提婆達多、かくの如き等の種々の惡事を以て敎へて父を殺さしむ。若し汝が父死せば、我も亦能く瞿曇沙門を殺さんと。善見太子、一の大臣の名、雨行といふに問ふ、太王何が故ぞ我がために字を立てゝ未生怨となすと。大

臣即ち爲にその本末を說く。提婆の所說の如く異なるなし。善見聞き已りて即ち大臣と父王とを收めて之を城外に閉ぢ、四種の兵を以て之を守衞す。（王妃は國王の幽閉されてゐる處へ訪ねて往つたが、番兵が通さなかつたので、大いに怒つた。この事が阿闍世の耳に入つたので、彼は怒つた。）善見即ち母の所に往き、前んで母の髮を牽き、刀を拔きて斫らんと欲す。その時、耆婆白して言はく、大王、國ありて已來、罪極重なりと雖も女人に及ばず、況や所生の母をやと。善見太子是の語を聞き已りて、耆婆のための故に即ち放捨し、父王の衣服、臥具、飮食、湯藥を遮斷す。七日を過ぎ已りて王の命便ち終る。」

これからが阿闍世王の煩悶の生涯で、その事は同經典の「梵行品」に書いてある。この話の內、相師の言と棄てられて指一つを壞した點とを、エディポス傳說に比較して見てはどうか。

一般に傳へられるところによれば、エディポスと言ふ語の意味は「腫れた足」で、これは彼が棄てられる時に、突刺された足が腫れてゐたからだと言ふのだ。指と足との相違はあるが、呪はれた二兒が、おの／＼傷ついてゐたといふ點は注意すべきことであらう。たゞし、エディポスの意味の「腫れた足」といふのは、語原學上の誤謬で、本當は「聰明」の義であるとすれば、負傷のことは問題とならないが、その代りに、阿闍世の別名善見と、エディポスといふ名とを比較研究したくなる。しかし、今の私には、何も言ふだけの考へはない。

阿闍世王の懊惱を慰めるために、悉知義といふ大臣の說いたところに據ると、殺父の罪を犯した者はなか／＼多い。

「王聞かずや、昔者王有りて名を羅摩と曰ふ。その父を害し已りて王位を紹ぐことを得。跋提大王、毗樓眞王、那睺沙王、迦帝迦王、毗佉舍王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、是の如き等の王は、皆その父を害して王位を紹ぐことを得たり。（中略）今現在にをいて、毗瑠璃王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王、是の如き等の王は皆その父を害す。」（大般涅槃經、梵行品四）

數へて見ると十五の例が擧げてある。なほ同經典中の耆婆が擧げた例には、北天竺の細石といふ城の王、龍印といふものも、この仲間である。これらの例は、みな史實であるか、どうかは不分明であるが、かう澤山に列べられると慄然として精神分析學者の研究に想ひ及ばざるを得ない。

かやうな罪業の話を知つてゐたインドの思索家達は、犯罪の原因、もしくは罪業談の由來を探究せずにはゐられなかつたらう。さうして、史實については、逆罪を犯した者の周圍の事情を檢討するくらゐでは滿足し得なかつたらう。何故と言へば、かやうな惡逆な行爲は、環境の狀態ばかりで說明し盡くされるには、余りに複雜であり、根深くもあるからだ。また彼等は、傳說の大多數は虛構談に外ならぬと見たとしても、何故にこんな忌はしい話が多く作られたかについて考察したに相違ない。だから、インドの文獻を涉獵してゐる學者につくならば、幾多の解釋の例を聞くことができるだらう。

私の讀んだだけの佛典の範圍では——甚だ狹いものだが——『瑜伽師地論』と『阿毘達磨俱舍論』とにある一つの說述は、かやうな傳說發生の由來を研究するに當つて、見落してはならないものである。兄の無著（瑜伽論の著者）も、弟の世親（俱舍論の著者）も、共に逆罪の原因を直接に說明するつもりではなく、たゞ人間出生の由來を闡明したに留まるのだが、今日から見れば、その解說が、傳說研究の鍵となるのである。

先づ俱舍論の方から引用しよう。同書の「分別世品」第三の二に、左の說述がある。

「是の如き中有は、所生に至らんが爲に、先づ倒心を起こして欲境に馳趣す。彼は業力の起こす所の眼根に由りて、遠方に住すと雖も、能く生處の父母の交會するを見て、倒心を起こす。若し男ならば、母を緣じて男欲を起こし、若し女ならば、父を緣じて女欲を起こす。これに翻じて（父母の）二を緣じ、俱に瞋心を起こす。故に施設論には、是の如き說あり。時に健達縛は、二心の中にをいて隨一現行す。謂はく、愛或ひは恚なり。彼はこの

二種の倒心を起こすに由りて、便ち己が身と所愛と合すと謂ひ、所遺の不淨の泄れて胎に至る時、これ己が有なりと謂ひ、便ち喜慰を生ず。この蘊の厚きによりて、中有は便ち沒し、生有の起こり巳るを、結生すと名づく。」

註　中有とは死後から生に至るまでの間の存在のこと。神秘的な特殊な靈魂と思つては佛敎々理に違ふことになる。健達縛（尋香と譯す）といふのは、中有の別名と思へば宜しい。これは、香氣を食とし、長くは七々日間存在するといふことだ。これに翻じて云々は、男が父に對し、女が母に對すれば、と解してよからう。施設論は說一切有部宗に屬する論部の一書の名である。

次ぎに瑜伽論の說を引用しよう。同書の「本地分中五識身相應地」第一に、人間出生の由來を、左のやうに說明してゐる。

「彼（補特伽羅）即ち中有の處にをいて、自ら己れと同類なる有情の嬉戲等を爲すを見て、所生の處にをいて希趣の欲を起こす。彼その時にをいて、その父母共に邪行を行つて、出す所の精血を見て顚倒を起こす。顚倒を起こすとは、謂はく父母邪行を爲すを見る時、父母この邪行を行ずと謂はず、乃ち倒覺を起こして、己れ自ら行ずと見る。自ら行ずと見巳つて便ち貪愛を起こす。若し當に女と爲らんと欲すべくんば、彼即ち父において便ち會貪を起こし、若し當に男と爲らんと欲すべくんば、彼即ち母において貪を起こすこと亦爾り。乃ち往いて逼趣す。若しくは女は母において、その遠く去らんと欲し、若しくは男は父において心亦復た爾り。この欲を生じ巳つて、或ひは唯だ男を見、或ひは唯だ女を見る。」

註　補特伽羅とは說明しにくい語だが、簡單に言へば、有情の異名、即ちしば〳〵輪廻し、六趣の生を受けるものゝ意である。數取趣、趣向などの譯語がある。或場合には人とも翻ずる。

兩說は全く同一である。無著、世親の兄弟は、健駄羅國の人で、その年代に關しては、種々の異說もあるが。大凡

西曆紀元後三五〇年から同四五〇年の間の人と見て大差なからう。そこで、瑜伽論は當時の大乘教思想の百科全書と稱すべきもの、また俱舍論は當時の上座部系統の學說を批判的に總合した百科全書と見なすべきもので、兩書には、昔からの思想並びに當時發生しつゝあつた學說が多分に收錄されてゐると言つて差支へあるまい。

引用文の學說が、無著、世親の創見でないことは、施設論を引證してゐる點からも、容易に推定される。この書は、釋迦の直弟子、迦旃延の作と傳へられてゐる。果してさうか、疑問であるとしても、余程古いものであることは疑ひない。それればかりではなく、俱舍論の「分別根品」第二には「契經に言ふが如し。時に健達縛、二心の内において隨一現前す。謂はく、或ひは愛と俱なり、或ひは恚と俱なり、等」と書いてある。だから、大思想家兄弟の傳へた如上の學說は、西曆紀元前、かなり古い時代に發生してゐると言つても差支へなからう。親子關係に發生する愛憎心理の起原に關するこの說明は、空想的、神話的、形而上學的であると、一概に排斥すべきものではなからう。その起原を性慾に置き、健達縛と兩親のいづれかとの同化を說く點は、十分に考究さるべき價値あるものだ。親子不和の實例または傳說の解釋にあたつて、この學說の鍵を用ゐたインド思想家の例が、どれほど有るか。また、この學說は、無著、世親以後、いかに訂正されて發展したか。それは專門家に聽いて見なければ分からないことだが、精神分析を研究する人々は、單獨にこれを新らしく見直さねばなるまい。それは、インドに發芽した心理學を、現代に復活させる一つの方法でもある。(をはり)

15

J・A・シモンヅのひそかなる情熱（一）

江戸川亂歩

私は此頃、古めかしいジョン・アディントン・シモンヅの人間なり業績なりに、不思議な興味を感じ始めてゐる。この十九世紀末のイギリスの特異なる文學者は、日本では恐らく明治中期頃に既に注目されてゐたこと丶思はれるが、彼の纒つた飜譯は全く出てゐない様だし（私はたゞ一つ、昭和五年に出版された田部重治氏譯の『ダンテとプラトーとの愛の理想』といふ小冊子を知つてゐるに過ぎない）彼に關する評論なども、英文學史としての外に雜誌の類にも度々發表されたことでもあらうが、一つも讀む機會を得てゐない。隨つて私はシモンヅが日本の讀者にどんな風に受取られてゐるかを全く知らないのである。

シモンヅは詩を憬れ、詩人であることを深くも願ひながら、天分を卑下するの餘り、數多の詩作はあつても、それに主力を注がうとはせず、文藝美術の史的研究に沒頭して、その方面に多くの力作を殘したのであるが、代表作は云ふまでもなく『イタリー文藝復興』七卷の大著であつて、前後十一年に亘る熱情を打ち込んでゐる。それに次ぐ名著は恐らく『ギリシヤ詩人の研究』であらう。これも大著と云ひ得るもので、この研究が彼のルネツサンス藝術への情熱の素地を爲したことは容易に推察出來る所である。その他の一般的な著作としては、『イギリス劇文學に於けるシ

ェークスピアの先驅者達』一卷、藝術論集『思辨と示唆の論文集』二卷、詩人らしい感想や論文を集めた『青の主調音にて』一卷（前揭田部重治氏の譯はこの內の一文である）イタリーとギリシヤに關する紀行評論の三著、彼が後半生を送つたスヰス高地の生活を記した一著などを上げることが出來る。

一方彼には各方面の藝術家個人の傳記評論の多くの力作がある。その最も著しいものは『ミケランジエロ傳』二卷であつて、彼がミケランジエロに注いだ情熱、研究態度の忠實な點、內容の詳細を極めてゐる點、世界各國人の手になる夥しいミケランジエロ傳中、屈指の好著であらう。それに次いで、同じルネツサンス、イタリーの彫刻家ベンヹヌト・チエリーニの異樣なる生涯を記した有名な自敍傳の英譯二卷があり、名譯の評が高い。又、同じくイタリーの劇作家『カルロ・ゴッツイ傳』二卷がある。それに小著ではあるが『ダンテの研究』と『ボツカチオ評傳』がある。自國の藝術家では、詩人フイリツプ・シドニイ、劇作家ベン・ジョンソン、詩人シエリ等の夫々の評傳を著してゐるし、外に彼が深くも傾倒したアメリカの詩人ヲルト・ホヰツトマンの研究がある。

飜譯では、先に記したチエリーニ自傳の名譯の外に、多くの詩の英譯があつて、その內纒つてゐるのは『ミケランジエロ及カムパネラの短詩集』と、古代ギリシヤの女詩人サツフオの譯詩で、これは他人の編纂したサッフォ研究の書物に寄稿したものが殘つてゐる。（「ギリシヤ詩人の研究」に附錄として收められたサッフォの譯詩も有名である）

自作の詩集は公刊されたものは六冊程であるが、印刷はされても、部數が非常に少くて、私版とも云ふべき詩集を數へると、全体で十冊程になる。それから、極く極く小部數の秘密出版と云つてもいゝ小冊子が二種ある。『ギリシヤ道德の一問題』と『近代道德の一問題』がそれだ。（この二著は私の小論に重大な關係を持つてゐるのだが。）

定期刊行物や他人の著書への寄稿を別にすると、シモンヅの著作は大体以上に盡きてゐる。これが彼の業績の全景である。私は無意味に書名を羅列したのではない。それらの著書は私の小論に、夫々多かれ少なかれ、切り放ち難い

17

關係を持つてゐるからである。又もう一つには、ある讀者には、このシモンヅの業績の全景を眺めることによつて、私がこれから云はうとしてゐる事柄が何であるかを、豫め推察することが出來るかも知れないと考へたからである。ある人の生涯の著作の題目は、多くの場合、人間としてのその人を雄辯に物語つてゐるものだ。

次に、J・A・シモンヅその人の傳記や研究で一冊の書物に纒つてゐるものとしては、左の五種をあげることが出來ると思ふ。

H. F. Brown, "J. A. Symonds, A Biography." (1895)

V. W. Brooks, "J. A. Symonds, A Study." (1914)

H. F. Brown, "Letters and Papers of J. A. Symonds." (1923)

Margaret Symonds, "Out of the Past." (1925)

P. L. Babington, "Bibliography of J. A. Symonds." (1925)

右の內私は第一のものと第五のものとを所持してゐるに過ぎず、他の三著は今の所未見であるが、第二のブルックスの『シモンヅ研究』は二百三十四頁の小冊子に過ぎないことが分つてゐるし、第三の『書翰及斷片集』はその主要なるものは、同じ編者によつて當然第一の『シモンヅ傳』に取入れられてゐるのだし、第三の『思ひ出』はシモンヅの三番目の娘さんの著述であつて、文學者としてのシモンヅよりも、家庭の人としての彼を書いたものらしく、娘さんの見た父の思出には、恐らく私の求めてゐる樣な記事は發見出來相もないので、この三著は未見であつても、私の小論には大したさし響きはない樣に思ふ。

右の第一の『シモンヅ傳』の編者ホレショ・F・ブラウンは、シモンヅの年下の親友であつて、遺族とも親しかつたので、シモンヅの書き溜めて置いた遺稿を完全に手に入れることが出來た。

そこで、彼はシモンヅ傳を編むに當つて、全く編者の主觀を挾まず、遺稿である長文の自敍傳を土臺にして、それに故人の日記と、友人達から借り集めた故人の書翰とを年代順に適當に配列することによつて、忠實無比なる二卷の傳記を作り上げた。

詩人アーサー・シモンズも、その人物評論集 Studies in Prose and Verse のJ・A・シモンヅの章で、ブラウンの傳記編纂振りを激賞してゐる樣に、我々はこの忠實なる傳記によつて、殊にそこに收められたシモンヅ自身の僞らぬ自敍傳によつて、彼の諸著作からは、假令察することは出來ても、實證する術もなかつたであらう色々な事實を、彼の惱みを、彼の心の秘密を知ることが出來たのである。

尤もブラウンは『傳』の中に、シモンヅが書き溜めて置いた自傳なり、日記なり、書翰なりを漏れなく收錄したのではない。そこには取捨選擇が行はれてゐる。餘り重要でない爲に省略された記事も無論あつたであらう。併し假令重要であつても、ある事情の爲に故意に省略された部分があつたのではないか。私はどうもそんな風に思はれて仕方がないのだ。別に確證がある譯ではないけれど、例へば『傳』中にはシモンヅの著述は漏れなくあげられてゐるにも拘らず、前掲の私的出版の二著『ギリシヤ道德の一問題』『近代道德の一問題』については、一言も觸れてゐないこと、又、シモンズは性心理學者のハヴロック・エリスと親交があつたらしく、彼と共著の書籍さへあるのに、傳中その書籍のことは勿論、エリスの名さへ一度も現はれてゐないこと、又、シモンヅは千一夜物語の英譯者として名高いリチャード・バートンとも親交があり、彼に與へた興味ある書翰をブラウンが所持してゐたことは、他の方面から明白であるのに、傳中バートンへの手紙は一通も示されず、僅かにシモンヅがバートンの死をひどく悲んでゐる言葉が別の一友人への書翰の中に出てゐるに過ぎないこと、(これらの點については後に再び觸れる機會があらう)などの事實から推して、私は右に云ふある事情からの故意の省略が行はれたことを、殆ど信じてゐるのである。だが、そのあ

る事情といふのは、編者ブラウンの側のものではなく、シモンヅ自身に關する事柄なのだから、ブラウンの省略は友人としてまことに當然のことであり、地下のシモンヅもその思ひやりを恐らく感謝してゐることであらう。併し、その様に注意深い取捨選擇が行はれたにも拘らず、私が以下『シモンヅ傳』の中から拾ひ出さうとする幾つかの事柄は、流石にブラウンも省略し兼ねたのに違ひない。傳記としてそれ程貴重な材料であつたからだ。そして又それらの出來事の表現の仕方が甚だ抽象的であつて、少しも厭な感じを與へないからでもあつた。と私は想像するのだが。

さて、私はかくも長々しい前置を以て、一体何を語らうとするのであるか。シモンヅの精神上の深い惱みについてか、生涯彼をさいなんだ肉体上の病氣についてか、それとも彼の幻想的な情熱の詩についてか、或は彼の古代ギリシヤやルネツサンスに關する厖大な研究についてか。いやさうではないのだ。無論それらの凡てに密接な關係を持つてゐる事柄ではあるけれど、私は今、さういふ普通の見方とは全く違つた角度から、シモンヅの人と事業とを眺めて見ようと思ふのだ。それは確かに異常な視角からである。だが、シモンヅに限つては、どんな他の方角からよりも、この方角から眺める時、初めてその人間と事業との眞相に觸れることが出來るのではないかと、私は考へてゐる。

この小論の出發點として、私は先づシモンヅ自傳に現れた彼の不思議な夢を選ぶことにする。

シモンヅは夢には甚だ緣の深い人であつた。少年時代の彼は病身で、內氣者で、晝間さへ夢見てゐる様な子供であつたから、夜の惡夢や美しい夢に襲はれ續けたのは何の不思議もないことであつた。その上に彼は夢遊病をさへ患つたことがあるのだ。私はまだその詩集を手にしたことはないけれど、一八九三年に出版された Midnight at Balae には彼が實際見たといふローマの夢の數々が歌はれてゐるし、ブラウンが所持してゐるといふ著作年代不明のタイプライターで叩かれた Miscellanies と題する散文集には、『夢の國にて』の一文に彼の十の眞實の夢が語られてゐる由で

ある。更らに、夢との緣は彼一代に止まらず、醫師であつた彼の父に Sleep and Dreams（一八五七年再版）の著述さへあるといふ。

同じ夢を繰返し見るといふことすら、常人には寧ろ珍らしいのだが、シモンヅはその繰返す夢を幾種類も經驗した。自傳に記されてゐる最初の繰返す夢は、彼が七歳未滿の幼時に現はれたものであるが、それは、夢の中のシモンヅが自邸の客間で人々と座つてゐると、入口のドアがひとりでに細目に開いて、そこから一本の指が這入つて來る。見てゐると、ドアを辷り込んで來た指の根元に手がないのだ。そのうしろに人間の身体もないのだ。たゞ一本の青白い指だけが、フワ〳〵と宙を漂つて、關節を曲げて『お出で〳〵』をしながら、段々こちらへ近づいて來る。しかもそれが、夢の中の同席の大人達には少しも氣附かれず、たゞシモンヅ丈けに見えるのだ。ア、、あの指奴が、今に私の身体に觸つたら、それとも同席の誰かの身体に觸つたら、と思ふと、幼いシモンヅは何とも云へぬ恐怖を感じないではゐられなかつた。だが、その指が誰かに觸るといふカタストローフが來る前に、彼は恐れの餘り目を覺すのが常であつたといふ。

もう一つの夢は、十四歳の頃に現はれたもので、夢の中でフト氣がつくと、彼のベッドの中に、彼の身体とくッついて、冷い人間の死骸が橫はつてゐる。怖さに夢の中で飛び起きて、部屋を逃げ出し、暗い廊下を走つて行くと、どこまで逃げても、その行く先々に、ちやんと死骸が立ちはだかつて、彼の來るのを待ち構えてゐるといふ夢であつた。（それが誰の死骸であつたか、男性か女性かも、自傳には記されてない）彼は死骸を遠ざかる爲に、家中を逃げ廻つた。夢見ながら、しかも眞實にも逃げ廻つたのだ。つまり彼は、その夢が動機となつて、夢遊病にとりつかれたのである。

シモンヅの夢中遊行が餘り甚しくなつたので、彼の父は子供の足を、夜中ベッドに縛りつけて置く方法によつて、

21

この悪癖を治さうとした。だが、縛りつけられても、例の死骸はやつぱり現はれるので、夢中でベツドから轉り落ちて目を覺ますことが屢々であつたけれど、結局父の治療法は効を奏して、それ以來夢遊病には罹らなかつたといふことである。

これらの夢は夫々に、無論何かの意味を持つてゐるに違ひない。そして、それは若しかすると、これから述べようとする私の小論に深い關係があるのかも知れないのだが、夢分析に不慣れな私には、これらの夢の意味を掴むことが出來ない。最初の指の夢には、胎兒であつた時に經驗した父のペニスの記憶であるといふ、公式的な解釋が當てはまるのかも知れない。又次の死骸の夢は、(それが誰の死骸であつたかを少しも記してゐない點に、何か意味がありさうにも思はれるが)極く單純に考へるならば、シモンヅはその頃までに、母と、生れて間もなく死亡した兄弟との死を經驗してゐるのだから、その何れかの記憶が、病身な彼に死の恐布と結びついて現はれたのかも知れない。

今私には、それ以上何も考へられない。又殊更らこの二つの夢にこだはる必要をも感じない。といふのは、私の小論の出發點として語り度いシモンヅの夢といふのは、實はこれとは別な、もつと單純明白なものであるからだ。隨つて私の理解力の範圍では、以上の夢は別段こゝに記す理由もないのであるが、夢分析に慣れた讀者の一考を煩はしたい下心から、省略を見合せたまでゞある。

では、私の語らうとする夢とはどんなものであるか。自傳の文章をそのまゝ借用すれば次の如くである。

『今度は一つの全く新しい形の夢が、繰返し私の安眠を妨げる樣になつた。それは、大きな青い眼をして、豐かに波打つ金髮が、朦朧たる光輪を發してゐる、一人の美しい青年の顏であつた。彼はじつと私を見つめながら、段々私の上にかゞみ込んで來て、遂に私の肌に觸れる、と見て眼を覺すのが常であつたが、すると青年の顏から發してゐた後光が、闇の中に溶け去つて行くのが感じられるのであつた。』

この夢は前に記した夢遊病の出來事があつたすぐあと、同じ十四歳の頃に現はれたものであるが、これが何を意味するかは、少し多辯な說明を要するのだ。大げさに云へば、シモンヅの一生涯を見なければ、この夢の本當の意味深さを知ることが出來ないのかも知れぬのだ。併し先づ、手取早くシモンヅ自身の解釋を記して見るならば、『斯樣に睡眠中に現はれた私の理想の美の幻影は、私の性格に深くも根ざしてゐる生得の憬れを象徵してゐた。そして、後年私が樣々の文藝美術から受けた深き感銘も、やはり同じ幻影の然らしむる所であつた。』

といふのである。かういふ眞正面からのシモンヅの解釋は、決して間違つてはゐなかつた。この場合、表面に現はれたものゝ裏を覗いて見ようとすることは、却つてこの夢の眞意を誤るものである。では、右の文中の『私の性格に深くも根ざしてゐる生得の憬れ』とは一体何を意味するかと云ふに、それについては、彼が同じ少年時代に遭遇した二つの著しい經驗を語れば、自ら明白になるのである。

自傳によると、シモンヅは十二三歳の頃、家庭教師について（念の爲に云つて置くが、彼はその男教師には殆ど好感を持つてゐなかつた）ギリシヤ語、ラテン語を學んでゐたが、ある日ホメロスの『イリアス』の最後の章を敎はつてゐた時、『唇と頤に薄ひげの生えそめる頃こそ、若者はこよなく美しけれ。』といふ二行の詩句にぶツつかると、その詩句の美しさに非常な衝擊を受けて、敎師の前も構はず、烈しく泣き出したといふのである。『イリアス』を見ると、この詩句は、ギリシヤ軍の勇士アレキスの爲に殺された。トロイ王の子ヘクトルの死骸を、父王プリアムが取返しに行くのを、ゼウス神の命をうけたヘルメス神が、一人の美しい人間の若者に姿を變へて、そのプリアム王の道案內をしてやる爲に出發する事を歌つた部分であつて、それらの敍事の間に、たゞ右の簡單な形容句が介在してゐるに過ぎず、常人にはそれ程の感動を與へやうとも思はれぬ箇所である。そんな何でもない部分を讀んで、シモンヅ少年が泣き出したといふのには、特別の理由がなくてはならない。

23

シモンヅ自身は自傳の中で、それをたゞこんな風に說明してゐるに過ぎない。『この二行のギリシヤ語が、飾り氣のない、しかも私を泣かせた程も美しい、年若き男性の幻影を、私の心に目覺めさせた。』又『この句の中にはあらゆるギリシヤ彫刻の美が含まれてゐた。青春の男性の壓倒的な神秘力に、私は淚を止め得なかつた。』又『咲き誇る花の若者に變裝したヘルメスは、私の心に永遠の憬れの深き泉を目覺めさせた』

併しこれ丈けの言葉では、彼の『生得の憬れ』といふものが充分には理解出來ないかと思はれる、それには古代ギリシヤの人々が、上述の二行の詩句の內容について、どんな考を抱いてゐたがといふことを、少し別の方面から觀察して見る必要がある。

この『薄ひげ』の形容句は、『イリアス』の姉妹編である『オデュッセイア』からも探し出すことが出來る。やつぱり美青年に變裝したヘルメスを歌つてゐる部分であるが、ギリシヤの勇士オデュッセウスが魔女キルケの住む島を征服する爲に上陸した時、途でそのヘルメスに會ふのだが、そこにも『頤に薄ひげ生えそめし青年の姿にて、その若さこそ世にも美しき魅力なれ』といふ意味の表現が使はれてゐる。

又、喜劇詩人アリストフアネスも、その傑作『雲』の中に、同じくギリシヤ少年の『薄ひげ』の魅力について歌つてゐる。たゞ彼の場合は、頤や唇の薄ひげではなくて、もつと違つた場所のそれについてではあつたが。

又、我々はプラトンの對話篇『プロタゴラス』の冐頭に、興味ある會話を見出すことが出來る。

友人『オイ、ソクラテス、どこからやつて來た。きつと、アルキビアデスの盛りの花を追ひ廻してゐたんだらう。ウン、僕もついこの間あいつに出會つたがね、やつぱり美しいわい。だが我々仲間の評判の通り、あいつももう男になつたね、頤を見ると、ちやんと立派にひげが生えてゐるぜ。』

ソクラテス『で、それがどうしたといふんだ。君はホメロスの說に不贊成を唱へようとでも云ふのかい。ホメロス曰

く（ひげ生えそめし若さほど、世に美しきものはあらじ）とね。で、我がアルキビアデスが丁度それなんだ。』

（J・ライトの英譯より）

といふ様なことを思合せると、シモンヅの所謂『憬れ』の目ざしてゐた方向を、大方推察することが出來るのだ。そして又、彼が『イリアス』を讀んで泣いたのは、あの夢よりは一・二年前に當るのだから、夢の中の美青年こそは、薄ひげ生えそめし花のヘルメスの顯現ではなかつたかと考へても、左程突飛な想像ではないのである。

併し、彼がこの『憬れ』について、一層ハツキリした感激を味ひ、『憬れ』に對する強い自信（?）を得たのは、ずつと後の十九歳の折であつた。それはハロウの學生時代で、當時プラトンの『アポロギア』を學んでゐた關係から、十九の年の三月、休暇を許された時、カリイのプラトン註釋本を買求めて、ロンドンの假寓へ持歸つたのだが、ある夜、假寓の主婦に誘はれて芝居を見に行つた歸つてから、床に入つて、何氣なくその註釋本を讀み始めた。

その時、彼は初めて『パイドロス』にぶツつかつたのだ。云ふまでもなく、非常にひきつけられて、眠るのも忘れて讀みに讀んだ。忽ち讀み終ると、次には當然『シンポジオン』の頁を開いて讀み始めた。そして、それを讀み切らぬ内に、いつしか夜があけて、窓に朝日がさしてゐたといふのである。

彼はその夜を、彼の長い生涯での最も重大な一夜であつたと告白してゐる。

『こゝに、このフエドラスとシンポジウムの內に、――この魂の神話の內に、私は長い間待ち望んでゐた啓示を得た。長い間育んで來た私のある理想の清めを得た。それは恰も、プラトーを通じて私自身の魂が私に語る聲の樣に感じられた。惱みは跡方もなく消え失せた。私は今や確固たる地盤に立つた。こゝに、比類なき文章の魔術によつて表現された、私自身の情熱の詩があつた。哲學があつた。』（自傳）

逆る感激の言葉だ。甞つて彼が『イリアス』を讀んで泣き出した折にも勝る興奮である。何故か。それは彼自身の

25

異常なる情熱についての幼時からの不安を、この二つの對話篇が、跡方もなく拭ひ去つてくれたからだ。大聖プラトンとソクラテスの權威が、哲學の名に於て、彼の情熱を裏書きし、勵ましてくれたからだ。

同性戀愛に關する言葉は、プラトンの對話篇の殆ど悉くに見出すことが出來るけれど、それを重要なる內容として語つてゐるものは、『シンポジオン』と『パイドロス』と『アルキビアデス』の三篇であつて、中でも前二者はその內容の優れてゐる點で、代表的なものと云へやう。そこでは、プラトン的ソクラテスが、縱橫の雄辯を揮つてエロス、ウラニオスを讚美してゐる。この愛情によつてのみ、俗人は嘗つて失つた翼を取戻し、神々の天界にまで飛翔し得ると……。

シモンヅはその樣な二篇に讀み耽つて夜を明かし、あの感激の言葉を漏してゐるのだ。彼が美しい若者の夢について告白した『私の性格に深くも根ざす生得の憬れ』が何であつたは、こゝに至つて、最早や疑を挾む餘地がなくなつたのである。（未完）

聯想試驗によるミュンスターベルク教授のヒステリ治療

田内長太郎

ヒステリ症や神經衰弱症の一治療法として、精神分析士(サイコ・アナリスト)の多くは、聯想試驗の法を用ひる。この聯想試驗とは、通常、試驗者が被試驗者に向つて或語を發し、その語によつて被試驗者の頭にうかんで來た最初の聯想の語を能ふ限り速かに答へさすものである。そこで當の分析士(アナライザト)は、その間に要した時間（聯想時間）の長短、その聯想語の性質、聯想時の態度等から、被試驗者の心理作用を分析し、その結果ヒステリや神經衰弱の由つて來たるところの心的故障を闡明して、その故障を排除すると共にそれらの病症を治療するのである。

こゝではその精神分析士(サイコ・アナリスト)といふよりも、實驗心理學者フーゴー・ミュンスターベルク教授（一八六三年—一九一六年）が行つたその種の聯想試驗及びそれに對する教授の見解を簡單に紹介する。

あらかじめ斷つておかねばならぬが、これはミュンスターベルク教授の著書『證人席に立ちて』On the Witness Stand（一九〇七年初版）の中に輯められた『犯罪の探知』と題する一記事から拔書するのであつて、もと〳〵この書物は著者がアメリカのハーヴァド大學で教鞭を執るかたはら、近代長足の進歩を遂げた實驗心理學をば、法律の方面

にもつと廣く應用すべきだといふ意見のもとに、樣々の實例について論說して、連續的に雜誌に發表した記事を集めたものである。さうしてその『犯罪の探知』の中では、犯罪探知の方法として、從來の慘忍野蠻な拷問にとつてかはるものが、犯人の示す觀念聯合の測定と研究であるといふ次第を興味深く述べてゐる。その終りの方に、なほ聯想試驗は法律以外の方面でも有用な心理探知の仕事をする。例へば醫學界でヒステリ治療に應用せられるが如きがそれだといふ風に述べてゐる。以下紹介するのは、つまり、その條項である。

まづ、ミュンスターベルク教授自身の手がけた聯想試驗の一實例から示さう。

これは『一少女とチョコレート・ボンボン事件』とでも題すべきなか〳〵可憐な事件である。

その少女は可愛らしい娘であつたが、貧血症、神經衰弱氣味で、學校の試驗勉强をするのにどうも氣が散つていけないからと、教授に心理學的の診察を賴んで來た。

教授は彼女の日常生活の習慣に關して多くの質問を發した。その答の中で、彼女は食事の點では少しも異狀がなく、十分豐富に食物を攝り、お菓子を買ふことを禁じられてゐると確言した。そこで教授は心理學上の幾つかの試驗をやり始めたが、そのうちに最初はむしろ漫然と、平凡な聯想から出發した。この少女の聯想時間は人並よりも遲い方で、平均時間が二秒近くであつた。ところで、間もなく、「金錢（マネイ）」といふ語に對して、「キャンディ」（砂糖菓子）といふ語が、一・四秒時間の速さで答へられた。これにはちつとも不思議はない。だが、その次に發した「エプロン」といふ本來無害な語が、それの聯想を見出すのに六秒時間も要した、のみならずその聯想が「エプロン」――「チョコレート」といふ不適切なものであつた。この聯想時間の延引及びその不適切な聯想は、共にその前の一對の聯想「金錢（マネイ）」――「キャンディ」といふのが或情緒的衝擊を殘したことを示し、更に、さうして「チョコレート」なる語を彼女がそこに選んだのは、前に「キャンディ」なる語が不意に飛び出した結果、彼女の心理作用に或故障の起きたことを示

したのである。それといふのも、その「エプロン」といふ語には、キャンディ・情緒（イモーション）から産み出されるさうしたチョコレートといふが如き聯想と結びつく力は明らかに全然無かつたからである。

こゝに一つの手掛りを得た教授は、それから二〇の當りさはりのない聯想語を發して、徐々と彼女の心を鎮めた後で、再びお菓子の問題に立ち返つた。勿論、今度は彼女の方で警戒して、明らかに氣を配つてゐたのだつた。すなはち、二度目に「キャンディ」といふ語を投じてみると、その答に四・五秒もかゝり、しかもそれが素朴な聯想の「決して」never となつてあらはれるに至つたのだ。この「決して」は、實名詞でもなければ形容詞でもない。最初の聯想だつたのである。それまでの語はすべて明らかに彼女にとつて全然かけかまひのない物を意味してゐたのだが、はしなくも「キャンディ」が、彼女の拋棄したく思つてゐた或ヒント、或問題、或非難となつて、彼女に訴へたらしかつた。しかも彼女の一向氣づいてゐなかつたのは、さきの叙述的態度からさうした答辯的態度に遷つたその心的變化が頗る疑はしいといふことについてだつた。いや、却つて彼女はその返答にすつかり滿足を覺えてか、次の幾つかの聯想はその時間が短くもあり、適切でもあつたのだ。暫くして教授は再び同じ線を辿りはじめた。「箱」といふ別に怪しくない語に對して、これも別に怪しくない「白」といふ語が早速答へられた。だが教授には、それがキャンディのはいつた箱の色をさしてゐると直ちにわかつた。それといふのも、その次の「ボンド」といふ語が「二」といふ聯想をもたらしたし、それに續いた「書物」から、數秒の後に、sweet といふ不適當な聯想が引き出されたからである（sweet は「甘美な」で、言ふまでもなくそれが「お菓子」sweets に通じてゐる）。それでもなほ本人の少女は、さうして自分で自分の想像の經路を暴露してゐることには少しも氣づいてゐなかつた。三〇〇の聯想をやつて行くうちに、教授はその眼目（サブジェクト）をいろ／＼の形に變へて斷えず繰返した。ところで少女の方はその間に必要なだけの報告を全部與へたといふことを、たうとうおしまひまで知らずにゐたのである。

29

で、教授が彼女に向つて、「いや、よくわかつた。貴女は日頃晝食を拔きにしたりして、殆んど規則だつた食事をしてゐない。そのかはりにキャンディを毎日何ポンドも平げてゐるのだ。」と言つてやつた時の彼女の驚きは、羞恥の感よりもなほ一層大きい樣子だつたのである。彼女は淚と共に何もかも「告白」した。彼女は決してチョコレートを買はぬと兩親に誓つた手まへ、その無分別な常食(ダイエット)をそれまで秘密にしてゐたのである。

以上の正しい診斷からミュンスターベルク教授は正しい暗示を與へることができた。數週間の後には少女の健康氣力ともに恢復したのである。

右の實例でもわかるやうに、聯想試驗は患者の全然知らぬ間に、すなはち患者の氣持に些の苦痛や惱みも與へずして、その患者自身ですら氣づかなかつた事實を明るみへ出したり、また、その心の深底に結びついてゐながらも、記憶の單なる努力によつては意識に上すことのできないやうな諸觀念に、表現の機會を與へたりするものである。では、この聯想法といふ機制的手段から、一體どうしてさういふ結果が生まれるであらうか。惟ふにこれは、できるだけ速く聯想しようとする强制の慾望のもとに、若干の聯想が產出されるや否や、心が禁制の度のゆるんだ狀態になり、其處からそれまで抑壓せられ、忘れられてゐた觀念がどつと飛び出して來るのであらう。

「この事實は、われ〳〵がウィーン派の教導のもとに、次のことを學べば學ぶほど、いよ〳〵重要なものとなつて來なければならぬ」とミュンスターベルク教授は言ふ、「すなはち、このまことに厄介千萬な神經症の一つ――ヒステリは、專ら感情的の觀念が抑壓せられるところから生じる。だから、この病症はその抑制せられた思想を新たに目覺ますことによつて治療し得る。ヒステリーは『箝頓した情緒』strangulated emotion だ、それらの忘れられた情緒的觀念が意識的に表現せられるに及んで、それは消え失せるのである。」

Aといふヒステリ婦人は、何時も日沒の後で物が言へなくなつた、Bといふ婦人は、液體以外の食物をとることができなかつた、またCといふ婦人は、煙草の匂ひの幻覺に常に苦しめられてゐた。かうしたヒステリ症の徵候はどの醫師も數多く知つてゐる。それらの患者は一人として自分の惱みの理由もしくは起源を知らなかつた。おもむろに醫師がその抑壓せられた觀念を發見した、つまり、その抑壓せられた觀念が、自身を表現する機會を失つてをり、その禁制せられた形で災をなしてゐたからだ。

A婦人は數年以前に、父親が病氣のをり、一夕その枕頭に坐して、病父の安靜を亂すまいとあらゆる物音を一生懸命抑へつけたことがあつた。その最初の情景が彼女の心に甦るや否や、彼女は日沒の後でも聲を出すことができるやうになつたのである。B婦人は、これも數年以前に、或醜惡な病氣に罹つた男と同じ食卓に着いて、物を食べる時胸くその惡いのを餘儀なく抑へつけなければならぬことがあつたのである。さうした發足點が意識的に新しく聯想されるが早いか、彼女は人並に食事ができだした。また煙草の匂ひの幻覺に常に苦しめられてゐたC婦人は、ずつと以前のこと、煙草のけむりの充滿した室の內で、彼女の戀してゐた男が他の女と戀し合つてゐるといふことを偶然聞きこんだが、その時は人前であつたため彼女は湧き上つて來た激情を抑へつけなければならなかつたのだ。そこで改めてその煙草の匂ひをその最初の紛頓した情緖へ、意識的に結びつけるに及んで、彼女の長年の幻覺は忽ち消失したのである。

これを要するに、もしもその長い間忘れられた情緖的觀念（これから諸々の心的故障は發するのだ）を明るみへ出す事ができたなら、ヒステリ症の病癖や知覺缺乏、病的の衝動や禁制は、すべて除去されるのである。恰もこの際に當つて往々有力な助けになると思はれるのが聯想法だ。かくて、觀念の秘密の結合を發見せんとしてゐる心理學者は、彼の聯想法によつて、單に無辜の者を保護し、犯罪者の假面を剝ぐのみならず、また神經的の難破者に健康と氣力とをもたらすのであらう。（をはり）

文學批評と心理分析

——ハアバアト・リード氏の所説を中心として——

荒川龍彦

I

心理主義の文學が、從來顧られなかつた新しい領域の開拓に與つて大なるものがあつたことは、何人も否定し得ない事實であらう。それとゝもに心理主義の理論を以て文學批評の新しい方法としてこれを採り上げ、科學的意識としてでばかりでなく價値の意識に結合して文學研究の新開拓を試みる人々が出て來た。英國では、所謂ケンブリッヂ學派のI・A・リチアヅ氏などがその代表といつていゝと思ふ。しかしリチアヅ氏の心理學的文學理論は根底に價値論が横はつてゐるため屢々徹底した心理分析の方法に懷疑的態度がとられてゐる。それ故、氏に從へば、[1]フロイトの試みた無意識の領域は、必ずしも詩人の心理過程(メンタルプロセス)を探求するに有利なものとは思はれぬ。たとへ詩の創作に當つて多く無意識が働くものであつても、又無意識過程が意識のそれよりも重要だとしたところで、單にそれだけを以てしては危險である。フロイトのレオナルド論やユングのゲエテ論を見ても、[2]心理分析者(サイコアナリシスト)が批評家としての不適當を自ら示してゐる傾きがあるとリチアヅ氏はいつてゐる。そこでこの心理分析といふ新しい批評の方法も、結局リチアヅ氏などのやうに藝術の價値に對立して考へられては永久にこの方法の新機能の發展に同情が有てなくなる。又リチアヅ氏の

理論からは結局、十九世紀初頭のコウルリヂなどの傾向に歸つてゆくので、時代的にいつてもつと客觀的な立場に寄つた見方が必要である。そこで吾々は手近に、矢張り英國に於ける文學批評の一方の旗頭である所謂主知派と稱せられる文藝雜誌「クライテイリオン」を主宰するT・S・エリオット氏のグループの一人であるハアバアト・リイド氏の(3)所說をとつて見よう。リイド氏はエリオットと同じやうに文學に於ける主觀性や感傷性を排して、客觀性、合理性を重んずる。又一方、批評の方面にも主知性を說き、それとゝもに新しい科學的方法を採用して批評の發展の可能を說いてゐる。その一つにこれから紹介しようとする『心理分析と批評』(Psycho-Analysis and Criticism) といふ論文がある。茲で旣にリイド氏はリチアヅ氏の『心理主義』といふ廣い範圍から脫して、心理分析(サイコアナリシス)といふ確立された一つの科學を、はつきりとその對象に有つことによつて特長が窺はれる。

註

(1) I. A. Richards, *Principle of Literary Criticism*. P. 29. f.

(2) *The Psychology of the Unconscious*, P. 503.

(3) Herbert Read は一八九三年十二月四日に生れ、Leeds Unvrersity に學び、一九一五年から一八年まで大戰に從軍した。一九一九年以後 Victoria and Albert Museum の Assistant Keeper であり、現在 Edinburgh University の Watson Gordon Professor of Fine Art である。*The Criterion* に主として寄稿し、T. S. Eliot とゝもに批評界に大に活躍してゐる。又美術工藝にも造詣が深いといはれる。その方面の著に近刊 "The Meaning of Art" がある。詩集が三四冊出て、主として戰爭に從軍した經驗を取り扱つてゐる。批評、研究の本は、今日までに五冊出てゐる。その最も代表的なものは "Reason and Romanticism" 1926. で、心理分析の一文もこの中に含まれてゐる。詩論に "Phases of English Poetry." 1928 "Wordsworth" (1930) があり、散文の特性を研究した名著に "English Prose Style" 1928. があり、Essay 集として "The sense of Glory, Essays in Criticism" 1929 がある。

II

リイド氏に從ふと、文學批評が、これまで一般に感情的鑑賞であつたり、單に常識以上のものではなかつたがため

33

にそれから一歩科學的にまでそれを進めるにはその傳統に乏しかつた英國では非常に困難であること、たゞ『哲學の專門的過程』として心理學をとり上げて、これを文學批評にも應用しようとしたコウルリヂが擧げられるが、不幸にしてそれはメタフィジカル・スペキュレイションに終つてしまつたのである。併し今日では一層經驗的に科學的組織にまで發展しなければならない。科學といつても、物理學などは觀察態度などについての變化を促す、補助的な役割を文學或は文學批評の上に與へられる。併し一層文藝に對して近しい關係にあるものは心理學的なサイエンスであらう。文學と心理學は第一その素材に於て共通なるものを所有してゐる。併し心理學に近づく批評は科學と同樣な全くの無關心的（Disinterested）立場ではあり得ないことだ。何ぜといへば心理學自身は mental activity の經路（プロセス）を取扱ひ文學批評は mentel activity の所産（プロダクト）を取扱ふ點に差異があり、又文學批評に於てはこゝからして價値論に關係する。吾々が倫理的とか社會的とかを文藝について云々するときは價値の問題なくしては、審美的判斷をなし得ないのである。玆にリイド氏の所說も一面價値論に於けるリチアヅ氏の影響があるやうに思はれる。扨て、心理學中、最も今日の文學に興味あるところの精神分析（心理分析）を中心として考察して見よう。こゝで少し限界を述べて置く必要があるのは、精神分析はそれを以て直接藝術を創造し得る方法と考へてはならないので、寧ろ文學批評と結び付けて考へるべきだと思ふ。しかし詩人や小說家であらうとする人々にしても、心理分析の研究を逸してはならない。たとへば、ジャックリヴィエが述べてゐるやうに、[1]『愛』の主觀性に關する事實の如きは、心理分析によつて普通人以上に個人の經驗を深めるに與つて力がある。この意味からして心理分析は『文學自体』にも間接に關係をもつと考へても差支ない。さて精神分析が文學批評の方法に對して、何等かの積極的な寄與をなしうるか、といふことについては、多くの疑問があるにしても、しかしその批評的効用について三つに分けて考察することができようと思ふ。即ち、

（一）一般的に、精神分析はいかなる機能を文學に與へるか。

(二) 詩的創造、或は文學創造のインスピレイションについて、いかなる說明を與へようとするか。

(三) 精神分析は、何等かの方法に於て、文學批評の機能を擴張することができるか。

以上のやうな問題について、フロイト、ユング、アドラアが、それぞれの解答を與へてゐる。その內、(一)の文學一般の機能に關してはユングだけが、細密な理論を示してゐる。(フロイトとアドラアはこゝでは單に個人的な考察以外になしてゐない。)ユングの理論は彼の心理學の特殊な方法であるところの『對比の態度』(Contrastedattitudes)の一般原理から成つてゐる。それは、精神に於ける求心力(イントロバアション)と遠心力(エキストラバアション)であつて、自我に於ける二つの傾向、たとへば、主觀と客觀、意識と物質、思想と感情といつたやうなもので、ユングに從へば、生ける現實(リヴィング・リアリティ)は之等の對比の態度の一方的なものではなく、或る特殊な活動がこれを連結し、之等の間に橋を渡す。永遠の創造的行爲として、この特殊な活動力を彼はファンタジイと稱してゐる。こゝにすべての心理學的アンチテーゼのやうに、內的世界と外的世界の生ける結合の可能性が窺はれる。[2]そのファンタヂイの能動的と受動的の二つがあり、後者は一種の病的狀態であつて、余り重點を置く必要はない。能動的なそれは比較的浮動な無意識的連想を捉へて、これに、それぞれ對比する要素の邊結を加へることによつて、具体的固形を與へることだ、といふ。これは又藝術に於ては、ポエチック・ファンクションとなるもので、[3]ユングはしかしこの創造的ファンタジイを個人的觀點以上に解してゐない。リイドの見界はこゝでユングのファンタジイを個人的觀點以上に高めようとしてゐる立場が窺はれる。さて、かゝる精神分析に從へば藝術は、あらゆる潛在意識、本能的感性、メカニックな現實をすべて一つの生活意識の流れの中に導き入れることであり、そしてそれがなされるとき、藝術家個人の問題でなく、普遍性の領域に入り、そこで精神分析と文學批評は關聯をもつのである。『シンボル』の實際的、社會的確實性は一般的にも、局限的にもこの創造的個人性の質、又は生ける能力に根據付けられる。そして精神分析がもしこのシンボルの眞實性、強弱性を試驗する能力を有するならば

吾々は、それが文學批評の助けとなることを認めなければならないだらう。

註（1）Cf. Jacques Riviere, "Notes on a Possible Generalization of the Theories of Freud" (*The Criterion*, Vol. 1, No. Ⅲ, pp. 344—5)
（2）*Psychological Type*, English Edition, London, 1923. P. 69.
（3）*Ibid*, p. 574

Ⅲ

次に第二の『創造』の過程に對する問題はどうであらうか。精神分析はインスピレイションを如何に解釋するであらうか。そして文學批評の精神とまたそれは合致するところをもつであらうか——。これは非常に大きな問題となるから、これらのうちの二三の問題に止めて考察して見ることにしよう。——汎ての藝術家（特に文學的藝術家）の精神には二つの反した傾向がある。一つは、意識の統制を放棄遮斷して、彼の本能的精神内に沈潜してゆく、こゝに彼は新鮮な想像（イマジエリ）にふれることができる。それは豐饒な、無統制の世界であり、白日夢——夢の世界である。次にもう一つの方は、秩序や建築、固定的な形、道德的な美を與へんとする理念で、これは有意識的にか、或は無意識的にか、この藝術家の生活を形成する方向に合流するものである。こゝにこの二つの勢力が完全な調和を得たとき、完全な藝術品を得るのである。さてこの二傾向が心理學的言葉を離れて、文學上の言葉になると直接中心的問題をもつたものになる。それはロマンチィシズムとクラシシズムである。『ロマンチィシズムとクラシシズムの鬪爭は個人の心の中にも存在してゐることを記憶すべきである。そしてこの鬪爭から作品が生れる……それを統制しようとする鬪爭が大きければ大きいほど、その作品の美は大きくなる……』[1]といふアンドレ・ジイドの言葉はこの事實の特殊な反響のひ

とつに他ならない。この闘爭をインスピレイションと呼ぶ。このインスピレイションを人々は多く潛在意識の所爲に歸してゐる。ポアンカレが數學の解決に於て來るところの光明を、こんな風に解してゐるのを人々は知つてゐるであらう。[2] 近代の心理學者はこの『突然の光明(サッドン・イルミネイション)』或はインスピレイションとは、この仕合せな結合[3]によつて偶然、意識活動が目覺めてくることをいふのであつて、詩的インスピレイションの解釋にとつて差支へないと思ふ。ブレイクのやうに天使がこれを告げるのだ、と信ずる人々には不滿足であらうが、これは正確な考へ方であると思ふ。いま少しいひかへてみると、まづ潛在的な『形式(フォム)』あるひは『思想(ソオト)』が心を搖り動かせる。次に前に述べたインスピレイションによつて、ある『心像(イメジ)』又は『記憶(メモリ)』が活動してくる。これらの偶然なイメジ、メモリは前述の意識興奮によつて取捨撰擇され、その動いてゐる意識の方向に發展し、變形されるのである。そしてこれらのプロセスの累積によつて創作の過程が充される。心理學はこのやうにして創作の心的過程を明白にするであらう。『暗示』或は『自己催眠』によつて創造的プロセスを人工的につくり得るから、その場合、詩人が輩出することを恐れる必要はない。何故なら、有意識的に訓練され、感性を感ずるものでない限り、無意識からは何等のよきものをもち來たさないからである。

註 (1) André Gide, *Réponse à une enquête de la Renaissanca sur la classicisme*, 8 Jannier 1921 (Morceaux Choisis, P. 453)

(2) Poincare, *Science et Méthode*, Chap. iii.

(3) Cf. E. Rignans, *The Psychology of Reasoning*. London, 1923. P. 129.

三

リイド氏はこゝでフロイト、アドラアなどによつて說かれる天才の變質性などについて述べてゐるが、之れは略して、最後に第三の、文學批評の機能が精神分析によつて擴張 modify (改修・擴大) され得るか否かの問題に入つて、

リイド氏は多くの期待を精神分析の上に懸け、その最も顯著な一例として、ハムレット研究を採り上げる。過去二百年間、文學批評の中心的な關心はシェイクスピアの複雜な傑作の周圍に累積された感を呈してゐる。特に批評家にとつての困難なるものゝ一つはハムレットの父の殺人者に對して、仇を討たんとするに當つての限りない躊躇逡巡のさまである。ゲエテやコウルリヂはヒーローとして立つ魂の努力に缺けたノーブル・ネイチュアとしてハムレットのテンペラメントを解釋する。又ハムレットは實行の能力に缺けてゐるといふ見方などによつてこの二つの說は混同混亂に陷り、終に批評はパラドクシカルな位置にまで達してしまつた。『解釋のできぬ、ツヂつまの合はぬ、不釣合』な悲劇だとJ・M・ロバアトソンなどはハムレットを作品としては非常に劣つたものに解する。彼は、所詮ハムレットは知的に解されるドラマでもなければ、內から解することができない芝居だと結局してゐる。吾々はこの知的にものをいつてゐる批評には甚だ不滿だといはねばならぬ。ではこの問題に對して精神分析は如何に批評の上に寄與するであらうか。こゝにリイド氏は、ハムレットの逡巡を典型的なコンプレクス——エディポス・コンプレクスと見做して詳細な心理分析的研究の成果を齎したドクタア・アアネスト・ジョーンズの『ハムレット研究』[1]を擧げて、從來解決し得られなかつたこの方面の批評の一端に、新しい側光を持ち來らしたことを力說してゐるのである。そして、ドクタア・ジョンズが、ハムレットを書いたシェイクスピアは自らの精神のコンフリクトを表現した、いはゞ自傳的な要素が含まれてゐると結論することによつて、吾々はこの方法が文學の問題に新しく進み近づく可能性を示してゐることを容易に知り得るであらうとリイドはくり返しいつてゐる。こゝで再び考へられることは、文學に於ける古典的とロマン的の對立で、ユングがサイコロジカル・タイプスとして擧げてゐるイントロバアション、エキストラバアションの各々のタイプをこの古典的とロマン的の態度に當てはめて解釋することの可能性であつて、かくすることによつてこの對立をヒユマン・ネイチュアの生理學的對立としての自然的な表現として見ることによつて、一層從來の批評よ

りも擴められた觀點を持することができるであらう。こゝにブルクハルトに從つて、ユングが『原像（プリモーディアル・イメージ）』と呼ぶものに注意が向けられる。即ちこのイメイヂは神話（ミス）や宗教に於て結晶されてゐる。心理學は既にこれらの內に無意識的プロセスに關聯して注意を向けて來た。これらの集團的意識、或は原像は進化の觀點からして『合理的な神話』(2)として見なされて來た文學の表現に見出される。ユングが吾々に示してゐるやうにファウストはドイツ國民にとつては最も純粹な、正しい神話であり、誰しもその中に自らの性情と運命とを分け與へられてゐる。恰もギリシャ人がエディポスの傳說を有つのと等しいではなからうか。そしてこれらの神話の解釋究明によつて單なる個人の心理のみならず民族的心理、又は社會的心理について種々の解明を齎した場合、文學批評の視野は一層擴大されるであらう。近代の世界は充されない飢餓によつて不安である。いま吾々の必要なのは、この集團的精神の內に存する朧ろな慾望の焦點を確定されることだ。精神分析學者は批評を已れのものにし、或は批評家は精神分析を已れのものとなし、一致してこの問題の解決に當るべきではないであらうか。——とリイド氏は最後に結んでゐる。

註 1、*Essays in Applied Psycho-Analysis*, 1923. "The Problem of Hamlet"
2、Cf. Th. Ribot, *Essai sur l' Imagination créatrice*, Paris, 1900, P. 114:
"La Litterature est une mythologie déchue et rationalisée"

V

以上はハアバアト・リイド氏の好著『理性とロマンティシズム』(1)中の一論文『心理分析と批評（サイコアナリシス・アンド・クリチシズム）』(2)のごとく簡單な概要であるが、この論文の主要な點だけは大体述べたやうに思ふ。リイド氏のこの論文は專門の精神分析學者からすれば、極めて當然な論のやうに思はれるのであるが、しかし文學批評の領域に於ては、少くとも英國の批評界に於ては、既にリチアヅ氏などの先覺があるにも拘らず、このやうに文學批評と心理分析の機能を明にし、その辯證法的統一の

可能性を指摘し、併せて文學批評の新しい開拓地と、その方向を示した點にこの論文の重要な役割が果されてゐるやうに思はれる。そして又一面リイド氏が、エリオットなど丶同じ傾向に立つ主知的批評家の一人であることにも特別な注意が拂はれてい丶。何故なれば、一例をとつていへば、『ハムレット論』を書いたT・S・エリオットは明かにリイド氏とは對立した立場にゐるからである。エリオット氏はロバアトソンの立場をとつて、ハムレットは所詮、不明な作品であり、シェイクスピア自身でも、充分ハムレットを把み得なかつたところの不消化な作品であつて、寧ろシェイクスピア作品中の劣つたもの丶一つであると指摘してゐる點は、明かに知的な解釋であり、批評であるが、リイドはそれをさう解釋しないで、精神分析的方法による解釋を求めたところに、又リイドの新しい觀點が窺はれる。[3]このやうにして、リイド氏自身も別にシャルロット・ブロンテとエミリ・ブロンテに對する、洵に興味深い精神分析的批評を試みてゐるのである。[4]アメリカの粗雜ではあるが、マルキシズムの文學理論の上に立つて批評を試みてゐるV・F・カルヴァトンは二三年前、『批評の新基礎』[5]といふ一書を公にし、その中で文學批評に於ける綜合的批評の方法を提示して、その最も今日に於て必要なのは社會的な批評と心理學的批評の綜合統一された立場の方法によるものでなければならないと述べてゐるが、これなども、既にリイド氏が前述のとほり、もつと精密に論じてゐるもの丶反響に他ならないと思ふ。いふまでもなく文學批評が新しくこの心理學的方法を採り上げることは、今日一方にのみ偏した批評の狹い限界を擴大する意味に於ても、或は又客觀的眞理を重んずる社會的批評の餘りにも主觀的方面の沒却による種々の缺陷を補正する意味に於ても、必ずしも無意味でないことを一言して置きたい。（完）

註（1）Herbert Read, *Reason and Romanticism.* 1926, Faber & Faber.　（2）*Ibid*, PP. 83-106
（3）此點は他日もつと詳細に考察して見度い。尚、拙稿『T. S. Eliot のハムレット論』(『藝術殿』昭和七年四月號)參照。
（4）"Charlotte and Emily Brontes." (R & R.)　（5）V. F. Calverton, *The New Cround of Criticism.* 1930.

『制服の處女』の分析合評

　菊地寛氏はこの作の女主人公の心理は分らぬと云つてゐたが、私の見るところでは殆ど分析の理論をそのまゝ具体化したやうな作だ。『神經症はリビドー拒否の結果として生ず』とのフロイドの命題をそのまゝ適用したやうなものだ。原作はウィンスロウの『昨日と今日』"Gestern und Heute" だと云ふことだが、その原作を我々はまだ見てゐない。たゞ映畫化だけで論ずるのは少し心元ないが、今日のところ已むを得ない。併しこれは恐らく分析的見地を意識しての作品に相違ないと信ぜられる。主人公マヌエラは元來母への同性愛的コムプレクスを持つた少女である。その少女が教師に母代償を發見する。それが更に禁斷されてリビドー纏綿の對象が奪はれるので、墜落願望に象徴化されて投身せんとする。投身以前に少女等がカンシヤク玉を同じ高處から投げる場面のあるのなども、後のマエヌラの投身の豫報としての意味がある。それよりあの禁斷の權化のやうな女校長の心理的コムプレクスが興味がある。彼女自身の禁斷が、他人への禁斷の無意識動機となり、それが『プロシアの美風は訓練と窮乏とに養はれる』と云ふ標語に於いて理窟づけを發見してゐる。

　下着を貰ふことに依つて母コムプレクス成立の契機としたなども普通のことであるが、面白くなくもない。本誌の中山氏の論と參照しても衣服の意味が、この場合にも思ひ當る點がある。母の肌着を以て身を包むことには胎內的象徴も存してゐるかも知れない。

　伊東豊夫君は少女の制服の棒縞の模樣は禁止と制限の象徴であると云ふ。これも面白い觀察である。なほ伊東君の氣付かれた點を次に紹介する。階段の多く用ゐられてゐることも注意すべきである。階段の無意識にとつての象徴的意味はこの場合にもそのまゝあてはまつてゐる。殊に階段が先生たちにのみ許されたもので、少女等には禁斷されてゐると云ふ點は直ぐに何人にも氣付かれるであらう。その禁ぜられた高處へ昇つて投身自殺せんとするのだから、愈々その象徴的意義が明かになつて來る。

　マヌエラにとつて好きな女教師と恐ろしい女校長とはアムビバレンツを二つの樣相に分割して示してゐるものでなければならない。

　伯爵夫人の出現と、學藝會に於けるドンカルロス上演とは、この悲劇に於いて重大な契機をなしてゐる。リビドーがこれ等の機會に於いて、はけ口を發見し、これがくづれる堤に於ける蟻の穴としての意義を果してゐる點も注意しなければならない。また女教師のマヌエラに對する心持にも種々云ふべきことがあるが、今日はこれだけにしておく。

（大槻・伊東）

性ホルモンとリビドー

小山良修

私は型の如くに習學した醫學校卒業の一醫者で、御料理の本から食物が製造されるかの如く、忠實におみそを計つて、おみそ汁を作る事しか出來ない味野まづ子女史の樣な、鸚鵡醫者である事を御斷りいたし、高遠なる精神分析研究にはあまりにも緣の遠い者である事を恥ぢます。最近のホルモン問題を無理にも貴重なる紙面へ活字にして書き埋る事は、誠に申譯ない事です。

さて話はかうです。性の問題はいつの時代にも盛んでありますが、近頃はこれをホルモン作用と云ふ一つの現象としまして、實驗は簡單に幼若鼠や、去勢鼠に注射して現はれるサカリの狀態により證據だて、量を計つて今は化學的結晶体まで取り出して『これだ』と力說しようとしてゐます。從つて一方に於てこのホルモンの存在場所を血眼になつてさがし始めたわけです。最初に卵巣、睪丸、次にはこれ等を調節する腦下垂体の前葉であります。次に妊婦尿と云ふ變種が發表されて、學界は俄かに活氣付き、尿研究が改めて深められて來ました。即ち男性尿（青春期前のもの）姙娠馬尿等が目下の探檢隊の進路にあり、旣に含有量や化學構造式などが次々に學者により發表され、問題を起してゐます。更に興味ある事には、或學者は性ホルモンと同樣なもの（少なくとも動物實驗に於て有効成分を有するもの）を、泥炭、褐炭、石炭、石油等から抽出したと報告してゐます。旣に植物の種子、或は花から發表されてゐたのですが、地中に埋れ

てゐた植物、即ちアルセル氏は百二十萬年以上を經過したと考へられるウェストファール産の石炭を材料として性ホルモンを抽出したと云ふのですから、伊藤正雄氏に依ると、我々が熱を採る爲めに一年間に非常に大量の石炭が燃焼せられるが、此際同時に失はれる性ホルモンは又數千瓩に達せねばならぬと云ふ事である。

考へて見れば性ホルモンとして、我々が治療に用ふるものゝ材料は決して人間のものではなく（人間材料のものがより多く利くか否かは、人道問題に差障りありますから略します）牛、馬、豚等であつて、之が人間にも鼠にも、鶏、犬、兎、蛙にも有効に働く事や、更に前述の腦下垂体の中葉ホルモンを牛からとつて、獨逸鯉の一種ヤナギハエに注射してやると、數時間後には、きれいな色を鰭に呈して、恰も産卵期に於ける様な狀態になると云ふが如き事等が、既に性ホルモンに限らず、ホルモンなるものゝ普遍性を表はすのではないかと思ひます。すると我々生物界は動植物を通じ、永久から永久へ性ホルモンの如き強い物を相通じさせて活動を續けてゐるのではないか。リビドー眞義のは私のよく知らない所ですがすべての生命力の根元と云ふなら、この性ホルモンなどなか／＼もつて馬鹿にならぬ對照物と思ひます。石炭のホルモンが人間へ注射され、何萬年前の精神が復活して……など一寸想像しても愉快であります。

次に性ホルモンと云ふ時には勿論、男女二種あつてよいのですが、二者が非常に近いものである事は、又多くの學者により立証されてゐます。又共存してゐる事も多いのであります。二三卑近な例をあげます。男性ホルモンの研究には去勢した、鶏を用ひますが、其の鶏冠は小さいのですが、これにホルモンを注射すると大きくなるので、其れにより量や効力の有無を計るのですが、男性尿からの抽出物がこれに對し有効である事には不思儀はありません。併し女性尿から同様な方法で抽出した物にも其の効果を証明し得るのであります。又、私は嘗つて雄の鶏を去勢しようと思つて手術して腹部を開いたら、それが雌であつて（雛鳥の雌雄を區別する事は非常にむづかしいのです）、折角ですから、試みに卵巣を剔出して

みたのですが、これが數ヶ月後には男性化して鶏冠が大になり、距が出て來たのを實見しました。

　或書には、我々は男女の性ホルモンをみな持つてゐるが、唯、男には男性ホルモンが多く、女性ホルモンが少量であると云ふに過ぎぬとされ、宦官は女性化し、更年期の女性は男の如く荒くなる事も之れにより說明するのでありますが、又、こんな例が最近あります。禿頭病ホルモン療法と云ふのに男子脫毛症の物質代謝は、女子の多毛症に匹敵してゐる。やかん頭は男子に特有で、腦下垂体の機能減退に原因し、且つ女性ホルモンの欠乏によるのであるからして、之が治療には腦下垂体前葉ホルモンと共に女性ホルモンを並用すれば、男性の脫毛症はよくなる。即ち頭髮の再生を來し、六―八週間に其効果を認められる。同樣に女子の多毛症には男性ホルモンを併用すべしと云ふのです。即ち、男にも一定量の女性ホルモンが必要であると云ふ事になり、二者の均衡により男らしく、或は女らしく、生理的活動を續け得るのであります。

性ホルモンの分泌、或は作用は我々の意識により支配出來ない所の所謂植物神經系の司るものであります。この點を無意識の世界中のものとして注目してみたいのであります。重ねて申しますと、尿よりホルモンを證明する事について、一つは過剩なホルモンを排泄する場合、一つには身体の狀態により不要として除去する場合、一つには病的狀態にあつて透過せらるゝ場合等が考へられるのでありますから、生後から老死までの性ホルモンの排泄或は分布狀態を研究する時に、最も大きい變化を一生中に與へる。この性の問題は、精神生活には又非常に大きい分野で、むしろ性ホルモンの一生が人間の一生であるなどと考へても見たいのであります。

　昔、初生兒の尿を飲み、不老長壽を願つた王樣があつたと云ふ事でありますが、その王樣は、或は性ホルモンの存在を知つてゐたのかも知れません。なぜなら、初生兒から青春期以前にあつては不要な性ホルモンが自然、尿に排泄されてゐる事を、今、多くの學者は動物に就いて實驗してゐるのです。同樣な意味で女性は姙娠すれば

不要な性ホルモンを尿に出しますので、之れを逆に應用して妊娠診斷をしたり、妊娠馬から性ホルモンを抽出したりしてゐる現代であります。

かくして偉大なる性ホルモンが、一生を通じて常に分泌され、排泄され、生物を活動させてゐる力は、エネルギーや、リビドーの概念で考へ直して興味ある結論を導き出さないでせうか。

私は精神分析に對して、たゞ興味をもつのみで深く理解してをらぬ事を重ねて恥ぢますが、併し今後の研究を覺悟してゐることを以てわづかに自らを慰めてゐます。

衣服の有てる呪力

中山太郎

北方民族の間に强烈なる潜勢力を有してゐるシャマンなる者は、その教義によつて作られた行衣を着なければ、完全に呪術を行ふ事が出來ぬと云はれてゐる。そして彼等の行衣には小さい鏡や鐸を始めとして、此の外に夥しきまでに金屬性の破片が釣り下げてあつて、動くたびにそれ等の物が觸れ合つて鏗鏘として音を立てる。シャマンは此の音に拍子をつけ、別に手にした太鼓をたゝき、口に呪文を唱へつゝ猖んに跳躍するうちに神憑りの情態に入る。行衣の重さは、往々にして幾貫目と云ふのさへある。

此のシャマン教と多くの共通點を有してゐる我國の原始神道の事相にも、又これと同じやうな行衣の呪力と云ふことが發見される。萬葉集の珠衣は學者によつて異説もあるが、タマキヌ——即ち魂衣であつて、これを着ることに由つて或種の呪力の發生するものと信じたのである。更に同集に散見する玉襷も即ち魂襷であつて、同じくこれを肩にかければ呪力が生動するものと考へたのである。そして此の呪力は神としての活きを意味してゐるので、他の語を以て云へば、斯うした珠衣や玉襷を身に着ければ、その者は直ちに神であるとされてゐたのである。

原始神道の要因を多分に傳へた修驗道——その影響を濃厚に受けた富士講や、御嶽講の行者が用ゐた行衣なるものも、微かに此の信仰を殘したものである。そして今に彼等は行衣だに着ければ神であり、又は神の代理者であると考へてゐる。

更に斯うした事は各地の祭禮にも殘つてゐる。秋田縣南秋田郡天王村の氏神祭の頭人は、心願のある者が勤めるが、烏帽子直垂を着し、手に弓矢を持ち、牛に乘ることになつてゐる。それで酒部屋に於いて裝束すると忽ち正體夢中となり、他の頭人達が介抱して牛に乘せ神幸の

行列に隨ふが、終つて元の酒部屋に歸り沐浴して一夜寢ると正體に戻るとある。京都府乙訓郡西岡村淨土寺の境内に裝束祠と云ふのがある。同村の產土向日明神の祭禮には此の裝束祠に收めてある裝束を稚兒に着せるが、これには神秘の行事があると傳へられてゐる。たゞその行事の內容が判然せぬので少しく物足らぬが、或は此の裝束を着ると稚兒が神憑りの情態になると云ふのではあるまいか。そして是だけの資料で云ふのも太だ早速ではあるが、東京王子の裝束稻荷や京都比叡の裝紋堂なども、何かこれに類した由來があるのでは無いか、猶詳しく尋ねて見たいものである。

或る場所で轉ぶと片袖切つて棄てぬと、三年のうちに死ぬと云ふ袖モギさんのことは、曩に管見を述べたことがあるので省略するが、これも片袖によつて死を遁れると云ふ所に衣服の呪力がある。流星を見たら着衣の裾で受ける眞似をすると金持になるとは、拾芥抄にも載せてある一種の呪術である。更に小供の衣類の背守に就いては先覺の研究があるので差控へる。（完）

本研究所研究會三月例會報告

三月二十日（月曜日）夕五時半より
萬世橋前アメリカン・ベーカリにて

一、祝祭劇及び機關誌準備經過報告……大槻憲二氏
一、エディポス劇の飜譯について……松居松翁氏
一、『花咲く曠野』について……長谷川誠也氏
一、アンドレ・モオロアのアードラー觀…永田道彥氏
一、寓話の解釋に於ける夢の願望實現以前の意味……矢部八重吉氏

出席者は以上五氏の外に、海野十三、丸山季夫、岩倉具榮、小山良修、白石晴、小林五郎、原次雄、時平佐喜雄、佐藤基、齋藤長利、小松德、松居桃多郎、伊東豐夫、長谷川浩三、長崎文治、普後俊次、荒川龍彥、田內長太郎、廣井重一の諸氏で、頗る盛會でありました。なほ萬已むを得ず缺席の御挨拶のあつたのは、江戸川亂步、川又昇兩氏でありました。

四月度の例會は、七日夕アメリカン・ベーカリで催しました。詳しくは何れ次號で報告します。（係員）

今もゐる手古奈

棚谷伸彦

精神分析の正確な知識を、私は、持つてゐないから、或る友だちから聞いた小さな實話を、分析などしないで、紅茶をのみ乍ら、喫茶店で、大槻先生に話したそのまゝに、こゝに述べて見る。

家に來てゐたまへと言はれるまゝに、或る少女は、妻のある作家の家に暮してゐた。その作家もまだ若い男であつたが、そこに遊びに來る男が二人あつた。一人は畫かき、他はこれまた作家で、割合と早く結婚してゐた。そんなグループであつた。

この男三人のそれぞれの愛情が、一人の、この少女に濯がれてゐた。三人に少女は愛されてゐる中に、それぞれにこの三人の男たちがこの少女を愛してゐる中に、作家の妻がそれを氣付いた。作家の家の角目だつて來た空氣の中に少女は居辛くなつて來た。

或日、畫かきのところに來て少女は、

『私を描いて下さいナ』と言つた。『裸を描いて……。あたしは、あたしの身体のきれいなうちに描いておきたいのです。きれいに美しく描いて下さい。』

これだけの話であるが、私がこれを聞いた時その座にゐた或る友だち——少女小説を書く一人の友だち——はいゝな、ちよつといゝな、と言つた。

私はこの話が好ましい、だから一寸の說明もつけ加へたくない、そのために讀者には讀む興味はなかつたかもしれない、その代り、ほんたうの事實だけ、いはゞこゝにそつと置いておくわけである。

たゞこの話を好ましく思ふ私の氣持には、少しサヂズムの匂ひが、自分で嗅げる。

（完）

精神分析より見たる心の發達

J・C・フリウゲル
伊東豐夫譯

心の發達に關する精神分析學的理論は同じく精神分析學の性說と密接に聯繫して居るが故に、吾々の主題のこれ等兩方面は、これを併せ考察する事が是非とも必要である。性に就いての精神分析學上の概念は幾分普通以上に廣汎で、數多の過程を包含して居り、それ等過程はせい〴〵間接に生殖過程と關聯して居るに過ぎない。「リビドー」或は「性（セツクス）」と云ふ術語は、フロイドの用ひて居る所では、實際上キリスト教傳統に於ける「愛（ラヴ）」或はプラトンの「エロス」と略々同意義であるが「性」の本質並びに發達に對する精神分析學的見解はより一層細緻を極め、精確である。

斯學の見解に依ると、正常なる成人の性慾（性感）は元は互ひに獨立した一群の衝動――術語で言へば部分本能――が一つに纏つて出來上つて居るのである。多分最初に、個體の內部及び表面層よりの總ゆる感覺に伴ふ漠然たる色情的性質を帶びたものが存在してゐて、それが性本能の最初の前驅であらうが、個体の誕生以後には、此等色情的性質を特別に賦與された特殊な帶域、局部、或は器官が存在して、そして其等の各々には、個体を籍つて彼の帶域、或は器官の興奮を惹起して得らるべき滿足に向けて邁進せしむるが如き特殊な部分本能が、それ〴〵に與へられてゐると云へるであらう。

右以外の部分本能は解剖學的局部とは關係の度が更に密接でなく、唯此等に聯關してゐる特殊行爲、或は感情を根據とし、それに依つて類別されるに過ぎない。嘗つて如何なる分析家と雖も、部分本能群を完全に計へ上げやうとしたり、分類しやうとしたりしたものは無い。

フロイドの『性說に關する三論文』(一九一六) の後半の版には、今日でも最も完全な組織的な總括が見られる。

就中、最も重要なものには次の數種がある。

一、口唇に關聯するもの。(所謂、口唇部分本能)。最年少の何れの嬰兒にも見られる事であるが、之等の本能は出産後最初の數ケ月間に於て、著るしい重要さを有し、その故に此の期間を指して屢々口唇段階と呼ぶのである。

二、食道管の他端、即ち肛門、直腸に關するもの(肛門部分本能)。此等の本能は發達の次期に於て別して重要であつて、精神分析學上の最もセンセイショナルな發見の幾つかは、これ等の本能に就いて爲されたのである。

三、排尿の器官及過程に結合せるもの。(尿道部分本能)

四、性器自身に關係するもの。

五、視覺作用に關するものは二種類に大別すると、能動的な「窃視慾」と受動的な「露出慾」とである。

六、懲罰又は苦痛への忍耐に關するものは、これまた同じく能動的な殘虐性(サディスティク)な一群と、受動的な被虐性(マゾヒスティク)な一群に區別される。

此の名稱はサド侯及ザッヘル・マゾッホ敎授に由來するもので、此の有名な二人物は彼等の性生活に於て、問題の部分本能の强力な支配を受けたものである。

此等に加へて、更に、筋肉、皮膚、或は嗅覺、聽覺に關するが如き、未だ分析家から充分に研究し盡されぬ部分が存在するが、それ等に就いては尙多分に研究さるべき余地が殘されてゐると思はれる。

正常なる發達の道程に於ては、此等の種々なる部分本能は同列に並置され、統制され、性器部分の指揮下に服し、結局、少くも間接的には、生殖の目的に奉仕する事になる。正常なる性行爲者を分析して見ても、少くとも

此等の衝動の二三が彼等にも存在する事が、實に容易く分る。斯くして、見たり、見られたりする事が色情的興奮に結び付いて居るのは、性的全期間の初期に於ては、特に最も普通に見られる事實である。それ等の興奮が人類、又他の高等動物の求愛に於いて、著しく本質的な役割を演じてゐると云ふのは、視覺は最も重要な距離傳達器であり、仲間の存在は先づ眼を通して知るに違ひないからである。接吻と云ふことを考へて見たゞけでも、普通の性生活に於いて口唇部分が、如何に一般的に重要さを有してゐるかを知るに足りる。

男性としての正常な態度の中には多少の攻撃性を含んでゐるが、これそこにサディズムが役割を果してゐることの證據であるし、他方、女性的受動性にはマゾヒズムの或る要素が見られる。皮膚、筋肉の色情は通常或る範圍まで含まれてゐる。恐らく肛門的及尿道的要素のみが正常なる性生活に於て明白な役割を果して居らないものであらう。而かもこの事實は、精神分析の理論の更に高等な二つの方面に結合してゐるのである。で、我々はそれをこれから論じよう。

第一に、我々がこれまで論じて來た部分本能群の組織化される過程は、轉化や昇華の過程と同時に起るものである。昇華の効力に依つて、各部分本能は其の發達の途次、エネルギィの一部分を非性慾的目的に振替へるのであつて、社會文明とか個性とか申すものは、此の轉化の過程に負ふ所が甚大である。全体的に見て、成人の性慾に於ては、部分本能なるものは最も處理され難いものであるから、從つて最も廣く轉化や昇華の種々なる形態を閲するやうである。兎に角、肛門部分の場合の如く（これに就いては吾々は後に論ずるが）、正常なる成人の性慾自体にあまり効果を及ぼさぬものが、却つて最も廣汎にして多岐に亘る影響を他の諸方面に及ぼすと言ふのが確らしいのである。

第二に、部分本能は全体となるやうに發達するとばかりでなく、同時に對象に關しても發展をする。普通、此の後者の發展は三つの主要段階に區別される。第一期、或は自己色情期に於ては、各々の部分本能は其の各々の

滿足を少くも其自身に求める。嬰兒の色情は專ら此の型に屬すると看做すべきであるが、併し或る程度の自己色情行爲は生涯を通じて殘存する。

菓子を食ふこと、喫煙、自慰、皮膚を搔く事等は讀者諸氏も、勿論なさる事であらうが、それ等は自己色情の青年的、或は成熟者的の形態に當るのである。その他ダンス、運動の如き行爲は或程度迄、自己色情以前の事に屬するが、重要な自己色情的要素を含むで居る。(此の場合、主に筋肉部分)。然るに他方肛門部分は轉化されざる限り永久に性格中に自己色情として殘存しやうとする。

次期は自己戀慕(ナルシスム)期。此の期の愛情は一定の對象に向けられ組織化される。(それ故にナルシサスの神から取つた名を付したわけである。)自己戀慕の說は精神分析理論を甚だしく混亂させ、從來の單純な人間性の二元的(性と自我)區分を破壞した。(簡單に先驗的に、自我にあると考へられて居た大部分のものは、リビド的要素を含有してゐると今や見られてゐる。自己戀慕は他人への戀慕に多くの點に於て比較され得る。) 併しながら右の考へ方に基いて心の發達を、更に觀察したところに依つて、個性的差違の心理學や、精神病の本質に關する觀察に依つて、右の考へ方の正しいことが十分に分つて來たのである。やがて我々はまた此の主題を論ずることもあるであらうが、只今のところ吾々はざつと、ナルシシスムは自己色情と同樣、決して全くなくなつてしまふ事が無いと云ふことだけを云つておかう。それ所か、自己戀慕は或る程度までは正常にして、本質であることは疑ふまでもない。進むで、自己戀慕と自己色情の間に介在する差違を明かにする爲に、吾々はその兩者間に、今日屢々起る葛藤の場合を引用することが出來る。近頃流行を極めて居る瘠形を臺なしにしはすまいかと言ふ懸念から、或る婦人が、大好物だが身体を肥滿させるやうな獻立を避けると言つたやうな場合には、自己戀慕(瘠形の彼女自身に對する愛)の衝動が(美食を嗜むやうに唆る)自己色情衝動に打ち勝つた事になる。

第三期は對象愛(對他色情)であつて、此の場合リビドは自分から離れて他人とか、外的事物に向ふのである。

それの最初の顯現は恐らく小兒が母親に對するもので、自分の滿足が密接に母親に係つてゐることを認識するやうになるや否や、さうなるのである。さうして此の愛が發展し切つたものは「惚れ込み」(フォリング・イン・ラヴ)の域に達し、而かもこれが青少年の生活の特徴となつてゐるものである。

烏の辯

棚谷君が折角そのまゝそつとして出されたモダン手古奈の話(四八頁)を、私がこゝで分析したのでは、權兵衛の蒔いた種をあとからほじくる烏のいたづらに類するが、餘白が出來たので穴埋めに少し書く。

一体、自分の若き裸体を描かせおくと云ふのは、殊に處女性放棄以前にそれをしておかうと云ふことは、處女性の誇りを保存しておきたいと云ふことを意味してゐる。處女性を保存しておきたい心と、放棄したい心との矛盾の葛藤が妥協となつて現れた結果である。分析術語を以てすれば、一種の互讓構成である。またかくして出來上つた畫面上の自分の姿は『別自我』(幽靈)(ドッペルゲンゲル)である。かゝる別自我の觀念は、オスカ・ワイルドの『ドリアン・グレーの肖像畫』に於いて、最も適切な例證を示してゐる。ドリアングレーは醜惡な行爲への誘惑には抗し得ないが、醜惡な行爲を憎んだり、その行爲者としての評判を立てられることは忌んだのに相違ない。かくて醜惡な評判と容相とはこれを畫面上の別自我に轉嫁して、現實の自我は涼しい顏をいつまでもしてゐよう、若い、美しい姿をいつまでも保持してゐようとしたものである。この點に於いて、かの少女の心理として一脈相通ずるものであることは疑ひ得ない。

では、どうして手古奈と似てゐるのか。手古奈は三人の男に顏を立てさせるために犧牲的に死んだとなつてゐる。勿論さう云ふゆかしさもあつたにはあつたらうが、他面に於いて何れの男も滿足出來ぬと云ふ心もあつたに相違ない。何となれば、何れか一人が特に氣に入れば、それと進んで結婚しようと云ふ氣にならずにゐられないほど、人間は非自主的なものであるとは我々には考へられないからである。自分の處女性は誰にも與へたくはないと云ふ肚が必ずあつたと、私は解釋してゐるのだ。併し古の手古奈は流石に非妥協的であつたが、今の手古奈は肖像畫と云ふ『代償』を作つておいて、現實の自我だけは處女性放棄の快樂を追及して行くのである。(大槻)

本研究所事業案内並びに業績報告

本研究所は昭和三年の創立に係り、創立者は長谷川誠也、對馬完治、長田秀雄、大槻憲二、矢部八重吉、松居松翁、馬渡一得、酒井由夫（いろは順）その他の人々であつた。その後、人員は漸次に增加し、現在にては五十名に垂んとする大團体となつた。組織は分析部、教育部、出版部、研究會、講習會の五部より成る。現在所員及び各部業績左の如し。

現在所員（いろは順）

公爵 岩倉具榮
東京高等學校中途退學 伊東豐夫
鶴巻町小學校訓導 井原錄郎
本研究所幹事 本誌編輯委員 長谷川誠也
指紋研究家 長谷川浩三
日本大學在學 原次雄
『佛人』主筆 豐田稔

第一外國語學校在學 時平佐喜雄
立正大學文學士 德丸友直
農學士 千葉廣洋
立正大學教授 加藤朝鳥
明治大學在學 川上水夫
早稲田大學文學部研究室 川又昇
東北大學醫學部 吉田正
田内長太郎
慈恵院大學教授 武田忠哉
文學士 棚谷伸彦
本研究所幹事醫學士 對馬完治
恒川賢
民俗學者 中山太郎
立正大學文學士 中島末治
劇作家 長田秀雄

東洋大學文學士　長崎文治
文學士　永田道彦
性學者　小倉清三郎
著述家　小柳津邦太
畫家　奥村博史
本研究所幹事 本誌編輯委員　大槻憲二
奥本島田
本研究所幹事精神分析士　矢部八重吉
本研究所幹事　松居松翁
本誌編輯委員　松居桃多郎
東京帝大法科在學　松田俊武
丸山季夫
文學士　普後俊次
音樂研究家　藤木義輔
江戸橋病院小兒科主任 醫學博士　小山良修
詩人　小林五郎
府立第八中學校勤務　小松德
小說家　江戸川亂歩

文學士 本誌編輯委員　荒川龍彦
放送局勤務　崎山正毅
佐藤基
早稻田大學敎授　宮島新三郎
醫學士　芝川又太郎
早稻田高等學院講師　白石靖
本研究所書記長　廣井重一

一、分析部

神經症治療――ヒステリー、強迫症、妄想症その他。
性格改造――惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性癖にて無意識病根に基因するもの。

一、敎育部

斯學の弘通と社會人心の病根解除とを圖る。講演、放送、その他の歷史左の如し。

1、精神分析講演會（矢部氏歸朝記念 長谷川氏出版記念）
昭和四年九月二十七日、東洋ビル內、中山文化研究所に於いて。
講師　大槻憲二　酒井由夫

松居松翁　長谷川誠也
對馬完治　矢部八重吉

2、精神分析と現代文藝講習會

昭和五年十一月二十一日から廿二日まで（毎夜六
――九時）京橋區區讀賣講堂にて、

一、精神分析總論……
二、現代日本文學の分析批評　｝大槻憲二
三、フランス現代文學と……
四、シウルレアリスム……　｝廣瀬哲士
五、ドイツ現代文學と……
六、ノイエザハリヒカイト……　｝武田忠哉
七、精神分析三派の比較研究
八、英國現代の心理派文學……　｝長谷川誠也

3、精神分析講演

昭和六年五月三十日、立正大學講堂にて
一、マルクスとフロイド……大槻憲二
二、精神分析と教育……長谷川誠也

4、精神分析の話（ラヂオ放送）……大槻憲二

昭和六年八月二十四、五日の夕。

5、結婚生活の精神分析……大槻憲二

昭和七年二月七日、十四日、池袋婦人思想研究會
にて（この時の話は、朝日新聞社がその家庭欄に
て紹介。）

6、東西桃太郎譚……大槻憲二

昭和七年五月五日夕（ラヂオ放送）

7、精神分析と兒童教育……大槻憲二

昭和七年六月十四日午後、東京市外長崎村兒童の
村小學校にて。

8、女心の分析（ラヂオ）……大槻憲二

昭和七年九月九日（午後二時）

9、スフィンクスと西行法師……大槻憲二

昭和七年十二月二日（ラヂオ放送）

10、フロイド喜壽祝祭劇……（本誌廣告欄參照。）

一、出版部

一、フロイド精神分析學全集　十卷（本誌廣告欄參照。）
一、『フロイド派と文藝』……對馬完治著

昭和五年八月、天人社出版。
一、『文藝と心理分析』…………長谷川誠也著
昭和五年九月、春陽堂出版。
一、『精神分析概論』……………大槻憲二著
昭和七年三月、雄文閣出版。
一、『精神分析の理論と實際』……矢部八重吉著
昭和七年、早稲田大學出版部出版。

その他所員が、時々の新聞雑誌への寄稿は枚擧に遑あらず。本誌の創刊を以て當部の活動は愈々積極的となつて來たわけである。

一、研究會

研究所存立頭初より續行せられたるものなれど、只今假りに、昭和六年六月以降の業績を掲ぐ。(それ以前のものは記錄の保存なきを以て暫く略す。)

一、昭和六年六月二十二日、銀座晴湖に於いて、
1、維摩經の分析的興味…………長谷川誠也
2、佛教心理學に就いて…………キイツータ
3、支那に於けるエディポス的傳說……
……………大槻憲二
一、同年九月廿五日、YMCA二〇七號室にて、
1、天靈の文學と地靈の文學……加藤朝鳥
2、『ウォルポール寺院』に就いて……
……………長谷川誠也
3、新興建築と胎內空想……………大槻憲二
一、同年十月廿六日、於永樂クラブ、
1、松澤病院見學所感……………大槻憲二
2、リヤ王の精神分析……………同人
一、同年十一月廿六日、於永樂クラブ、
1、嫉妬心に就いて……………大槻憲二
2、一角仙人の分析的解釋……長谷川誠也
3、生活權と幸福權……………加藤朝鳥
一、同年十二月廿一日、於永樂クラブ、
1、幻を立聞く女……………小倉清三郎
2、精神分析とシウルレアリズム……
……………加藤朝鳥
一、昭和七年一月廿二日、於永樂クラブ、

57

1、ゴールズワージの性格創造論………………長谷川誠也
一、同年二月廿二日、於永樂クラブ、
1、ハクスリの戀愛觀……………………長谷川誠也
2、その批評……………………加藤朝鳥
一、同年三月廿二日、於永樂クラブ、
1、劣等感に就いて…………………大槻憲二
2、『ナルチスとゴールドムント』の研究……………武田忠哉
一、昭和七年四月廿五日、於永樂クラブ、
1、『ジーキル博士とハイド氏』の分析……………大槻憲二
2、ストレチイに就いて…………荒川龍彦
3、或る少女の道德心と藝術心…田内長太郎
4、ホルモンの話…………………小山良修
5、アイデンティティの文學…………加藤朝鳥
6、その批評…………………長谷川誠也
一、同年五月廿五日、於永樂クラブ、
1、エリオットの詩に就いて……晋後俊次
2、社會的性格に就いて…………廣井重一
3、兒童の洒落と云ひ損ひの機別…………大槻憲二
一、同年六月廿二日、於永樂クラブ、
1、ウルフの作品……………………田内長太郎
2、シング劇の分析解釋…………川上水夫
3、身投救助と戀愛との心理的關係……………大槻憲二
一、同年九月廿六日、於永樂クラブ、
1、文藝家と精神分析治療………大槻憲二
2、心理的タイプより見たる東西文明……………長谷川誠也
一、同年十月廿七日(木)、於永樂クラブ、
1、ミュンスターベルクの聯想試驗……………田内長太郎
2、肉彈勇士の死と日本人の涅槃本能……………大槻憲二

3、二三の探偵的事件に關する分析的報告…………川上水夫

4、ベルグソンの夢の説…………長谷川誠也

一、同 年十一月廿六日(土) 於萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ、

1、徒然草第七十一段に述べられた特殊な心理作用に就いて…………田内長太郎

2、アンドレ・モオロアに就いて…………………永田道彦

3、救助戀愛文學に關するその後の調査報告…………大槻憲二

4、リットン報告書の分析批評…長谷川誠也

5、『二筋道』の分析解釋……大槻憲二

一、同年十二月十九日、於アメリカン・ベーカリ、

1、うばが餅に就いて…………中山太郎

2、現存の若者宿に就いて………江戸川亂歩

3、精神神經症の分類…………大槻憲二

一、昭和八年一月廿日、於アメリカン・ベーカリ、

1、ユングの聯想法…………田内長太郎

2、心理分析と文學批評…………荒川龍彦

3、倶舍論中のエディポス、コムプレクス的辭句に就いて…………長谷川誠也

4、科學的文學批評論序説………大槻憲二

一、同年二月二十日、於アメリカン・ベーカリ、

1、所謂天一坊の夢に就いて……大槻憲二

2、忘却想起の契機となつた夢の話……………田内長太郎

3、民間傳承と夢 橋姫の話…………中山太郎

一、講習會

入門的知識を授くるを以て目的とす。

於當研究所、月々一回、その都度通知。

海外斯學界消息

印度に於ける分析運動

『印度精神分析學協會』の一九三一年度に於ける活動を『國際精神分析雜誌』第十三卷より玆に轉錄する。同じ東洋に於いて、斯學がこれほど熱心に研究されてゐることは我々に甚だ興味もあるし、刺戟にもなる。佛教と精神分析との類似を知る我々としては、彼等が優秀なる分析者たるの可能性を疑ひ得ない。（記者）

一月三十一日。當年度總會開催。その經過記事は同誌第十二卷に掲載されてゐる。

三月九日、ジバン・クリシュナ・サルカール教授『婦人の生活に於ける空想實施。』

五月六日。フロイド教授の七十五歲祝賀祭を催す。十九名の會員、準會員並びに來賓數名出席。決議事項——

一、祝賀電報を直ちにフロイド教授に發つこと。（同夕電報は發せられた。）

二、協會基金の內より適當なる贈物を購ひ、これをフロイド教授に贈ること。論文の殘部は國際精神分析學會出版部に送ること。本協會は同學會に加入してゐるからである。

フロイド教授に贈るべき適當なる品物を購ふための實行委員が直ちに任命せられた。委員は、トラヴンコーア（地名）からヴィシュヌ・デヴ・アナンタ Vishnu Ananta Deva の象牙彫像を手に入れた。この像は言語學や聖像形体に關する一大權威者の指導の下に、古代の石像をモデルとして作つたものである。像の上の裝飾はベンガルのムルシダーバードの第一流の象牙彫師に依つて作られ、カルカッタに於ける印度の有名な美術愛好家にして蒐集家なる人がこれを監督した。臺座をやはりその美術家が構案し、或る印度の木工がこれを刻んだ。臺座上の銀板には銘が打たれてあつた。（この象牙彫像はフロイド教授に贈呈せられた。）

サラシラル・サルカー博士 Dr. Sarasilal Sarkar は、フロイド教授からの手紙を朗讀し、遙々印度から同志に依つて送られた論文に對して七十五歳の老翁がいたく興味を持つた旨を傳へた。

ミトラ博士 Dr. S. Mitra はフロイド教授の生活振りを話して出席者に聞かせた。

ランギン・チャンドラ・ハルダー教授 Prof. Rangin Chandra Halder はフロイドを賞讃し、藝術の分野に於ける彼の貢献の如何なるものであるかを說いた。

マイティ氏 Mr. Maiti はアカデミック心理學に關するフロイドの態度に就いて論じた。

バークリ・ヒル中佐 Lieut. Colonel Berkeley Hill は、嘗てベルリンに於ける國際精神分析總會に於いてフロイド教授に會つた時の個人的記憶を語つた。

會長ボーゼ博士 Dr. G. Bose はフロイド思想の始めから今日までも展開を論述した。

書記長バネルヂ氏 Mr. M. N. Banerji はパンディット・カリパダ・タルカチャルヂヤ Pandit Kalipada Tarkacharja の作に係る、協會から老教授への挨拶のサンスクリツト詩を朗讀した。バネルヂ氏はまたこの詩を說明し、またこれを自分で英釋したものを朗讀した。即ち——

『絕對我の跪拜』に就いて。

『心の動きを知らんとする者等にとつて新たなる輝かしき光明となれるこの專門學者に、美事なる業績を了へて漸く七十五歳の老齡に達せしこの價値高き人に、このフロイドに勝利のあれ。』

『卿は高き知慧を以て、心の中に動くさま〴〵の、非我には測り知り得ざる力の神秘を開くの榮を築き給へり。心の病を扱ふの定かなる手だてを、美事にも工夫し給へり。人の自我には知られぬ、或る心の姿は存するものなり。されど證しの力に依れば、これを取出し來ること難からず。』

『針を以てもさし透すこと能はざる心の底の仄暗き、甚だしく錯綜せるものを透明にし後へり。何人かよく卿と比肩し得む。神の惠みは卿に於いて最高の限度にまで達せり。外面の病は救ふに易し、されど心の病を癒すこと

61

は難し。それ故に新たなる道を示し給ひし卿は、永久の年を生き給ふべきなり。』

『印度に於ける有識者より成る我等の協會は、卿の異常なる盛名に動かされ、卿の榮えを讃ふるものなり。卿がうからやからと共々に樂しみを亨けつゝ、その研究をいや續け給はむことを……。』

この詩の寫しと飜譯文とを、フロイド教授に送ることになつた。

バネルヂ氏は、やがて精神分析運動の經過を簡單に說明し、本協會の會員が一般に知らせるためになした活動をも紹介した。

最後に、會長はフロイド教授の鉛筆スケッチを壁面に揭げさせた。これは有名な畫家ジャティンドラ・クマール・セン Jatindra Kumar Sen 氏が、まだこの大科學者の寫眞も見ないで、描いた想像畫である。この畫を見てフロイド自身が感想を述べて來た手紙を、やはり衝立に揭げた。人々はこれに對してみな非常に興味を持つた。

七月十二日、準會員選擧。カルカッタのプレジデンシ・カレッヂの物理學の名譽教授マハラノビス教授 Prof. Mahalanobis その他男女數名。

シャムスワルプ・ジャロタ氏 Mr. Shamswarup Jalota は『無意識に就いて』講演し、現在の語の用法が種々な學者に依つて區々な意味に用ゐられ、不統一であることを論じた。彼は生得の無意識と生後に得た無意識とを區別する說に讃し、特殊の心的要素を意識してゐる度に應じて、三十程の項目を擧げて詳細に分類した。名稱を嚴格に限定し、曖昧と混亂とを避けねばならないと氏は主張した。

七月十六日。サルカール博士は『Prasad（神又は偉人の屍体を食物にすること）の心理』について講じた。彼は印度に於けるそのやうな屍体食物の聖餐の現存する信仰を研究し、それが Skanda purana にまで辿り得ると云つた。彼はフロイドの『トーテムとタブー』から種々の引證を試み、また自分の分析患者から引例した。

七月十九日。バネルヂ氏は『贖罪の印度人的心理』に就いて講じた。論旨の大要をやがて論者自身が配布する

から、それまで討議を延しておくと云ふことになつた。問題は極めて錯雑してゐるから、何れまた後に採上げることにするであらう。

八月十五日。評議會と研究所との聯合會。パルスラム氏 Mr. Parsram 及びガングリ氏 Mr. Ganguli 氏とが研究所で分析を受けたいと申出て、受諾された。ボーゼ博士がパルスラム氏を分析するやうに依頼された。分析者たらんとする者の訓練のための準備は完了した。心理學部の教目の中に入つてゐない特別の課程は毎週（日曜以外の日）に午後六時から與へられることになつた。

ビレンドラ・ナード・ゴッシュ氏 Mr. Birendra Nath Ghosh は準會員となつた。

十一月十一日。タルン・チャンドラ・シンハ氏 Mr. Tarun Chandra Sinha 他二氏、準會員たらんと申出て、受諾さる。ビレンドラ・ナート・ゴッシュ氏が研究所に於いて訓練を受けんとの申出では、受諾さる。

印度精神分析學會に依つて承認せられたる實行的精神分析者の資格を支持することが、研究所の薦めに依つて決せられた。

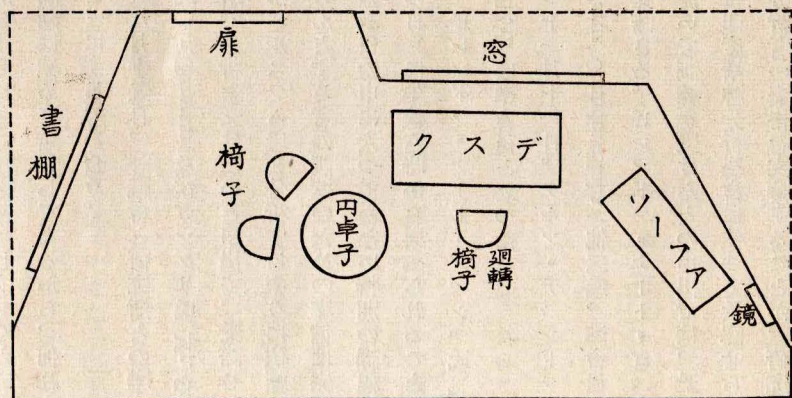
九月廿八日。ベルリンのマグヌス・ヒルシュフェルド博士 Dr. Magrus Hirschfeld が本會に賓客となつて來會せられ、『同性愛は先天的か、後天的か』に就いて講演あり。

『英語英文學講座』刊行

新英米文學社（東京市澁谷區櫻ケ丘町四番地）から五月に刊行される由。本研究所關係者にての執筆者は、

一、精神分析と英文學　長谷川誠也氏

一、アーノルド・批評論　荒川龍彦氏

63

養父（一幕物）

大槻憲二

人物　大審院判事、人見庸藏（五十五、六歳位）
養女ふみ子（二十歳位）
女中はま（十七、八歳）
音樂學校學生、山名篤（二十三、四歳）

時　現代

場所　東京山の手

舞臺は庸藏の洋風書齋。正面奥寄りに抽出付の大デスクあり。その向ふには硝子窓あり。植込を隔てゝ街上を見下すやうになつてゐる。窓と並んで扉あり。他の室に通ずる。デスクの前に廻轉椅子あり。デスクの左に圓卓子あり。圓卓子の周圍に椅子二脚。廻轉椅子の右背後にソーフア一臺。そ

れと並んで姿見鏡が壁に掛つてゐる。鏡の正面の壁は一面書棚になつてゐる。
和服を着たる庸藏は机（デスク）の前の廻轉椅子に腰掛け、煙草をくゆらせつゝ新聞を見てゐる。盛裝せるふみ子、花瓶に花を豊かに盛りて、それを大事さうに捧げて室に入り來り、圓卓子の上に置く。

庸藏 （花と娘とを交互に見遣りつゝ）おや、どうしたのだ。大層美しいぢやないか。

ふみ 美しいでせう。それや、私が今朝は早くから起きて、近所中の花屋を驅け廻つて集めて來たのですもの……。

庸藏 いや、花の事ぢやない。お前が大層美しいと云ふ話さ。

ふみ あら、いやなお父さん。だつて今日はお芽出度い日ですもの。私の誕生日ですもの……。

庸藏 お前の誕生日だつて……？　お前の誕生日は九月ぢやなかつたかい？

ふみ いゝえ、滿一ケ年の誕生日ですわ。

庸藏 うむ？　と云ふと？　あゝ、あゝさうか。ふむ。ふむ。もうそんなになるかなア。早いものぢやのうお前が自家の娘になつて、もう一年になるかのう。（と娘を見直して）ふむ、だが大層美しくなつた。

ふみ いやですわ、お父さん、そんなに御覽になつちや（と、しなを作る）

庸藏 併しお誕生日だとすると何か御馳走を作らなくちやいけないな。

ふみ えゝ、それはもう。ちやんと用意がして御座います。

庸藏 さうか、それはなか〳〵手廻しがよい。わしには內證で、昨日から用意をしてゐたのだな？

ふみ えゝ、さうよ、だつてお父さんは私の誕生日だつて忘れてゐらつしやる程薄情なんすでもの。

庸藏 薄情は恐れ入つた。

ふみ もう十時ですから、お茶とお菓子でも持つて參りませうか。

庸藏 あゝそれはいゝな。今日は丁度幸日曜に當つて、

のんびりとお前のお誕生が祝へて非常に都合がよかつた。

ふみ　では、お茶を持つて参りますわ。

庸藏　いや、それならベルを押してはまに持つて來させればよい。

ふみ　いゝえ、よう御座います。私行つて参ります。

（いそ〳〵と正面のドアより立去る。）

庸藏　（新聞を机の上に投出し　ソーフアの上にどつかと腰をおろし、兩腕を後頭部にやり兩脚を組んで上脚をびん〳〵させてゐる。）

ふみ　（二人前の茶菓を銀盆に載せて持ち來り　圓卓の上に置き、自分の分は卓子の上に下して、父の分だけを銀盆に載せてソーフアの上、父の側に置く。）どうぞ召食れ。お茶の淹れ方下手でせう？　でも、我慢して下さいませね。

庸藏　うむ〳〵。いゝよ。結構だ。そのお菓子もお手製かい？

ふみ　えゝ、さうですの。でも、うまくふくれないんですの。ホヽヽヽ。

庸藏　いや、あんまりふくれん方がいゝさ。

ふみ　あらひどいわ、私は、はまのやうにふくれやしませんわ。

庸藏　いやさう云ふ意味ぢやないんだが、どうもよく氣が廻るね。

ふみ　でも、判事さんは皮肉ですもの。

庸藏　家庭へまで、裁判所での皮肉を持ち込みはしないよ。

ふみ　さうでもないやうですわ。

（折から戸外に號外賣のベルの音。）

庸藏　何だらう、今ごろ號外の音は……？　何かまた事變でも起きたのかな？　どうも近頃は物騒なことが多くての。

ふみ　（窓へ行つて戸外を眺める。）あのベルの音は私にはやつぱりなつかしう御座いますわ。私も前には街頭であの音をさせてゐたのですもの。私は自分が新聞賣子であつたと云ふことを人に知られるのが恥しい

やうな氣がするのを恐れてゐますの。私は今は大變仕合せですけれど、前だつてそんなに不幸ではなかつたと思ひます。街に立つて埃まみれになつて働きながら、女學校をともかくも出やうと云ふ決心にはやはり妙な喜びが御座いましたわ。

庸藏　わしもお前の健氣な働き振りに目をとめたのぢやから、その事は決して恥づるには及ばぬ……。自家の新聞を全部斷つてしまつて、毎朝毎夕お前の手から新聞を買ふた事は今ではもうなつかしい思ひ出となつてしまつた。はや、一年前の夢となつてしまつた。まア、こちらへこい。わしは昨夜、妙な夢を見たぞ。その夢の話をして聞かせやう。（とソーファの片側ににぢり寄りて、ふみ子を片側にかけさせる）

ふみ　妙な夢つて、どんな夢で御座いますか？

庸藏　何でもわしとお前とが二人で高い山の上を歩いてゐたのぢや。右は切立つたやうな崖で、左は千尋の谷ぢや。時刻は夕方のやうであつた。靄は谷底を閉ぢこめて、陽は怪しい鈍い赤色の光を見せてゐた。と思ふ途端に俺が先かお前が先か知らぬが、足を踏み外してその恐しい谷底へ轉り落ちたのだ。そのくせ身体はふうわりとしてゐて足腰を打ち砕いた氣色も感ぜられないのだ。ふと傍を見るとお前はうつぶせに大きな岩の上に倒れてゐるのだ。さうだ、一寸立つて見い（とポーズをソーファの上に作らせつゝ）こんな風に倒れてゐた。わしはもうこれはてつ切り死んでゐるものだと思つて、かうして抱き起し、（とみふ子を膝の上に抱きかゝえて、ソーファに腰を下し）丁度死せるコルデリアを抱いたリヤ王のやうに、あちこちをさまようたのぢや。さうしてやうやく水のチョロ〱と流れてゐる泉のそばまで辿りついて、そこで泉から水をふくんではお前に口うつしに水を飲ませ（と、ふみ子の口に殆ど接せんとす。二人やゝ亢奮し、ふみ子の方も本能的な或るこなし。庸藏の眼あやしく輝きて暫く無言）さア、幾度ばかり飲ませたかなア。（とその聲は怪しくふるへてゐる）ハ、、、……（乾ける笑ひ）それからはどうしたかしら、忘れてしまつた。

ふみ　お父さん、私それでコルデリヤのやうに死んぢやつたのですか。

庸藏　(空虚に笑ふ)ハ、、……、いや、たしかに生き返つた。水を飲ませたのでね。

ふみ　(やゝ甘えたる聲にて)私まだ死ぬのはいやだわ。

(折からドアをノックする音、兩人少しくあわてゝ立上る。再びノックの音。)

庸藏　(威儀を取直して)お這入り。

はま　(入り來る)あのう、山名さんがお出でになりましたが……。

庸藏　山名さんのお父さんの方か、篤さんか。

はま　あの、篤さんの方で御座います。

庸藏　お通し申せ。

はま　もうお出でになりました。

篤　(手に花束を持ち遠慮なく入り來り、快活に)小父さんお早う御座います。ふみ子さん暫くでした。今日はお芽出度い日でしたね、記念日でせう？(と二人を等分に眺める)親爺がふみ子さんの御兩親とふみ子さんとを連れてお宅へ上つたのが、去年の今日であつたと記憶してゐますが……。

ふみ　よく覺えてゝ下さいましたわね。お父さんなんかもう忘れてゐらつしやるのよ。貴方のお父さんに私の身元調査を頼んだりしたくせにね。警視廳の鑑識課長に頼まれちや何だつて分つてしまひますわね。ホ、、……。

篤　親爺も今日上る筈でしたが、日曜に拘らず例の暗殺事件の鑑識のために寧日なしと云ふわけです。

庸藏　さうかい。ぢやア今日の號外も何かそれに關係があるのかな。

篤　號外は見ませんでしたが……さう〳〵これはお祝の品です。(花束をふみ子に渡す。)

ふみ　おやまア、有り難う存じます。ぢやアこれに一緒にさして置きませう。(と。さきの花瓶に入れる。)

篤　これは銀座の資生堂でも始めての賣出しの新種でしてね。全く珍らしいバラなんですよ。

ふみ　有難う。

庸藏　わしにはよく分らんがよさゝうぢやのう。……さうだ。今の話で思ひ出したが、君のお父さんが例の大ブルジョアの暗殺事件で犯人の持つてゐたピストルの出所が分らんと云ふて困つてゐたやうだが、それならわしに少し心當りがあるぞ。歸つてさう云つて吳れ。（と、デスクの抽出しよりピストルを取出し）これは横濱の金村銃砲店で求めたのだが、スペイン製の極く稀なものだ。丁度これと同じ種類のを犯人が持つてゐたのだから、その出所は容易に分る筈ぢや、歸つたらさう御父さんに云つておいて吳れ給へ。

篤　あゝさうですか。（と、ピストルを受取り暫くそれを眺めてゐる。）

ふみ　氣味が悪いからそこへ置いときなさいませよ。

篤　（無言のまゝそれをデスクの上に置く。）

（その時女中茶菓を持ち來りて、篤の前の圓卓の上に置きて退場。篤、砂糖を入れて茶を掻き廻してゐる。）

ふみ　（急に吹き出す）ホ、、、……。

篤　どうしたのさ、ふみ子さん、急に思出し笑ひなんかしてさ、氣味の悪い。

ふみ　だつてさ、田町の驛の前で私が立つて新聞を賣つてゐると、巡査さんが物々しく三人も來て、あの電車通りの町角で立つて私を見張つてゐるんでせう。さうして私の家まで、あとになり先になりついて來るんですもの、私こそどんなに氣味が悪かつたか知れなかつたことよ。さうしたらそれが篤さんのお父さんの御命令で警視廳巡査と分つたのでせう。私、ほんとにどんなに心配したか分らなかつたわ。

篤　だつてそれは小父さんからの御依頼で親爺が命令したんでせう。

ふみ　（無邪氣に）どうしてお父さん、私のやうなものを見初めて下さつたの？

庸藏　（いさゝか面喰つて）見初めるはおだやかでないが……（急に話頭を轉じて）まア、それよりは音樂の稽古はどうぢや。今日篤君はそのために來て吳れたのぢやなからうが、序だから一寸さらつて貰つたらどうだ？

ふみ　え〻お願ひしませうか。ぢやア又後でゆつくりお話しませうね、今日はゆつくりしてゐらつしやいませね。

篤　有難う。ではふみ子さんの部屋へ行かうか。ぢやア失禮します。

庸藏　どうぞお願ひします。

ふみ　一寸彈いて來ますわ。

（兩人退場）

庸藏（額の汗を輕く平手にて拭ひつ〻獨白）見初めると云ひ居つたな。際どい言葉を使ふ奴ぢや。いや、さうであつたのかも知れぬ。どうやらさうであつたらしい氣もする。そこまでは、警視廳の鑑識課長にも鑑識出來なかつたし、大審院の判事にも判定出來なかつた。ハ、、、……。

（折からあざやかなピアノの音遠くの室より洩れて來る。庸藏は机の抽出しから汚れたる白地の婦人仕事服を取出し來る。ソーフアに憑り、仕事服を膝の上に載せてこれを幾度も々々も無言のま〻に撫で〻ゐる。折柄、廊下に急に跫音。庸藏あわて〻服を後にかくす。）

ふみ（ドアより半身をのぞかせ）お父さん、ゐらつしやらない？　今日は私の誕生日だから三人で呑氣に歌を唄ひませうよ。そんな處に隱者のやうな顏をしてゐらつしやらなくてもい〻でせう。

庸藏　ふむ、だが俺にはお前方のやうな歌は唄へんからのう。

ふみ　でもい〻わ。そんならそばで聽いてゐて下さればい〻の。でないと何だか淋しいわ（とボツ〳〵部屋の中に這入つて來る。）

庸藏　あ〻有り難う。お前の親切は身に浸みて嬉しいが併し俺は一寸明日の判決の準備をしておかんければならぬでのう。

ふみ　明日の判決、そんな大事件なの？

庸藏　ふむ、まア大事件ぢや。ことに依ると新判例を作ることになるかも知れぬ。さうぢや、お前の意見を聽いて見やうかの。それに參考にならう。ま〻、こ〻にお座り。

ふみ　だつて、私なんか何も分らないわ。

庸藏　分らなくてもいゝ、常識論でいゝのぢや。常識の方が時に遙かに學理より正鵠を得てゐることがあるからのう。

ふみ　（父と並んでソーファに腰を下す。父は奥の方に、娘は見物席の方に。）

（ピアノの音また一しきり。ふみ子ベルを鳴らす。女中登場。）

ふみ　（女中はまに）山名さんに一寸失禮しますつて云つておいて頂戴。直ぐ參りますつて……。

はま　かしこまりました。（お辭儀をして圓卓子の上の茶菓の皿を持ちて退場。）

庸藏　まづその被告といふのは十八になる小娘ぢや。それがむつきの中から育てゝ呉れた養父を殺したと云ふ懸疑があるのだ。

ふみ　どうしてそんな大それたことをしたのでせうね。

庸藏　いやしたか、せぬか、まだその確かな證據は擧つてをらぬが、他に犯人の目星がつかぬし、それにその娘に於いて、父を殺したと思はれる理由があるのぢや。

ふみ　それはどんな理由で御座います？

庸藏　それはお前の前では一寸云ひにくいが、併し事實は嚴然たる事實だから云ふが、その養父のためにその娘が最も大切にしてゐたものを奪はれたのぢや。

ふみ　まア、隨分の人非人ですわね。自分がむつきの中から育てゝ來たものに、よくそんな非道いことが出來たものですわね。それでその娘が復讐的に殺したのですね。それは當り前ですわ。

庸藏　扶養の恩をさし引いてもか？

ふみ　扶養の恩と云ひますけれども、それは始めからさう云ふ惡い計畫の下に育てゝ來たのだとしか思はれませんわ。

庸藏　いや、それは結果論だ。結果から見て動機を判斷するのは輕卒ぢや。それに、その娘の母親といふのに、抑々その親爺といふのが戀してゐて、戀を遂げ得ず、他の男との間に出來たその娘を生み落すと同時にその女が死んだので、その赤ん坊を引きとつて

せめてもの心やりに自分の娘として育てゝ來たといふのぢや。

ふみ　でも、そんな獸的行爲は許せませんわ。

庸藏　わしもさう思ふて來た。が、近頃になつて、どうもさう一概には云へないのぢやないかと考へるやうになつて來た。

ふみ　まア、大審院の裁判長ともあらうお父樣が、そのやうに道德觀に動搖を來しては、心細う御座いますわ。

庸藏　いや、なか〳〵手剛いのう。恐れ入つた。然し人間と云ふものはさう道德や法律通りには動けるものではないかも知れぬ。判事としてかういふ事をいふのは穩かでないかも知れぬが、併し心は法律のやうに作りつけではないからのう。

ふみ　では、その娘の父殺しも是認せなければならぬかも知れませんわね。

庸藏　そこぢやて。問題の要點は……。父の行爲を惡とすれば、娘の父殺しもその情狀を酌量せんければならぬことになる。つまり法律上では犯罪を構成するとしても、道德上ではこれを幾分是認せねばならぬことになる。もし父の行爲を是とすれば、娘の行爲は不當なる尊族親殺しとなる。

ふみ　で、お父さんはその爺さんの行爲を是認しやうとする方に傾いてゐられるので御座いますね。

庸藏　まア、さう云へるかも知れぬ。

ふみ　（無言にて多少父の方に身体をそむけるこなし。）

庸藏　併しのう、ふみ子。父としての愛情と、男としての愛情との間に、さうかつきりとした區別をつける事が出來るであらうか。人間の愛情の本性そのものが、近頃わしにはわからなくなつて來たのぢや。そこに骨肉の關係があればともかくもぢやが、それがないとすれば……。

（遠のく部屋にてピアノ激しく鳴り初む。）

ふみ　おや、篤さんを一人で置いてきぼりにして惡いわ。

（と立上る。）

庸藏　まア併し、一寸待て、ふみ子。（と　非常に亢奮し

て追ひすがり、娘の手首を捕へて再び元の席に据える。今度は娘が奥の方に父が見物席の方に近く掛ける。暫くは手を握つたまゝにして娘の顔を見据えてゐる。ふみ子恐怖の表情、やがてその手を離す。が、眼は同じやうに娘の眼を見つめてゐる。）もしその父の心に僞りがなかつたとすればどうぢや。さうしてその娘の方にも時々は父に對して……。

（ピアノまた激しく鳴り響く。）

ふみ　（極度の恐怖に痙攣的に立上り、ソーフアの許を離れて舞臺正面のところにて暫く佇立。）……

庸藏　ふみ子。待てといふに、まだ話が……。

ふみ　（逃げるやうにドアの方に驅寄り退場。）

庸藏　（立上り）ふみ、待たぬか。（暫く佇立、やがて憤然としてデスクの上なるベルを激しく鳴らす。）

はま　（登場）御用で御座いますか。

庸藏　うむ、あのう、お孃さんを呼んで呉れ。

はま　かしこまりました。（と、退場。）

庸藏　（亢奮してゐるが平氣を裝つて、煙草に火を點じてソーファに腰を下してゐる。）

篤　（腕を組んで入來る）小父さんどうしたのです？。

庸藏　（悖然として、暫く間をおき）何がどうしたと云ふのだ。

篤　ふみ子さんは眞蒼な顏をしてゐるぢやありませんか、僕困りますね。

庸藏　（暫く間をおき）君が何も困る事はないぢやないか。一体、はまは君にこゝへ來るやうに云つたのかい。

篤　いゝえ、でも、ふみ子さんが僕に代りに行つて呉れと云ふのです。

庸藏　君に來て貰つても仕方がない。（立上つて扉の方を指し）さア行つて呉れ給へ。一寸ふみ子に尋ねてゐた事があつたのに、途中で座を外してしまつて不屆な奴ぢや。

篤　（不精無精にて退場。）

庸藏　（腰を下しつゝ）年長者の前に出て腕組みをし、突立つてゐる奴があるか。近頃の若い奴は、禮儀を知らない。

ふみ （蒼ざめた顏をして入り來る）どうも失禮しました。

庸藏 （つとめて優しく）そこへお掛け。（圓卓子の前の椅子を指す。ふみ子のかけるのを見て自分も廻轉椅子を引出してそれにかける）どうしたのだ。話の途中で逃げ出したりして、お前は氣でも狂つたのか。

ふみ （面を伏せて無言。）

庸藏 えゝと、何だつけな。議論の要點はどこまで行つてゐたかな。忘れてしまつた。

ふみ （低い聲にてボツ〳〵語る）お父さん。御免下さいましね。私、お父さんに豫めお許しを得ておかなかつたのが悪かつたのですけれど、やはり人間は自然な生活をしなければ、結局はみんながお互に不幸にならなければなりませんし、それに、私、やはり一度自分の魂に誓を立てた事は、如何に義理のためとて破るわけには參りませんしゝますから……。

庸藏 （いら〳〵して）お前何か誤解をしてをりはせぬか、それは誰の事を云つて居るのぢや。お前自身の事か……。馬鹿！ お前はどうかしてゐる。ふだんはそんなに頭の悪い女とも思へなかつたが……。えゝと待てよ。問題はどこまで行つてゐたかなア。（頭をかゝえて）ちえッ！ 頭が無茶苦茶になつてしまつた。ちつとも考へが纏らなくなつてしまつた。（空虚を見つめて）さうだ。……併し、それよりお前は一体あの父殺しの娘の行爲を是認する方に傾いてゐるのか。

ふみ 私には何とも判斷がつき兼ねます。

庸藏 （赫として）嘘をつけ！ お前は是認してゐるのだらう。それに違ひない。それならそれと、正直に云へ。俺はそんな事で怒りはしない。

ふみ いゝえ、本當に分らないので御座います。むしろ悪いと思ふ方に傾いて居ります。

庸藏 （憤然と立上り）父を愚弄するか。さう云へば俺が喜ぶと思つてゐるのだらう。（圓卓子を廻つて娘を捕へんとする。）

ふみ （急ぎ立上り、反對側に逃げ）いゝえ、お父さん、何卒御勘辨を……。私は……私をどうぞ……、あの、私にさわらないで下さい。私は何だかお父さんが恐

しくなりました。どんな事になるか分らないやうな氣がして來ました。私は決してお父さんを嫌つてゐるのではありません。それどころか私はお父さんが……あのさつき、お父さんが父としての愛情と男としての愛情と、きつかり區別がつけかねるやうになつたと仰言つてから、私も何だか自分の心持ちの土臺がすつかりぐらついてしまつたやうな氣がいたします。私はお父さんがこわいのではありません。私自身がこわいのですわ。

庸藏 （たまりかねて腕を延して娘を捕へ、ひき寄せる。情熱的な眼で娘の顔を見つめる。）

ふみ アレー（と身をもがく）お父さん、離して、離して……。

（扉をノックする音、父なほ離さず、再びノックの音）

ふみ （小聲で）それ、誰か來ましたわ（と、やうやく父の腕から逃れて扉の方に馳け寄る。そこにドアを開き半身を現してゐる篤の腕の中に抱かれて、暫く父の力を顧みてゐる。やがて二人扉の陰にかくれる。扉を閉める音、はげしく室内をゆり動かす。）

庸藏 （その音にドキッとすると共に、憤然として突立つてゐる。やがて遠くの室にて、若き男のひそかなる忍び笑ひきこえ、それがやがて華かなる合唱の歌聲となる。庸藏憤然としてデスクの上なるピストルをとり扉の處に突進し、二三度扉を開けては閉ぢ、閉ぢては開ける。その內ピストルを持つ手が震えてゐる。やがて決然扉をしめ、腰より鍵束を取り出し、ガチリと錠を下す。）馬鹿々々しい。大人げない。併し一旦とり上げたピストルは何處へ向ふのだ。男へか……卑怯だ。女へか……忍びない。では自分へか。（と云ひつゝソーファのところへ歸り來り、さき程の仕事服を取上げ、それを胸にかざし、その上から自分の心臓のあたりへピストルを擬し、上手の姿見鏡の前に立ち、鏡中の自分の姿を暫時見つめてゐる。）愛するものを持つてはならない魂、地上において果してそんな生活が堪えられるか。……併し……併し……大審院判事人見庸藏氏の失戀自殺か。三面記事の特ダネだな。（急にふり返つて圓卓子の上の花瓶を覗つて、ピスト

ルを發射す。花瓶碎けて花は四方に散亂す。沈默の內に自嘲的の苦笑。室外に騷然たる跫音。けたゝましく扉をたゝく音。）

ふみの聲　お父さん、どうなすつたの？

篤の聲　小父さん、何かあつたのですか？

ふみの聲　こゝを開けて下さいな。

篤の聲　開けて下さい。今の音は何ですか。

ふみの聲　お父さん、お父さん。（扉を叩く音ひきり。）

庸藏　（冷然として振返つても見ず。ソーファに腰打ちかけて膝の上に仕事服を載せて、徐ろに撫でゝゐる。やがて深き〳〵吐息の後に）やはり野におけばよかつたのかなア（と云ひつゝ仕事服をとりあげて、そつと眼元を拭ふ。室外にて扉を打つ音また一しきり。……………………靜かに幕。）

エディポス王（ソフオクレス作）

松居松翁　譯
松居桃多郎モンタージュ

時……紀元前十二三世紀頃。希臘英雄時代の末期。
　トロイ戰爭の直前。
所……希臘のテーベなるエディポス王の館の前。
人……エディポス王（テーベ市の僭主〔ティラノス〕）
ヨカスタ（先王ライオスの妃にして、今はエディポスの妃）
クレオン（王妃ヨカスタの弟）
ゼウス神の祭司
チレシアス（豫言者）
コリントよりの使者
老羊飼（先王ライオスの奴隷）
王の侍臣。

アンチゴーネ｝エディポスの王女
イスメーネ｝
歌舞團（コレウタイ）（十五人のテーベの老人達よりなる。）
祭司に從ふテーベの市民達。
エディポス王の從者達。
ヨカスタの從者達。
クレオンの從者達。
チレシアスの手を引ける少年。

前奏曲

第一幕（一――九一〇）

（一）プロヽゴス（一――一五〇）

（正面に宏壯なるエディポス王の館の入口。その前面には廣い石段があり、石段の中央に大きな祭壇がしつらへてある。

テーベ市民の歎願者の群が、祭壇の前に座つてゐる。壇の上には各々の歎願の標（しるし）なる橄欖の枝が置いてある。群集中の祭司だけは一人正面の扉に向つて立つてゐる。

靜かに扉が開かれて、まづ二人の從者が出で來り、戸口の左右に列ぶ。やがて、エディポス王の姿が現れる。）

エディポス　（靜かに一同を見渡して）古のカドモスの末裔（すゑ）なる我國民（くにたみ）よ。何故にかく哀訴の標（しるし）の小枝を手にして我前に跪くぞ。今やこのテーベの町は香煙に滿ち、生に執着の讃歌と悲みの叫びにどよめく樣子。他の者の口よりその譯を聞かんよりはと、余自ら此處までは來た。余は世に譽も高きエディポスなるぞ。いで、語れ老人よ。人々の名代には相應しきそなた。如何なる心にて來りしぞ。恐か、望か。余は喜んでお身達を助けう。若しかゝる願ひを徒（あだ）に過さば、余は無情の王であらうぞ。

祭司　我國を知めすエディポス王、御覽ぜよ、この祭壇を取圍む人々の年ばえを。步行もまゝならぬ幼兒もあれば、此身の如き老朽ちし祭司もあり、又かく華やかなる若人も雜り居る。尙その他の人々は例の哀訴の小枝を手にして、市の廣場、パラスの二つの社殿、或ひはイスメナスが占の神火の前に祈りなげく。さて、御覽の如く此町は死の怒りの波に苦められ、人々ははや頭擡ぐる氣力もなく、花咲き實る國土にも、牧場に遊ぶ家畜にも、死産に喘ぐ母親にも、恐しの呪ひは降り下り、剩へ火の槍を手にせる疫病の神は都の空を荒れ廻り、カドモスの族は衰へ、たゞ冥途の神のみぞ獨りをめきと涙の富を增すばかり。我等王の御前に歎き願ふは、王を神と等しく思ふが爲ならず、人の世の出來事の大となく小となく、王こそは隨一人と思へばこそ。況して過る頃、我カドモスの都に來られ、誰教へねど、スフィンクスに課せられし貢の犧牲より、我等を解放し給ひし君こそは、誠に神の御助けよと我等一向信じ申す。されば誰が目にも榮光かゞやくエディポスの王よ、請ひ願はくば神の託宣によるもよし、或は人力のみに依るもよし、たゞ我等を救ひ給へ。人間中のいとも優れたる君よ。再び我國土を救ひ給へ。更に君が名を擁護し給へ。かつて國民は君を國土の救ひ主とさへ崇めしに、忽ちにして敗滅に歸したりとの記憶を以て、君が治世を汚さしめ給ふな。たゞ此都を堅牢に打建て給へ。王よ、今も昔の如くに、又來るべき日も此國土を治しめさんとならば、國民の充ち滿ちたる國土の王とならんこそ、空虛の土地に君臨せんよりは遙かにまさる王道にはあらずや。其處に住むべき民衆なくば、塔とて船とて何にかすべき。

エディポス　憐れなる子たちよ。そち達の求めに來れる事柄は、余は既に知る、能くぞ知る。されどそち達の悲みは余に比ぶれば遙かに輕し、そち達は己一人に愁ひを限れど、余の心痛は此都と、おのが身と、そち達の上にかゝる。されば熟考の末、こゝに一つの手段を見出し、既に實行の途につけり。則ち余はメノケオスの子にして、余の義弟なるクレオンをピュチヤなるフォ

79

イボスの祠に派遣し、此町を救はん爲になすべき事いふべき事の伺ひを立てた。さるにても彼が歸りの遲さよ。旅路の日數ははや豫定を越えてあるに。

（群集の中の少年、祭司に近づきて私語く。）

祭司　（少年の指さす方を振向いて見て）おゝ、よい折にこそ仰せられた。今しもそのクレオン殿御歸着の由に御座ります。

エディポス　おゝ、王なるアポロよ。彼は顏さへ喜びに輝いて、これへ來るわ。

祭司　いかにも、月桂の實にかほる冠をつけてこなたへ見ゆるは、よき便りのお使に相違なし。

（クレオン旅裝にて、從者を引つれ左手より登場。）

エディポス　（興奮して）君よ、姻戚よ、メネケオスの子よ、いかなる託宣をば持還つたぞ。

クレオン　（冷靜に）よき託宣。今はよし不幸とも聞ゆれ、時節だに到來せば、凡ては幸ひとなり申さう。

エディポス　託宣は何と。それだけにては、勇みもならず、恐れも感ぜず。

クレオン　（群集を一瞥して）人々の前もお厭ひなくば、速やかに語り申さう。但し奧へ參つて打明けませうや。

エディポス　皆の前で。余が忍ぶ苦痛こそは、我一人の爲めならで、此人々の爲めの苦痛ぢや。

クレオン　（かたちを改めて）さらば御許を蒙つて、神の御旨を申上げうず。我等の神なるフォイボスはかくこそ託宣あらせられた。此國土に宿れる汚穢を祓ひ、救はん道のなき迄に蔓延らす勿れと。

エディポス　して〳〵いかなる淨めの儀式をもつて。

クレオン　或一人の人間を追放つか、たゞしは血を以て血を贖ふか。

エディポス　してその人とは。

クレオン　君がこゝを治しめし給ふ以前、此國土に君臨せしはライオス王でござつた。

エディポス　その名は余も聞き知り居る。されどそのライオス殿に余は一度も逢はなんだ。

クレオン　かの君は既に世を去り申したれど、神は今明かにその殺害者を罰せよと命ぜられまする。

エディポス　して、その下手人はいづくに居る。かゝる過去の罪科の、跡形もなき行衛をば、いづこに神は求めよと仰せらるゝぞ。

クレオン　此國內に於てと神の託宣。捜さば捕へ得べけれど、等閑にすぎなば逃れ去るげにござります。

エディポス　してライオス王が非業の最後を遂げしは、家の中か、野の末か、但しは、いづれかの他國であつたか。

クレオン　此國を離れて、デルフイへの途中にてとの人の噂。これ以來再び本國へは歸られませぬ。

エディポス　されどその折の有樣をば見掛けし者とてはなかりしか。或は他の者より何かの便りを傳へ聞きし者とてもなかりしか。

クレオン　ライオス王が侍臣の面々はいづれもその場を去らずに落命。最もその中一人のみ恐れ戰いて逃げ歸りましたが、これとてもわづか一事の外は記憶いたして居りませなんだ。

エディポス　その一事とは何事。一事がやがては萬事を見出す緣ともならう。いかばかり細事たりとも希望の根據の在らん限りは。いざ語れ。

クレオン　彼奴の申狀にては、數多の盜賊群がり襲ひ、多勢の手にて王を打殺したげにござります。

エディポス　盜賊とて黃金を以て買收はずば、かくまで淺間しうは出來ぬ筈ぢやが。

クレオン　それも御道理、さりながら、ライオス王橫死の後、國の不幸のその爲に、誰一人復讐に起たんよすがもござりませなんだ。

エディポス　その不幸とは何ぞ。國王かく無殘な最期を遂げし際、何者がその詮議の道を妨げしぞ。

クレオン　折から彼のスフィンクス奴、例の謎を以て我等を惑はし、物見る力も、道行く術も奪はれ申した。

エディポス　よし、然らば余は再び萬事を光明の前に照らし出さうぞ。死者に對する此心づかひこそ、フ・イボスの神にも相應しく、又そち達にも相應しい。見よや、此國と神との爲めに、そち達と力を協せ復讐の爲に盡す此身を。此穢れの汚點を洗ひ拭はんとするは、

啻に幽明境を異にせる友の爲のみならず、畢竟は余自身の爲ぢや。何物にもせよライオス王の下手人は、やがては余にも同じき暴虐の手を揮ふに極まつたり。さればライオス王に味方するは、余自らを利する道理。いでや人々、蓦地にこの階段より立上り、願ひの枝を取上げよ。さて又他のカドモスの人々を集めよ。余が力は神の力によつて成就されん。然らずばたゞ滅亡あるのみ。

（王はクレオンを連れて屋内に去る。從者等もその後に續き、扉は閉される。）

祭司　我子等よ、いざ立たうぞ。我等が願ひはかの君が誓ふて下された。この託宣を送られたフヮイボスの神よ、願くば救主となつて、此災より我等を解放し給へ。

（一同は各々のその枝を取り上げ、祭司に從つて靜かに下手に去る。）

パロドス（一五一――二一五）

（笛の音につれてテーベの老人達より成る十五人の歌舞團が、三列縦体になつて上手より入り來る。歌舞團長は左側列の中央に居る。最前列が舞臺に現はれ始めた時、次の抒情詩曲調を唱ひ出す。）

合唱一の一（第一向左舞唱歌）

おゝ、美はしの言の葉の、ゼウスの豫言、
如何なる運命をもたらして、
ピトスの黄金の御座より
此光り輝くテーベには來れる。
わが破滅の時は來れり、
恐怖はわが心をゆるがす、
おゝデリヤの救ひの神、
如何なる事をわが上に降し給はんずる。
今迄は知りも得ざりし事か、
或はめぐる月日と共に新たなる事か。
金色の希望より生れし

汝、不死の神よ、告げさせ給へ。告げさせ給へ。

合唱（コロス）一の貳（第一向右舞唱歌（アンティストロフィ））

われらは先づ願ひたてまつる
ゼウスの姫君、神聖なるアテナの神よ、
わがアラゴスのたゞ中の
譽れの御座（みくら）におはします御妹（おんいもうと）
此國土の守り神アルテミス、
さては遠矢射かくるフォイボスの神、
おゝわれに天津光を照らし、
死に對し三倍の助けを垂れ給へ。
かつては不幸の手に此都の捕はれし時、
國境のあなたに疫癘の暴威を追ひ去りし御神よ。
今ぞまた此國土を照覽あれ。

合唱（コロス）貳の一（第二向左舞唱歌（ストロフィ））

あゝ禍ひなるかな、
限り知られぬ憂愁（かなしみ）われを苦しむ。
疫癘はあらゆる民草を惱ますも、
誰一人矛を取りて之を防がんものなし。
豐けき土にも果實（このみ）はみのらず、
産屋（うぶや）の女は苦みなやみて、
分娩（つみ）の叫びをだに洩すものなし。
見よや生けとし生けるもの、
翼をもてる鳥の如く、
焚えさかる炎のはやさもて
黄泉の濱邊へと過ぎ行く。

合唱（コロス）貳の貳（第二向右舞唱歌（アンティストロフィ））

數知れるぬ人々死して都は滅び行き、
たらちねの愛知らぬ子ども達は、
疫病（にやみ）の毒を蒔きちらすもとゝなりて、
地上に仆れまろべども吊ふ人もなし、
人妻も白髪の母も、
そこゝより祭壇のほとりに集りて
その身の不幸を嘆きかこつ。
炎の如く立昇るその讃美歌は、
悲みと憂ひとに立交らう。
おゝ、ゼウスの金色の姫君、

和（やさし）き御顔もて救ひを垂れ給へ。

合唱（コロス）三の一（第三向左舞唱歌（ストロフィ））

黄銅の楯をこそ身につけね、
修羅道の叫喊の裡に、
燃えさかる炎もてわれをつゝむ、
恐ろしの死の神を
此國土より速に逃げ去らしめ給へ。
疾風一陣アムフィトリテの大海原へ、
あるはトラキアの寄る方もなき荒波へ、
死の神を追ひ拂ひ給へ。
夜に果さゞりし死のまがつみ、
眞晝にうけつぎて人を悩ます。
おゝ電光雷火の力を掌握する御神よ、
おゝ、われらの父なるゼウスの御神よ、
霹靂の猛火をもて打ひしぎ給へ。

合唱（コロス）三の貳（第三向右舞唱歌（アンティストロフィ））

ユケイヤの王の神よ。
黄金の弓絃はなたるゝ征矢は、
敵の面前にふりそゝいで、
味方の勇氣を鼓舞し給へ。
さてはリキヤの山々を一目に瞰下（みおろ）す
アルテミスの女神がふり照らす雷火よ。
黄金の糸もてその髪を給び、
此國土の名をなのり、メナトスの仲間にして、
酒に面をかゞやかせるバクコス神、
輝く松明を手にして近くに集まり、
神々の中にもさげすまるゝ、
敵の神と戰ひ給へ。

（二）第一エペイソディオン（二一六――四六二）

（正面の入口よりエディポス王登場）

エディポス（嚴かに）そちたちの願ひもさる事ながら、今余の申す事をよく承れ。若しそちたちにしておのが疾苦をのがれんと望まば、やがてあらゆる苦惱より免（まぬが）るゝ望もないではない。余は王弑逆の曲事について何事も知らず、その事實についても一向に不知案内なれ

ば、何等(なんら)の手がかりをもたぬ限り、その踪跡を搜しもとむる途とてはない。さりながら彼の事ありて程もなく、余は選まれてテーベ人中隨一のテーベ人となりし上は、全カドモスの民たるそちたちに告ぐる。誰にもあれ、ラブダコスの子息たるライオスが何者に殺害されしかを知るものは、——余は命ずる——余に逐一申し出よ。若しそを恐るゝ者あらば、余はその者に命ずる。遠慮なく此國を離れて罪科の危難をのがれよと。或は又他國より移住の者に、下手人のありと知らば、その者をして沈默を守らしむる勿れ。余はその者に褒美をつかはさうぞ。但し余が命に背くものあらば、余が爲すべき事を今にして聞き置くがよい。余が王位を占むる此國の民衆は、下手人に對して保護を與ふるは勿論、言葉をかはしてもならぬぞ。彼と祈禱を共にし、犧牲を同うし、淸めの式を行ふてもならぬぞ。今しもピュジアの御神の託宣が示されし如く、その者こそ穢れし者にて、何人も戸口より追ひ放つべきぢや。かくして余はこゝに神と亡(う)せたる王との爲に嚴かに誓ふ。その下手人こそ、一人にもあれ、多勢にもあれ、其憎むべき生命を絶たずには置かぬと。余は更に誓ふ。それらの事は、余の爲め、神の爲め、天の怒りによつて、荒廢に歸したる此國土の爲めである事を。そちたちの王たりし、かくも尊き御方を殺害せしかゝる凶惡の者は、よし神の命令なしとするも、そのまゝに打捨て置くべき法はない。殊に余はかつて彼の人の保ちたる權力を享け繼ぎ、その寢床と、わが子を生めるその王妃とをわが物とした。若し彼の血統にして中絶せずんば一つ腹より生れし子供たちは、彼と余との羈(きづな)を堅く結んだ筈。しかるに非運は彼の頭を襲ひたれば、余はあくまで彼の味方となり、古(いにしへ)のカドモスとアゲノスの子孫の名譽にかけ、王の鮮血を流したる下手人を搜しに索(さが)すであらう。神々に願ひ奉る。余が言葉に叛く者には、土地よりは收穫を奪ひ、母の胎内よりは嬰兒を生ましめず、現在よりも更に悲慘なる運命によつて、滅亡せしめ給へ。されど忠誠なるカドモスの臣民たち、余が語(ことば)をよしと思はゞ、わが友よ、あらゆる神々たち

は、そちたちと共にありて、永久(とこしへ)に惠みを下すであらうぞ。

歌舞團長(コリフアイオス)　あくまで誓へと仰せらるゝならば、王よ、わたくしも誓ひを立て申さう。わたくしは下手人ではない。まつた、その者を指で示す事もならぬ。王の御尋ねに答へ得る者は、託宣(たくせん)を送られたフォイボスの神でござらう。

エディポス　いしくも申した。さりながら此世の誰一人として、神の御心に叛く事はなるまいぞ。

歌舞團長(コリフアイオス)　しからば、第二の愚案を申上げうず。

エディポス　第三の存意もあらば、それも遠慮には及ばぬぞ。

歌舞團長(コリフアイオス)　聖者チレシアスは、王の王なるフォイボスに次ぐ豫言者にて、此人ならば明白なる事の始終を存じ居る筈。

エディポス　それは余も等閑にはして置かぬ。クレオンが勸めにより、二度迄も迎への者をつかはせしが、何故かくは遲れるのであらう。

歌舞團長(コリフアイオス)　其チレシアスの事以外の噂は、黴の生へた馬鹿々々しいものでござります。

エディポス　その噂とは何ぢや。余にはどの様な話も、氣にかゝる。

歌舞團長(コリフアイオス)　かの王を殺害したるは、さる旅人ぢやと申す噂でござります。

エディポス　其話は余も聞いた。最もそを目のあたり見たといふものは無い。

歌舞團長(コリフアイオス)　されど如何に大膽不敵の下手人たりとも、君の呪咀を承つては辟易せずには居られますまい。

エディポス　かゝる凶惡を敢て行ふものが、なんで空しき言葉位を恐れようぞ。

歌舞團長(コリフアイオス)　さりながらその凶漢を見極める人間が居りまする。（上手を見て）おゝもう其處へ神に等しき豫言者が連れられて參る。彼こそは人間の中たつた一人、眞(まこと)の生活の出來る人ぢや。

（チレシアス少年に導かれて上手より登場。）

エディポス　チレシアスよ。その魂は宇宙萬象を把握し、

語りてよき事、語るまじき事、天の秘密、地のいと低き事相を知る者よ。そなたの目は見えずとも、そなたの心はわが國土が疫病に苦しめられ居るを感ずる筈。大豫言者よ。そなたこそわれ／＼の擁護者にして、唯一の救世者なるぞよ。そなたはまだ、余の使ひの者共より何もきかぬであらうが、フォイボスの御神はかゝる託宣を送られた。此災厄をのがるゝ唯一の道は、先王ライオスの下手人を捜索し、直ちに死刑に處するか、或は追放の刑に處するかにある。鳥の聲による卜占であれ、他の方法を以て知る卜筮であれ、すこしも吝むところなく、たゞ一向にそなた自身を救ひ、此國土を救ひ、余を救へ。われ等は今や、そなたの手のもとにあるのぢや。人間の最も尊き事業は、其人の最善の手段と力を盡して、他の人々を救ふにある。

チレシアス （獨言の如く）あゝ、賢き人の役にも立たぬ智惠をもつこそ恐しい限りである。如何にもわしは能う知つて居る。なれどそれは忘れたい。さらずはこゝへ來るのではなかつた。

エディポス 今に及んでその體は何事。餘りにも氣力がないぞ。

チレシアス （無愛相に）歸らせていたゞきたい。王さへ御同意下さらば、君の御苦痛をこらへ給ふも、やつがれが已れの苦しみをこらへるも、さして難かしい事ではない。

エディポス こは奇怪な申狀ぢや。今更思ひ躊躇ふとは自己を育んだ國土に對して親切とは云はれまいぞ。

チレシアス （皮肉に）いや、王、御自身の御語も正鵠を失して居られる。それ故私が申上げねばとて、不幸をおかけ申す事にはならぬ。

（と云ひはなつて歸らんとする。歌舞團は驚いてその前に立ちふさがり。）

歌舞團長 知つて御座るなら、神の御名にかけて、お願ひ申す。何卒お歸り下さるな。われ等一同跪いて願ひ上げる。

チレシアス そなたたちは何も知らぬ故其樣な事をいふのぢや。私が口を開けば、王の憂愁を曝露く事になる。

エディポス　不思議な事を申す。秘密を知りつゝそれを云はぬとは、我等を裏切り、國家を破壞さんとするものぞ。

チレシアス　おのれを苦め、同時にあなたを苦しむるに忍びませぬ。何時まで御尋ねなされてもむだな事、私は斷じて何も申上げぬ。

エディポス　（じれて）おのれ下司の中なる下司奴、非情の木石をすら怒らせる奴、おのれあくまで云はぬと申すか。いかなるものをも己の心を和らげ得ぬか。

チレシアス　（やゝむっとして）その樣に此身をのゝしられながら、御身自身は何人と結婚されたか、御存知あるまい。私には毛頭誤りはござらぬ。

エディポス　おのれ此都を蔑する今の語に、憤怒を感ぜぬものがあると思ふか。

チレシアス　此身が沈默を守ればとて、來るべきものは來ずには濟まぬ。

エディポス　さらばその來るべき事を、云ふて退けえ。

チレシアス　いや、如何にしても申しませぬ。怒りたいと思召すなら、有らん限りお怒りなさるがよい。

エディポス　よし、心に思ふ事を云はずに居る余と思ふか。おのれこそかの王殺しの惡事を思ひ立つたる張本人に相違ない。いや自ら手を下して殺害したのであらうが。目があいて居つたなら、おのれ一人で、弑逆を行つたと、余は云ふたかも知れぬのぢや。

チレシアス　（かつとなつて）言語道斷。さらば私は御身に命ずる。御身自身の宣言に服從なされい。今日限り御身は此場の人々にも、又わたくしにも言葉をかはしてはなりませぬぞ。御身こそは實に此國土の呪ふべき穢れぢや。

エディポス　恥かしげもなく、よくもその樣な詐りを申す奴。如何樣に陳ずるとも刑罪は免れぬぞ。

チレシアス　私はのがれるために陳ずるのではない。わが眞實に力は宿る。

エディポス　何物がそのやうな事をおのれに教へた。よもおのれの占ひの術が教へたのではあるまい。

チレシアス　御身が教へたのぢや。我意に反してお身が

言はせたのぢや。

エディポス　何を告げたと云ふのぢや。もう一度わかる様にいふてくれ。

チレシアス　（辛辣に）眞實お分りにならんのか。それとも分らぬ眞似をなさるのか。

エディポス　判然分からなかつたのぢや。もう一度いふてくれ。

チレシアス　では申さう。御身は御自身が下手人を探して居られるそのお方の下手人なのぢや。

エディポス　おのれ、重ねて無禮の言を弄した罪を後悔すまいぞ。

チレシアス　これ以上申したら一層御立腹なさるでござらう。

エディポス　云ひたくばいへ。但しそれはほんのむだ言ぢや。

チレシアス　いや、申します。お身は最も近き血族と、云はんかたなき恥しい生活をして居られるのぢや。而してどんな淺ましい運命に陷りつゝあるかを御承知ないのぢや。

エディポス　おのれは刑罰を受けずに、その様な事を喋舌りつゞけられると思ひ居るのか。

チレシアス　思ふて居ります。眞實の中に力のあるものならば。

エディポス　眞實の中に力はある。が、おのれだけは例外ぢや。おのれは耳も聞えず、目も見えず、智惠さへくもつて居るのぢや。

チレシアス　今、御身は此の盲人を蔑まれるが、そのお身こそこゝに居る人々が、間もなく投げかける嘲罵の語を、平氣でわめいて居られる憐れなお人ぢや。

エディポス　おのれ限りなき闇の夜が、おのれを閉ぢこめて居る盲人の分際をもつて、余や、太陽を見る人々を傷ける事は出來はせぬぞ。

チレシアス　やがて非運が御身の上に落ちかゝらうとも私のせいではござらぬぞ。アポロの神の御力がさうなさるのぢや。

エディポス　（チレシアスを執へて）余が非運になる？　そ

れはクレオンの思ひ付きか、但しはおのれの拵へ事か。

チレシアス　いや、クレオン殿は御身の災ひに關りない。御身御自身が災ひのもとなのぢや。

エディポス　（激昂して）さてこそ、巧むだな。おゝ、人間の烈しき敵となる、富よ、領土よ、才能の上越す才能よ。それに執着する嫉妬羨望の恐ろしさよ。望みもせぬに此都が、余の手に置きたる權力より余を追ひのけて、自ら取つて代らんとて、かつては忠誠なりしクレオンは、わが親愛なる友人たりしクレオンは、おのれの如き陰險なる欺罔者を手先とさへするに至つた。おのれ、詐僞つきの大山師め、おのれは利慾のみに目が開け、肝腎の豫言の術には盲目ぢや。やい、ぬかせ、おのれは何處で豫言者らしい事をしたか。かつて闇の歌をうたふて、あのスフィンクスの妖怪がこゝに居た時、おのれは此國民を救ふために、何事か吐かした事があつたか。スフィンクスのかけた謎は、容易に誰にでも解き得るものではなかつた。それ故にこそ豫言者の才能が必要であつたに、おのれは鳥からも、神からも、何も教へられては居らなんだ事が分つた。そこへ余が、無學な余が來て、鳥などからは何の教へも受けずに己の才覺一つにて彼に答へ、遂にスフィンクスを言ひ破つた。その余に對して陰謀を企て、クレオンを王座に着かしめんため、余を追放たんと企み居る。おのれとおのれの一味徒黨は、やがてその身の罪を後悔する時があらうぞ。いや、おのれがその樣な老耄漢でなくば、余はおのれの無謀さを思ひ知らせてやらうものを。

歌舞團長　（兩人の間に割つて入り）此人の語も、エディポス王の御語も、憤怒の餘りと存ずる。かやうな爭論は何の役にも立ち申さぬ。此場合神樣の託宣を最もよく仕了せるがいつち大事ではござるまいか。

チレシアス　假令こなたは王なればとて、語に上下の差別はない。わしはお身の下僕ではない。わしはロクシアス神の下僕だ。さりとてクレオンの家來として名をしるされて居るものでもない。それに御身が此のわしを盲目ぢやとの悪口には、わしとても默つては居られ

ぬ。御身は如何にも目は見えよう。されど御身は如何なる不幸の中に居るか、何處に誰が住んで居るかを知らないのぢや。御身は誰の胤か御存じか。御身は自分がその血族の――地上地下の血族の敵ぢやといふ事も御存じあるまい。それのみならず母君と父上のからみ合ふたる兩刄の劍の如き呪咀が、いつかはお身の上に落ちかゝり、此國土から呼吸をもつかせずお身を追ひ拂ふであらうぞ。其時には、世の相を見得るその目も烏羽玉の闇にとざされ、世界いたる處、なげきの身を寄する港とてはなく、朗かなりし旅路の果、身を落着けたあの御殿で、めでたく擧げし華燭の宴に、如何なる秘密が籠られてあつたか。その分る時至らば、キタイロスのあらゆる山々も、御身のなげきには反響もしまい。かくして御身の思ひもかけぬ數々の災ひは、御身と御身の生みし子等とを、一つ種にするであらう。その時にこそクレオンとわしの口とを罵るがよい。人間の中の何者も、お身ほど淺間しく破滅はしまい。

エディポス　余はかゝる無禮至極の言語を我慢せねばならぬのか。おのれ、地獄に落ちよ。今、直に、歸れ、去れ。此戸口からとつとと消えよ。

チレシアス　御身の方から呼ばれなんだら、わしはこゝへ來るのでは無かつたのぢや。

エディポス　余はかゝる譫言をぬかすおのれとは知らなんだのぢや。

チレシアス　（去らんとしつゝ）わしは御身の考へるやうに、痴呆かも知れぬ。されど御身の兩親はわしを聖者と呼んだぞよ。

エディポス　（後を追ひつゝ）なに兩親ぢやと、待て、如何なる人を余の父ぢやといふ。

チレシアス　今日こそ御身の生れがわかり、同時に破滅となるであらう。

エディポス　おのれは何といふ忌はしき謎、何といふ暗黑の語のみを用ふる奴ぞ。

チレシアス　（皮肉に）ところが御身は暗黑の語を解く名人ではなかつたか。

エディポス　いかにもそれが余を偉大にした。しかるに

それをおのれは嘲弄の種にし居るか。

チレシアス　しかるにその幸運が沒落の種であつた。

エディポス　何、余の沒落？（と進みかけたが、やがて思ひ直して）このテーベの都を救ひし上は、この身の沒落が何であらうぞ。

チレシアス　ではもう還らう。（手引の少年に）子供よ、いざ、うちへ連れて行つてくれ。

エディポス　おゝ、連れて行け。おのれがこゝに居る中は、余の目障りぢや。行つてしまへばもう腹の立つ種も消えるわ。

（エディポス憤然として立ち去る。）

チレシアス（後に殘つて）御身の怒りも恐れずに、わが使命を果したからは、わしもこゝを立ち去らう。御身は如何にしても、わしを殺す事は出來ぬのぢや。わしは今こゝに御身に告げる。御身が長い間人を威し、命を發し、ライオスの殺害者として探しもとめて居つた人間こそ、その人間こそは、今この町に居るのぢや。表面(おもて)には外國の寄寓者の如く見ゆれ、やがて生(うみ)のテーベ人と分つた時こそ、その幸運の喜びも忽ちに消え失ふであらう。今は物の見ゆる盲人、今は富者である乞食、おのれは杖を力におのが前をかい探りながら、知らぬ他鄕をさすらはねばならぬのぢや。かくしておのれは、同時にわが子の兄弟であり、父であり、おのれを生んだ母の子であり、夫であり、父の後閨(ねや)の繼嗣者(よつぎ)、おのが父の血を流す罪人と分るのぢや。奧殿へ行つて能う考へて見るがよい。若し、わしが間違うて居つたら、その時こそわしには豫言者としての智惠がないといふがよい。

（チレシアス少年に手を引かれて上手へ去る。）

第一スタシモン　（四六三――五一二）

（歌舞團(コレウタイ)再び唱ひ出す）

合唱(コロス)一の一　（第一向左舞唱歌(ストロフイ)）

デルフィの巖の神聖なる聲によつて、
人間の舌が語りもならぬ、恐ろしき業を、
血に染める赤き手もて犯したりと云はるゝは何者ぞ。

嵐に狂ふ千里の駒よりも速かに、
今こそこゝをのがれ去るべき時なれ。
凄じき雷火をもつて身を裝へる、
ゼウスの御子は彼を追ひ、
百發百中の恐ろしき運命あとにつゞく。

　合唱一の二（第一向右舞唱歌）

白雪つもるパルナソスの頂きより、
行衛知られぬ罪人を探し出せと、
託宣新たに響き渡りぬ。
密林の奥、洞窟の中、岩角の間を、
彼は暴れ狂ふ牛の如くさまよひ歩き、
喜び知らぬ艱難の世の路を辿りつゝ、
大地の眞正中の神殿より送られし、
呪咀より身をのがれんとあせり苦しむ。
されどその呪咀は永久に生き、
永久に彼をとりかこむ。

　合唱二の一（第二向左舞唱歌）

恐ろしき、賢き卜方の豫言、
たゞへもならず否みもならぬ、
この身をさへ深くも動かしつ。
われはたゞ豫言に心惑ひて、
いふべき語も知らず。
現在の姿も見えず、未來も知らず、
ラブダロスの家と、
ポリボスの子と互ひに相爭ひて、
エディポスの譽を微塵に打碎き、
蹤跡を隱せし下手人の爲め、
ラブダコスの血統に復讐せんず、
淺ましのなげきの證據も、
われは今も昔もさだかには知らんやうなし。

　合唱二の二（第二向右舞唱歌）

げにゼウスとアポロとは、
大智大能にましまして、
大地の事何とて知らざるはなし。
さはれ人間の性を受けたる豫言者は、
よしこの身にまさる智惠をもつとも、

果して如何ばかり信じ得べきや。
その語のまことを見るまでは、
人、エディポスを難ずるとも、
われは驟かに隨はず。
かつてあらゆる人々の目前にて
翼もてる乙女の謎を解きて、
その賢しさを唱はれ、
此國の王に推されし彼人を、
罪人として裁くべき心はあらじ。

（三）第二エペイソディオン（五一三――八六二）

（クレオン大急ぎにて入り來る。）

クレオン （歌舞團に向つて） 市民たち、エディポス王が身に對して心外なる非難をせらるゝと聞き、身は不快の念を懷いてこゝへ來た。この不幸の時に方り、身の行爲と言語とが、王を傷けしといふが如き疑ひを受けんは無念千萬。かゝる不屆なる噂は此身にとつて限りなき侮辱ぢや。此都に於て、謀叛人と呼ばるゝは、御身たちや、身の親友たちの口より、謀叛人と呼ばるゝにも等しい苦痛ぢや。

歌舞團長 いや、そのやうな御語は、王が一旦の御立腹の爲めにて、決して御熟考の末に出された事とは存じられませぬ。

クレオン されど王は、身がかの豫言者をそゝのかして詐僞を云はせたと申されたげな。

歌舞團長 仰せられたには相違ござらぬが、如何なるわけか私には分りませぬ。

クレオン その非難をされし時、王はたしかな目付、たしかな心で申されたか。

歌舞團長 それは存じませぬ。私は目のあたりそれを見ませなんだ。やつ、王のお渡りにござりまする。

（エディポス不機嫌な樣子にて登場。）

エディポス （クレオンに） おのれ、何とてこの場へ來をつたぞ。厚顏しくも能く我館の前へは參りしな。おのれこそはらたてき主君の暗殺者、わが王位の簒奪者ぢや。いざ、神の御名によつて眞直にぬかせ。かゝる陰

謀を企つるに及んだは、余を臆病者、間抜者と思ふたためであらう。おのれが人知れず、わが王位に忍び寄り、そを奪はんとする惡行が、余に氣づかれいで濟むと思ふか。若しおのれに一味もなく、徒黨もなくして、王座を手に入れんとするならば、おのれほど愚かな巧みを企つるものは他にはないぞよ。

クレオン　能く私を御覽下され。一通り身の答へをおききの上、何とでも御批判あるがよろしからう。

エポィポス　おのれは辯解に巧みな男ぢや。されど余はその文句を聞く耳を持たぬ。余はおのれを憎むべき敵と思ふて居る。

クレオン　まづ兎も角も、身の辯解をお聞き下され。

エポィポス　云ひ譯は聞かぬ。おのれが詐僞漢でないなどゝいふ事は。

クレオン　その自省心なき强情我慢を、善良な天性と思召すなら、王は甚だ賢明ではないと思ひまする。

エディポス　血族に害を與へて、尙刑罰を免れ得ると思はゞ、おのれこそ賢明ではあるまいぞ。

クレオン　仰せながら身が君に對して、どの樣な惡事を働いたと仰せられるや、それを伺ひたい。

エディポス　あの卜占者を呼べと、余に忠告たはおのれであつたぞ。

クレオン　私は今でも同じ考へを棄てませぬ。

エディポス　しからば、あれより何年になるぞ。

クレオン　何年とは。

エディポス　先王ライオスが慘虐の兇刄にかゝつて、人目から姿を消してからぢや。

クレオン　既に多くの歳月が經ちました。

エディポス　その頃あの卜占者は、今と同じ職業を致してをつたか。

クレオン　左樣、今日同樣賢く、同じように尊敬されて居りました。

エディポス　しからば、其頃彼は余がこの町に參る事を豫告したか。

クレオン　いや、たしかに聞き及んでは居りません。

エディポス　次に御身は殺されし王のために、下手人を

尋ねようとはしなかつたか。

クレオン　無論致しました。されど、何も分りませなんだ。

エディポス　その當時かの卜占者が、その下手人を少しも占なはなかつたといふのは何故ぢや。

クレオン　存じませぬ。が、知らぬ事に口を出さぬのが私の習慣でござります。

エディポス　（皮肉に）いや、お身は少くとも知つて居る事がある筈。而してそれを明白に申せる筈ぢや。

クレオン　それは何でござります。知つてさへ居れば、否やは申しませぬ。

エディポス　もしかの卜占者が、御身と同腹ならずば、余に對してライオスを殺せしなど〻申す筈はない。

クレオン　彼の者がその様な事を申せしからは、王こそ一番能う御存知の筈。私はいつそ王に御尋ね申したい。

エディポス　お〻何なりと聞け。さすれば余に血に染みた罪無き事は、自然明らかになる道理。

クレオン　しからば申さう。君は身が姉と結婚されて居られますな。

エディポス　はて、問ふ迄もない事ぢや。

クレオン　君は姉と共に、同じ權力をもつて此國土を支配めておいでゞはござりませぬか。

エディポス　いかにも彼女はその望むすべてのものを、みな余から獲て居るのぢや。

クレオン　さて私はお二人に次ぐ第三位の人として尊敬されて居りまする。

エディポス　それ故にこそ御身は不信の友と呼ばれるに到つたのぢや。

クレオン　いや、左様な事はござりませぬ。が、私と同じ心で御考が出來るならば。先づこ〻を御分別下されい。同じ權力をもつ者にして、のどかな平和を樂しむよりも、恐怖の國土を支配せんと願ふ者が、此世の中にあると思召すか。少くとも私はみづから王たるよりは、王者らしき行爲の方を望むものでござります。私は今何の恐れもなく、君よりあらゆる幸福を受けて居ります。されど、もし自ら治者の位にあるときは、已

の逸樂なんどに耽つては居られますまい。私は今何苦勞なき威力と權勢をもつて居りまする。その方が王の位よりは遙かに心にかなつて居ります。今や私はあらゆる人々に喜ばれ、あらゆる人々に尊敬され、苟くも君に求むる所のあるものは、みな此身に來り願ひまする。それは彼等の成功の希望は、すべて身にかゝつて居ればでござる。しかるに私は何故に之を棄てゝ、他のものに目をつけませうや。私はかゝる王位は好みませぬ。よし、他にさる陰謀のあればとて、それに一味致すクレオンではござりませぬ。その證據としては、先づピイトに於て、私が齎らせし託宣の眞僞をお調べ下され、かくても私がかの卜占者と腹を合せ、惡事を企てしとのお疑ひあらば、何卒私をお殺し下されい。但し君御一人の御宣告のみならず、私自身の意見の御採用をも願ひ申す。輕々しく惡人を善人と判し、善人を惡人とするは不合理ぢや。おのが最も愛する忠實な友を追ひ退けんとするは、おのが胸より生命を追ひ拂はんとするに等しい。時日が經てば、君もよく御理解なされう。時たゞひとり正しき人間を示すものぢや。最も君はたつた一日ですら惡人の解る御方では有るが。

歌舞團長（コリファイオス） 王よ、この方の申さるゝ事は正しいと存しまする。人を誤るまじとの注意深き御方に對しては。兎に角、速斷は事を誤りまする。

エディポス 叛逆者が急に立つてわれを襲ふ時、余も急に之に當るべきぢや。われ若し一刻を緩うせば、彼が惡謀成就して、余は不覺を取らねばならぬ。

クレオン では如何なさらうと仰せらるゝ、此身を追ひ放たうと申さるゝか。

エディポス いや、余が望むはおのれの死だ。追放では物足りぬ。かくして嫉みといふものゝ、どの樣なものかを見せてやるのぢや。

クレオン 君にはどうあつても身を信ぜぬとおきめなされたのか。

エディポス いや、おのれは信ずるに足らぬ男ぢやと、おのれ自身余に說いて居るのぢや。

クレオン 君はよも正氣では御座るまい。

エディポス　少くとも余は、己の利益の爲めには正氣ぢや。

クレオン　されど此身の爲めにも、御正氣が願はしうござる。

エディポス　えゝ、おのれは詐僞漢ぢや。

クレオン　但し、君が正しい御理解をおもちにならなんだら。

エディポス　それでも余はこの國土を支配する王ぢや。

クレオン　併しその支配のしかたが正しくなかつたら。

エディポス　（激昂して）こやつの申狀を聞け。おゝ、テーべよ。

クレオン　（同じく、激昂して）テーべは又我等の物ぢや。君一人のものではない。

歌舞團長　お止りなさい。お二人さま（この時扉が開かれヨカスタの侍女等が現れる。）おゝ、丁度よい時に王妃ヨカスタさまが、御殿からお出でになる。彼のお方のお力で、この爭ひをしづめていたゞかう。

（暫くしてヨカスタ入口に現はる。王は振返つて迎へ、クレオンは訴へんとする態度をしめす。）

ヨカスタ　（兩人に）氣の毒な方々、何故この樣な愚かしい語爭ひをなされます。國土は疫病になやまされて苦んで居る今の場合、身勝手な爭ひをして居られるのを恥かしいとは思召さぬか。（エディポスに）さあ、奥へまゐりませう。（クレオンに）クレオン殿、おまへも家へお歸りなさい。些細な事から大きな風波を引起すやうな事はなさらぬがよい。

クレオン　（ヨカスタの前に跪いて）姉上、あなたの背の君エディポス王は、此身に恐ろしい事を爲さうとせられる。則ち身は祖先の國から追放されるか、或は直ちに死の刑罪を受けるか、二つに一つをのがれられぬのぢや。

エディポス　その通りぢや。妃よ、彼奴は惡計をめぐらし、余が身に對して大逆罪を企てゝ居つたのぢや。

クレオン　思ひもよらぬ事、萬一只今の仰せの如き惡謀を身が企てしとせば、如何なる呪も下されるがよい。

ヨカスタ　エディポスどの、神の愛しみによつて、弟の

語を信じて下され。まづ第一に、彼が神々に立てたるあの祈誓の爲めに。次には此の私の爲めと、あなたの前に跪づく大勢の人の爲めに。

（歌舞團跪いて悲しみの思入れをなし。）

合唱一（向左舞唱歌）

承け入れ給へ、考へ給へ、聞き入れ給へ。
王よ、一向に我等は願ふ。

エディポス　して、汝等は余に何を望むのぢや。

合唱一（向左舞唱歌）

誓ひによつて心のつよまりし彼、かつて詐僞を云はざりし彼、王よ、彼をいたわり給へ。

エディポス　そなたは何を願ふて居るか、存じて居るか。

合唱一（向左舞唱歌）

いかにも。

エディポス　しからば云ふて見い。

歌舞團長　徒らに、證據もなき訛傳を信じ給ひて、呪咀のために身を責める不幸なる友に不名譽なる刑罰を下し給はぬやう、御願ひ申上げまする。

エディポス　しからばいふて聞かす。そなたの望む事は取も直さず余を破滅せしめ、若くは余を國外に放逐する事になるのぢやぞ。

合唱二（向右舞唱歌）

天津御空の神々の頭なる、日の御神によつて誓ひまつる。われら若しさる事を思はゞ天もわれ等を棄てゝ、人間もわれ等を見放し、誰より先に滅されん。かくて此國衰へ行きて、お身たちの爭ひは、悲歎の上の悲歎をかさねむ。

エディポス（歌舞團に向つて）しからば彼を失せおらせよ、例へわれ死の禍ひを蒙り、此國を追はるゝとも是非なし。但し余に憐れを催さしめしは彼奴ではなく、そなた達の唇ぢや。何處に居らうと、彼奴は憎まるべきぢや。

クレオン（不服さうに）たとへ怒りの上とはいへ、あまりにもつれないお方ぢや。左樣な心の人は、結局おのれを苦むる事になるものぢや。

エディポス　おのれは余の心にさからはずに、靜かに退

出することが出來ぬのか。

クレオン　退りまする。如何にしても、私がお分りにはならぬと見える。が、こゝに居る人々は私を正しい人間と信じてくれるのぢや。

（クレオン憤然として退場。）

合唱一　（向左舞唱歌）

妃よ。など急ぎ彼人を奥殿へ導き給はぬ。

ヨカスタ　（歌舞團に）何故かゝる珍事が起りましたぞ。それを聞かして下され。奥へ行く前に。

合唱　（向左舞唱歌）

盲目の疑ひ、語の行違ひ、不正な非難。
それぞ争ひのもとなる。

ヨカスタ　して双方に落度がありましたか。

合唱一　（向左舞唱歌）

いかにも。

ヨカスタ　どんな事を云はれた。

合唱一　（向左舞唱歌）

云はぬが花、云はぬが花ぞ。争ひは、はや釋けぬれば。

エディポス　（怒つて）何、云はぬが花ぢやと。そち達は今何を申し居るか、分つて居るか、此の人好ども。そちたちはたゞわが憤りの災をしづめんとのみ焦燥り居る。

合唱一　（向右舞唱歌）

王よ、われは繰返していふ。
王より離れんとするは、
智惠もくもりし狂人の仕業よ。
君こそは此國の危かりし時、
正しき道に導き給ひし人ぞ。
君こそは今も亦此國を、
榮えの道にみちびき給ふ人ぞ。

ヨカスタ　王よ、神の御名によつて、何故そのやうに怒らせられたか打明けて下され。

エディポス　おゝ話さう。妃よ、余は玆に在る總ての人々よりも、深く御身を愛するが故に話すのぢや。クレオンは余に對して悪謀をくはだてたのぢや。

ヨカスタ　話して下され。どうぞ争ひのおこりから事こ

まかに。

エディポス　クレオン奴、余にはライオスの血に穢された罪があるといふのぢや。

ヨカスタ　クレオン自身が何か證據を知つて居ると申しましたか。それとも他づてに聞いたのでございますか

エディポス　あの卜占者の悪黨を己の舌代りにつかつておのれは綺麗に口をぬぐうて居るのぢや。

ヨカスタ　（微笑して）それならばもうその様な話はお止しなされて、私の申す事をお聞きなされませい。人間に生れたものは誰とて豫言など出來るものではない。今私の申上げるその證據をお聞きなされて御心安う思召されませい。かつて或る託宣が、ライオスに下つた事がございます。なれどそれはフヱイボスの神自身からではなく、その祭司からでございました。その託宣によると、ライオス殿と私との間に出來た子供の手で、ライオス殿の生命が斷たれる運命にのろはれて居るといふのでございました。ところがライオス殿はお聞きの通り、三本の街道の落合ふある場所で、他國の盜賊の手で殺されました。（エディポス驚く、されど妃は氣がつかず語りつゞける。）ところがその子が生れて三日經たぬ中に、ライオス殿はその子の踝を縛りつけて、ある者にいひつけ、道もない山の中へ投げ棄てたのでございました。この様にしてアポロの神はその嬰兒に親殺しをさせたり、ライオス王が、恐れて居た我子の手にかゝつて死ぬ様な事は、如何しても出來ぬ様にしてあつたのでございます。卜占者の語などといふものは、決して未來のわかるものではございませぬ。その様な事に御心を痛むるはつまらぬこと。神様の探さうとなさる事は、何事でも神様御自身の手で、易々と光の前にお出しになるものでございます。

エディポス　（心配げに）何といふ魂の不安、胸のさわぎぢや。妃よ、そなたの話を聞く間に、余は堪らなくなつて來た。

ヨカスタ　（驚いて）何があなたの心配の種となつたのでございませう。

エディポス　ライオスは三つの街道の落合ふ所で殺され

たとそなたは申したな。

ヨカスタ　はい。さう聞きました。いまだにその噂は絶えませぬ。

エディポス　して、その事の起りし所の名は。

ヨカスタ　フォーキスと申して、デルフイ街道と、ドーリー街道との岐道でござります。

エディポス　してこの事件以來、どの位の時が經つて居るぞ。

ヨカスタ　その噂が此都にとゞいたのは、あなたが此國の王となられたほんの少時前でござります。

エディポス　おゝ、ゼウスの神、あなたはわしを何となさるる御心ぢや。

ヨカスタ　エディポス殿、何でそのやうに御心を痛められまする。

エディポス　まだ、それを聞いてくれるな。それよりはライオスの風采はどうであつたぞ。年ばへはいくつ位であつたぞ。

ヨカスタ　丈が高く、頭には少しく銀髪を交へ、ほんにあなたに能う似て居られました。

エディポス　（驚愕して）何といふ不幸ぢや。わしは恐ろしき呪咀の下に、此身を曝してゐたに、それを知らなんだのぢや。

ヨカスタ　何を仰有るやら、あなたを見ると總身がふるへる。

エディポス　あの卜占者は盲目ではなかつたさうな。ヨカスタ、余は重ねて聞きたい事がある。それを聞けば尙能く分るであらう。

ヨカスタ　おゝ、わたしは身体が戰へてならぬ。なれどお尋ね遊ばす事は、何事も包まずお答へ申しませう。

エディポス　彼はその旅行の折、召連れし家來は僅かであつたか。それとも如何にも王らしく澤山の甲武者なんどで行列を裝ひ居つたか。

ヨカスタ　總勢僅かに五人。中一人はお使番でござりました。それに乗物とてはライオス王の御車一つ。

エディポス　（いよ〳〵驚いて）おゝ、それで凡てが知れた。してその場の様子をそなたに告げたは何者ぢや。

ヨカスタ　唯一人都へ逃げ歸りました僕で御座ります。

エディポス　その者は未だに此御殿に使ふて居るか。

ヨカスタ　いゝえ、その者が逃げ歸つて間もなく、あなたがライオスに代つて王座にお着き遊した折、此都の見えぬ遠い牧場へやつて呉れと切に私に願ひました。それ故私も彼の思ひ通りにして遣はしましたが、奴隷とはいひでう、まだ〳〵出世の出來る男でござりました。

エディポス　しからば、その者を急いで之へ呼んでくれえ。

ヨカスタ　それは容易い事ながら、何でその樣な事をお望みなされます。

エディポス　妃よ、余は餘りに下らぬ事を語り過ぎたやうぢやが、兎に角その男に逢ひたいものぢや。

ヨカスタ　それは參りませう。なれども、何故そのやうに御心をお痛め遊ばすか、その理由が伺ひたうござります。

エディポス　（決心して）そなたには凡てを打明けう。余が心一つに此煩悶はつゝみ切れぬ。そなたの外に、我が過ぎ來し方の運命を打明くべき人はない。わが父はコリントのポリボス王にて、母の名はドーリスのメローペであつた。其都に於て余は最も優れし地位を占めて居つた。しかるに或夜會の席上にて、一人の泥醉者が、余を父無兒と罵り居つた。余は餘りの悔しさに、其日は終日一室に閉ぢ籠り、その翌る日は兩親が許へ赴き、事の實否を問ひ尋ねし所、父母は怒つてその粗忽者を烈しく罵りかへせし故、余も一旦は心が釋けた。なれど其の後、擴まり行く世間の噂を聞くにつけ、余が胸は靜まる時なく、遂に兩親にも告げずしてデルフイの神殿に託宣を乞ふた。しかるにフォイボスの神は余が尋ぬる問には答へずして、悲しき、恐しき、淺ましき託宣を下された。その託宣に曰く、余は生みの母の閨を汚し、世の人の見るに忍びぬ罪の子を生み、余を生んだる父親の下手人となるべき運命ぢやとある。この語を聞くや否や、余はコリントの國を逃れて、忌はしき豫言の成就すまじい處へ身を潛めんと、星をめ

あてにたゞ一人彷徨ひ出でたが、その道すがら、今そなたが語りしライオス王の最後の場所へたどりついた。妃よ、余はいよ／＼眞實を打明ける。旅路かさねて余がその三叉に近づきし時、そなたの語(ことば)通りなる使番、並びに馬車に乘つたる一人の男に出逢ふた。その折、車の前にありし男と車上の老人とは、無禮にも余を道よりつき退けんとした。其奴(そやつ)は馭者であつたが、余は彼奴をなぐりつけた。それを見た老人は余が彼の側を通るを待ち、二本の刺(とげ)のつきし鞭を以つて、車の上から余の頭をしたゝかに打ちつけた。されど余も受けし恨はその場を去らせず十二分にはらした。則ち余は手にせる杖を揮つて、彼奴が頭(かうべ)を叩き据へた。老人は己が車より轉び落ち、その背を打つて敢無き最後。かくして余は餘の面々をも殘らず殺してしまふたのぢや。若し此旅人にして、いさゝかなりともライオス王と血族の緣(ゆかり)だにあるならば、そなたが面前に立てるこの男程、世にも淺ましい人間は又とあらうか。如何なる人間なりとも、これ程迄に天の憎しみを受けし者が又とあらうか。若し余にかゝる罪ありと定まらば、如何なる他國の人々も、又いかなる都の市民にても、余をその家に入れる者はあるまい。余と言葉をかはす者もあるまい。この世のありとあらゆる人々は、余をその家々から追出すであらう。而(そ)してこの呪こそは、最前余自(みづか)らこの口にて、己の上に投げつけ居つたのぢや。(身を悶えて) おゝ、俺はこの手で殺せし人の寢床を汚した。おゝ、俺は極惡非道の男だ。どこからどこ迄穢れの子だ。俺は、このテーベの町を追放されねばならぬ。追放されても己が生れ故郷たるコリントの人々にあひ或はコリントの町に足踏みさへも出來ぬ身の上。さらずば俺は、既に犯せし罪の上に、己が母と結婚なし、己の父を、この身を生み育てくれしポリボス王をさへ殺すに至らう。おゝ、汝清淨にして、殘酷なる神々たち、せめてかゝる恐ろしき日に直面せん事のみは許し給へ。いや、かゝる呪ひの烙印をわが面上に押しつけらるゝ前に、このエディポスを、このエディポスを人間世界より消し去り給へ。

歌舞團長(コリフアイオス) 王よ、恐ろしさに我等をふるへ戰かすやうな事柄にはござりますが、少なくとも其場の有樣を目のあたり見たと申す者より、事の樣子を聞かるゝ迄は、しばらく望みを棄てさせ給ふな。

エディポス いかにもさうぢや、いまだ望みが殘つて居る。兎も角も、牧場より呼び寄せた男の來るを待たうぞ。

ヨカスタ その男がまゐりましたら、如何なさるのでござります。

エディポス それはかうぢや。その男の申狀がそなたと同じくば、余は少くとも此不安から免れることが出來る。

ヨカスタ 何か特別な事を、わたくしから御聞き遊ばしましたか。

エディポス こなたの話によれば、その男はライオス王は數多(あまた)の盜賊共に殺されたと申したさうな。それ故、その男が今だに前の如く『數多(あまた)の盜賊』と申さば、余は下手人ではなかつたのぢや。一人の人間と隊を組んで居るものと、同じでありやう筈はない。但しもし彼が一人の旅人だと申さば、その罪人が余ぢやといふことは疑ひの容れやうもない。

ヨカスタ 彼は確かに『數多の盜賊』と申したのでござります。今更取消しやうはござりませぬ。それを聞いたのは私ばかりでなく、全市こと〴〵くが聞きました。その上、かの男が少しは以前と違うた事を申しませうとも、ライオスの死が豫言通りにならう筈はござりませぬ。ロクシアの神は、ライオスは我子の手で殺されると、明かに申されましたに、その憐れな頑是ないライオスの子は遙か昔に死んで居りまする。それ故この後例へ如何なる託宣が下りませうとも、私は決して動じますまい。

エディポス その通りぢや。されど兎にも角にもその僕(しもべ)のもとへ迎へを遣(つかは)してくれ。此事ばかりは等閑(なほざり)にせぬがよい。

ヨカスタ （すかす樣に）必ず急いでつかはしまする。兎に角、奥へまゐりませう。何事もあなたの御心次第に

致しますれば。

（ヨカスタはエディポスを宥めつゝ共に屋内に去る。侍女等もその後につゞく。）

第二スタシモン　（八六三――九一〇）

合唱一（コロス）　（向左舞唱歌（ストロフィ））

神聖なる純潔の譽を保ち、
オリンポスのみを父と仰ぐ、
高く、淸らかなる御空を通して、
人の世に呼びかくる神々の、
莊嚴なる掟によつて、
わが語と行ひとを淨め給へ。
その父母（たらちね）は人間の種ならず、
永久（とは）に眠の虛無にも入らず。
あゝ神は大なるかな。
神は終に老ゆる事なし。

合唱一（コロス）　（向右舞唱歌（アンティストロフィ））

倨傲（おごり）は虐政を生む。
身にそはぬ富にくらひ肥（ふと）りて、
何のよき事も行はぬ、
傲れるものゝ行末よ。
一度（ひとたび）は高樓（たかどの）の頂きに登るとも、
忽ち足をすべらして、
脫け出さんやうもなき、
奈落の底へとは沈みゆく。
人の世の爭ひは絕ゆる間なくも、
若し國土の利益となるならば、
神よ、徒らにとり鎭め給ふなかれ。
神は常にわれらをまもらせ給ふものを。

合唱二（コロス）　（向左舞唱歌（ストロフィ））

何人にもあれ、其行ひと語とに、
傍若無人の振舞ひありて、
神のさばきを恐れず、
神の御像（みすがた）を崇むる事なく、
不當の利益を貪ほり、
不淨の行ひを愼まず、

聖き器に穢れの手をつくるが如き事あらば、
天は必ず應報の災禍を下し給はん。
かゝる惡行を重ねて、
尙且つ神々の戒めの征矢を避け得べしと、
誇り顔に譽れをうくる人のあらんには、
われらの此神聖の舞も何の甲斐あらん。

合唱二（向右舞唱歌）

若し此神託にしるしなく、
あらゆる人々後指さゝれん程ならば、
われは大地の中心にある祠にまゐり、
アバエやオリムポスの神殿へ
詣づる事を再びせまじ。
あらゆるものを治めすゼウスの神、
果してその名に相應しくば、
王者なればとておん神の、
不死の御目の力より免れん樣はあらじ。
然るにライオスに關する古き豫言は、
はや力なく衰へたるか。
かつて尊まれたるアポロの神は、
今いづこにか在る。
神に對する崇拜は此世より消え去りしか。

（一同天を仰いで祈る。………幕）

第二幕（九一一――一五三〇）

（一）第三エペイソディオン（九一一―一〇八五）

（前幕と同じ舞臺面。但し、祭壇は花環を以て美しく飾られ、香の煙が立昇つてゐる。妃ヨカスタは祭壇の前に立つて祈を捧げんとしつゝあり五人の侍女がその後に侍べる。階段の下には十五人の歌舞團が跪き居る。）

ヨカスタ （歌舞團に）此國の貴紳達、わたしは此手に、橄欖の枝と香とをもつて、神に祈を捧げんと思ひたちました。エディポスは悶え苦んでその魂をいら立たせ分別ある人の如く、過去を以て新らしい物事を判斷する事も出來なくなり、恐ろしい事をいふ人あらば、誰

の語でも聞かうとして居ます。それ故わたしはエディポスの心を慰むるよすがもなく、こゝにリキヤのアポロの御神に祈り奉る。御神は最も手近に在ます故、わたしは御祈禱の此標を手にして願ひにまゐりました。御神こそ穢れよりわれ等を清めたまはるに相違ない。驚き惑ふ嵐の舟の揖取の如く、恐怖につかまれて居るエディポスの有樣を見ると、おそれおのゝかぬものは一人もござりませぬ。

(コリントよりの使者何事かを尋ねながら入來る。)

使者 (歌舞團に)方々、エディポスの御館は何處か教へていたゞきたい。いや、御存知なら、あの方が何處に居られるか、教へて貰ひたい。

歌舞團長 これが王の御住居ぢや。王は今は奥に居られる。而して此お妃が王の子供たちの母御ぢや。

使者 (妃に最敬禮をなして)お妃には定めし御幸福な御家庭で、お幸福にお暮しでござりませう。エディポス王の天から惠まれたお妃とあるからは。

ヨカスタ そなたにも幸福であれかし。旅の男、そなたの挨拶に禮を云ひます。それにしても、何事かを聞きに來たのか、話しに來たのか。

使者 お妃、御家庭に對しても、御良人に對しても、吉報をもつてまゐりました。

ヨカスタ どんな話を、そしてそなたは誰のところから來たのぢや。

使者 コリントからまゐりました。而してこれから申上げる使者の口上は、屹度あなたをお喜ばせ申すでござりませう。少しは御悲みなさる事もあるかも知れませぬが。

ヨカスタ それはどんな事か。それが如何して二重の力があるといふのか。

使者 イヅミヤの國民は、彼の方を國王にしやうと致して居ります。

ヨカスタ それは如何した事ぢや。ポリボス老王は、もう位を去られたのか。

使者 去られました。死はあの方を墓場へ葬つてしまひました。

ヨカスタ　何といふ。ポリボス王は死なれたか、老人。

使者　眞實を申し上げぬ程なら、喜んで死にまする。

ヨカスタ　おゝ侍女(おんな)、急いで我君に申上げてくりや。（侍女去る）あゝ神々の託宣は何處へ行つたのであらう。エディポスが長い間、自分が殺しはせぬかと恐れて逃げて居たその人は、自然の運命でなくなられた。あの人の手にかゝつたのではなしに。

（エディポス王急ぎ入來る。）

エディポス　ヨカスタ、わがいとしき妻、何の用で余を此扉の外に呼出したのぢや。

ヨカスタ　（使者を指さして）この人のいふ事をきいて、神々の恐しい託宣がどうなつたか、御判斷なさい。

エディポス　してその者は、その者は何者か。どんな便りを持つて來たのか。

ヨカスタ　コリントから參つた者でござります。あなたの父君ポリボスはもう生きては居ない。亡くなられたといふ事をお知らせ申す爲めに。

エディポス　（使者に）如何したと旅の男(をとこ)。その話をおまへの口づから聞かせてくれ。

使者　この御知らせを明らさまに申上げる必要があるなら、王様はおかくれになつたと申上げるより外はござりません。

エディポス　謀叛人の爲めにか、病氣の爲めにか。

使者　不圖した事が、老人を永久(とこしへ)の安息にお伴へ申したのでござります。

エディポス　あゝ、それでは父上は、病の爲めにおかくれになつたのぢやな。

使者　左樣でござります。何しろ長い間御繁昌なされました後の事で。

エディポス　（狂喜して）あゝ〳〵。妃、わしに、自分の父を殺す運命だと云つたあのピチヤの神火や、わしの頭上で前兆を囀つたといふ鳥は、一体どうなつたのだ。今や父上は世を去られた。而して地底にその身をかくされた。而してこゝにもわしが、手に槍もたずに立つて居る。父上はわしを思ふて思ひ死にをされたのかも知れぬ。それなればわしは死の原因になつた様なも

のぢやが、父ポリボス王は自ら地下へ休息に行かれたのぢや。託宣は三文の價値(あたひ)もなかつたのぢや。

ヨカスタ　それはわたしが長い事、申し上げて居つたのではござりませぬか。

エディポス　聞いては居たが、わしは恐怖の爲めに、顚倒して居たのだ。

ヨカスタ　もうこれからは、その樣な事はお考へ遊ばさぬがよろしうござります。

エディポス　併しまだ母の寢床を心配せぬわけには行かぬぞ。

ヨカスタ　運命の力は人間を支配し、未來の豫言もたのむに足らぬ此の世の中で、何を恐れる必要がござりませう。世渡りの一番よい方法は、その時勝負に進む事でござります。それゆゑ、あなたの母上と緣を結ぶといふ事は恐れる必要はござりません。多くの人は、能く夢で同じ事を見ますが、その樣な事は少しも氣にかけずに、世を心安く渡つて居るではござりませぬか。

エディポス　わしの母上さへ生きて居られずば、そなたのその大膽な語に間違ひはない。併し母上未だ生きて居られる以上、いくらそなたが大丈夫といふても、わしは恐れないわけには行かぬぞよ。

ヨカスタ　兎に角父上のおかくれ遊した事は、あなたにとつて大きな慰めではござりませぬか。

エディポス　如何にも左樣ぢや。併しわしはまだ生きてゐる母上の事が恐ろしい。

使者　（不審さうに）してあなたの恐れられる母上とは、どなたの事でござりますな。

エディポス　ポリボス王の配偶メローペの事ぢや。

使者　何で、その樣に恐れられるのでござります。

エディポス　恐ろしい豫言が、天から下つて居る爲めぢや。

使者　それを伺ふわけにはまゐりませぬか。但し、他人に洩してはならぬ御禁制でもござりますか。

エディポス　云ふても構はん。ロクジアの御神はかう云はれた事があるのぢや。わしは自分の母と結婚し、自分の手を以て父の血を流す悪因緣があると。それ以來

長の歳月、わしはコリントの家を離れ、今は不圖した事から、幸福には暮し居るが、併し兩親の顏を見るといふ事は嬉しいことなのぢやが。

使者　ではお國をお見棄てになつたのは、それを恐れられる爲めでござりましたか。

エディポス　父の下手人にはなりともないからなあ。

使者　私はお目出度きお役を持てこちらへ參つたでござります。それ故その恐怖からあなたを解放して上げるのは當然でござります。

エディポス　左樣してくれるなら、余は相當の褒美をつかはすぞ。

使者　わたしも實はそれを思つてまゐりました。お國へお歸りになれば、よい事があるに相違ないと存じまして。

エディポス　いや、余はもう二度と兩親の側へ行かぬのぢや。

使者　あゝ、和子さま、あなたはたしかに御自分の爲すべき事を御存知ないのぢや。

エディポス　何といふ、老人。神の名によつて、そのわけを話してくれ。

使者　あなたはそれだけの事で、お國へお歸りなさる事をお嫌ひなさるか。

エディポス　左樣ぢや。余はフォイボスの神の豫言が實現されるのを恐れるのぢや。

使者　では、あなたは、御兩親に對して、罪科にその身を汚される事を、恐れてござるのか。

エディポス　左樣ぢや、老人。それが絶へず余を恐れ戰かせて居たのぢや。

使者　では、王の恐れは、全然根もない事ぢやと、御承知はなかつたのか。

エディポス　左樣は云へまい。余があの兩親から生れたのであつたら。

使者　ポリボス王は、あなたとは何の血縁もないのでござりますぞ。

エディポス　（驚いて）何、何と申す。ポリボスは余の父でないといふのか。

使者　あなたと語をかわして居る人間以上の血縁はござりませぬ。

エディポス　ポリボス王が余と他人であつたら、何故父と同格の身分とはなられたのぢや。

使者　兎に角あの方は、私と同様、あなたの生みの親ではなかつた。

エディポス　それならば如何してあの方は、余をわが子とお呼びになつたのぢや。

使者　彼の方はその昔、私の手から贈り物として、あなたをお貰ひになつたのぢや。

エディポス　それにしても、他人の手から來たこのエディポスを、何故あれ程までに愛しんで下されたのか。

使者　彼の方には御子が無かつた。そこへあなたが手に入つたのぢや。

エディポス　そしておまへは、おまへは、わしをあの方へ遣つた時、誰ぞから買つたのか、偶然に見つけたのか。

使者　キタイロスの曲りくねつた谷間で、あなたを見つけたのぢや。

（妃之を聞いて驚愕し、次第に苦悶の色を見せる。）

エディポス　何でそなたは、彼樣な所を彷徨いて居た。

使者　山の羊飼をして居りました。

エディポス　何、牧羊者であつたと。では、一時雇ひの流浪人だつたのぢやな。

使者　でも、和子さま、其時はあなたの救援者だつたのでござります。

エディポス　そしてそなたがわしをその手で抱き上げてくれた時、わしは苦しんでゞも。居なかつたか

使者　足の踝に證據が殘つて居た筈ぢや。

エディポス　あゝ、何としやう。おまへは何で、その樣な昔の不幸を話し出したりするのぢや。

使者　あなたの兩踝は一緒につき刺れて居りました。わしはそれを拔いて上げた。

エディポス　さうぢや。わしが搖籃の中からつけられたのは、その恐ろしい耻辱の烙印ぢや。

使者　その爲めに、あなたは今の名で呼ばれるやうにな

つたのでございます。腫れた足といふ意味からな。

（妃、いよ／＼驚いて王の方へ駈けて行きかけるが、エディポスの言葉を聞いて立止る。）

エディポス　おゝ、神さま、そのような事をしたのは、わしの母か、父か。さあ聞かせてくれ。

使者　わたしは存じません。併しあなたをわたしに吳れた男は、わたしよりよく知つて居りませう。

エディポス　何と、そなたは他からわしを貰つたのか。そなた自身にわしを見つけたのではなかつたのか。

使者　はい。他の牧羊者が、わたしに置いて行つたのぢや。

エディポス　それは誰ぢや。はつきり聞かせてくれる事が出來るか。

使者　たしか、ライオス家の家來の一人との事でござりました。

エディポス　それは久しい前に、此國の王だつた人の事か。

使者　左様でござります。その男は、王様の羊飼だつたのでござります。

エディポス　その者はまだ生きて居るか。わしはその者に逢ひたいが。

使者　いや、此國の人たちの方が、いつちよく知つて居ります。

エディポス　（歌舞團に）こゝに居る誰かゞ、この男の今云つた羊飼を知つて居らぬか。此都の牧場で、その者を見たものはないか。さあ云へ。此事件のとう／＼分る時が來た。

歌舞團長　この男のいふのは、あなたが逢ひたがつて居られた羊飼と同じ人間であらうかと思はれます。それなればお妃のヨカスタさまが誰よりも能く御存知でござりませう。

エディポス　妃よ、先刻呼びにやつた男を、こなたは知つて居るか。此者の申す男は、彼と同じ人間なのか。

（强ひて苦悶の色を微笑にかくして。）

ヨカスタ　なぜ、其樣な事をお尋ねになるのでござります。その樣な事は氣になされまするな。此者の申した

事などは、御心におかけなされまするな。馬鹿げた事でござりまする。

エディポス　いや、さうはならぬ。折角この様な端緒が手に入つたからは、何としてもわが素性を明白にせずには置かぬぞ。

ヨカスタ　（必死になつて）神の名によつてお願ひ申します。御身の上が大切だと思召すなら、その様な詮議はお止り下されませえ。此上胸をいためたうはござりませぬ。

エディポス　案じまい。よし、余がいやしき母の息子なりとも、そなたの血統は尊いのぢや。

ヨカスタ　でも、お願ひでござります。何卒その様な事をなさらずに。

エディポス　我身の素性を悉く知るまでは、そなたの願ひも聞くわけにはゆかぬ。

ヨカスタ　（甘へる様に）重ねて／＼願ひまする。私は王の一番よい相談相手ではござりませぬか。

エディポス　その様な相談相手は余が癇癪の種だ。

ヨカスタ　あゝ、不運なお方、王の素性が分つてくれねばよいが。

エディポス　（じれて）誰か行つて、その牧羊者をこゝへつれて参れ。而してこの女には、この立派な身分を威張らせて置け。

ヨカスタ　（絶望の叫びを上げて）あゝ／＼、何といふ情ない事ぢや。これ一つがあなたにいへる語なのぢや。この外には生涯申上げる語はなくなりました。

（ヨカスタは奥へ走り去る。）

歌舞團長　エディポス王よ。お妃はなぜ奥へお入りなされたのでござりませう、あの様に激しいお歎きの最中に。悲しみの嵐が、あの沈默の中から吹き荒れるのではござりますまいか。

エディポス　何物が吹き荒れうとまゝ、余はいかに已が身の賤くとも、それを知りつくさずには置かぬぞ。ヨカスタは、普通の女の誇りよりも、一層高い誇りをもつて居るので、連添ふ余の身分の低いのが恥しいのだ。なれども余は幸福の子であるから、その様な事は不名

譽だとも思はん。幸運こそはおれを生んだ母だ。而して重なる月日がおれの血縁で、時としておれを卑しいものに、時としておれを偉いものにした。これがおれの系圖である以上、此上のそらごとは我慢はならぬ。おれは素性の秘密を調べずには置かれぬぞ。

第三スタシモン（一〇八五——一一〇九）

合唱（向左舞唱歌）

われ若し豫言者にして賢者ならば、
おゝキタイロンよ。
明日の夜の滿月の如く明らかに、
エディポスが生れ故郷として、
おのれを育みし乳母として、
おのが母として、おみを認めなん。
かの王に好意を有てる汝幽谷を、
われらは舞ひつ、歌ひつして、ほめたゝへむ。
おゝ、フォイボスの神よ。
われらは高らかに祈り奉る、
何事も彼君の爲めに幸ひとなし給へ。

合唱（向右舞唱歌）

和子よ、おみを生めるは誰ぞ。
長の年月經たる種族のいづれが
山々をさまよひ歩くバンと婚ひて、
おみを生みたるか。
但しはロキシアの花嫁がおみを生せしか、
あらゆる高原の牧場は、彼をいそしむ。
さりともそはキュラナスの御子か、
丘陵の頂に住むバクケイオスの神か。
ヘリコンの神女の一人より、
新生のよろこびとしてお身を迎へしは。

（二）第四エペイソディオン（一一一〇——一一八五）

エディポス（上手の方を見ながら歌舞團に）余は一度もあつた事はないが、推察に誤りなくば、余が長く捜し居りし牧羊者が向ふに見えるやうぢや。あの老齢はその男と符合する。それに彼男をつれてくる男等は、余の家人どもらしい。されどそちたちは余よりは彼の老人

に憶えがある筈ぢや。あの牧羊者を見知るならば。

歌舞團長 おゝ、たしかに存じて居ります。彼こそはライオス王の僕、牧羊者としては人に劣らぬ忠實な男でございました。

（牧羊者の老人はエディポスの家來たちに扶けられながら登場。）

エディポス コリントの男、まづ其方に訊ねる。これが其方の申せし男か。

使者 いかにも御前の男がそれでございます。

エディポス （牧羊者に向つて） おゝ老人、余は逢ひたかつたぞ。いざ、余の訊ねる事に答へてくれ。其方はライオス王の僕だつたさうぢやな。

牧羊者 はい。併し金で買はれた奴隷ではなく、御館で育つたものでございます。

エディポス 如何なる業を務めて居たぞ。如何なる生活をして居たぞ。

牧羊者 一生の大部分を羊飼ひでくらしました。

エディポス して重にどんなところに居たぞ。

牧羊者 或時はキタイロンの谷で、或時はその近邊で。

エディポス （コリントよりの使者を指して） 其方はその邊で、その男を見た憶えはないか。

牧羊者 （おど／＼しながら。） 何をした男でございませうどの男の事を仰有るのでございます。

エディポス こゝに居るこの男ぢや。前に逢つた事はなかつたか。

牧羊者 俄かに思ひ出せと云はれても、それは御無理でございます。

使者 （王に向って） それは道理の事と存じます。しかしおひ／＼はつきりと分るやうに思ひ出させませう。われ／＼がキタイロンに住んで居た時の様子は、よく覺えて居るに相違ございません。その時この男は羊を二疋もち、手前は一疋もつて、春から大角星のやつと見え初むる九月まで、丸半年を恰度三度一緒に住んで居りましたが、やがて冬になると、手前は自分の小屋へ羊をつれて歸り、この男はライオス王の小屋へ自分の羊をつれ歸る事にして居りました。（牧羊者に） どうだ

わしの云ふ事に間違ひはあるまい。

牧羊者　おまへの云ふ事は眞實だ。大分昔の事ではあるが。

使者　さあ、話してくれ。おまへはその頃わしに子供を一人くれた事を覺えて居るだらう。わしの養子として育てゝくれと云つて。

牧羊者　（周章てて）今頃になつて何をいふのぢや。おまへはなんで、そんな事をきくのだ。

使者　（得意さうに王を指して）おい、兄弟、あのお方がその時の嬰兒だつたのぢや。

（牧羊者は瞬間茫然としてゐたが、狂氣の如く杖をふりあげてコリントからの使者に打かゝる。）

牧羊者　くたばつてしまへ、畜生。決してそんな事を云ふもんぢやあないぞ。

エディポス　こら、老人、他人を責むるな。その男より、その方の行爲こそ責めらるべきぢやぞ。

牧羊者　王さま。何か、私が惡いのでござりますか。

エディポス　あの男のたづねる子供の話をせぬからぢや。

牧羊者　彼奴は何も知らずに喋舌つて居るのでござります。彼奴は無駄口ばかりきいて居るのでござります。

エディポス　心地よく話さぬとならば、痛い目をせねばならぬぞ。

牧羊者　御願ひでござります。何卒老人をおいぢめにならないやうに。

エディポス　誰かある。こやつの腕をくゝしあげろ。

（王の家來たちは飛びかゝつて、牧羊者を引すへる。）

牧羊者　あゝ、何故、この樣な御無体をなされます。此上まだ何をお知りなさりたいと仰有るのでござります。

エディポス　お前は此男のたづねて居る子供を、此男にやつたのぢやな。

牧羊者　やるにはやりました。あゝ、おれは寧そあの時に死んでしまへばよかつたのぢや。

エディポス　お前は正直に申立てぬと、愈死ぬ時が來るのぢやぞ。

牧羊者　申上げれば餘計に死なゝければなりますまい。

エディポス　こいつ、おれを馬鹿にして居るらしい。

牧羊者　ど、如何致しまして。あのお子を此男に渡したと、もう申上げたではございませぬか。

エディポス　お前はその子を何處で手に入れた。自分の家でか、それとも他でか。

牧羊者　自分の家ではございません。或人に渡されたのでございます。

エディポス　此町の何者からか、どこの家からか。

牧羊者　（苦しげに）王様御免下さい。此上おきゝになるのは御免下さい。

エディポス　重ねておれに訊ねさせたら、おのれの生命はなくなるぞ。

牧羊者　では申上げます。それはライオス王の御館の御子さまでございました。

エディポス　それは奴隷の子か。但しは王の一族から生れた子か。

牧羊者　あゝ、何としやう。それを云ふのが恐ろしい。

エディポス　おれは聞くのが恐ろしい。しかし聞かずには置かぬ。

牧羊者　ライオス王御自身のお子といふ事でございました。たゞし奥にござる御妃が、當時の事情を一番能く御存知の筈でございます。

エディポス　如何したと。ヨカスタがお前にやつたのか。

牧羊者　はい。あゝ王様。

エディポス　何の爲めに。

牧羊者　その御子を殺すために。

エディポス　おのれ、人畜生、己が生みの子をか。

牧羊者　はい。淺ましい豫言をお恐れなさいましたために。

エディポス　いかなる豫言ぢや。

牧羊者　その御子は必らず父御を殺すといふ話なので。

エディポス　併しながらお前は何故この男にその子をやつたのだ。

牧羊者　殺すのは餘りに可哀さうでございましたから。はい、王様。で、この男は己が故郷の、知らぬ他國へ連れて行つたものと思つて居りましたに、お助け申したのは、一番悪い災ひの種でございました。萬一、あ

なた様がこの男のいふ方でござりましたら、あなたは眞實に不運な方でござりますなあ。

エディポス　あゝ、あゝ、萬事が分つた。萬事が眞實であつた。あゝ、汝、光よ。おまへを見るのはこれが最後だ。おれは生れる時に呪はれ、結婚で呪はれ、血を流して呪はれた人間なのだ。

（エディポスは己が上衣で面を覆ふて奥へ走り去る。従者等は急いで後につゞく。コリントの使者と、牧羊者は力なく上下へ別れ去る。）

第四スタシモン（一一八六――一二二二）

合唱一（向左舞唱歌）

あゝ汝、人間の種族よ。
汝の一生はあはれ影に過ぎず。
表面の幸福をわづかにつかめど、
やがて空しく消え行かざる人間は、
いづこに、いづこにありや。
汝、あはれなるエディポスのその運命こそ、
此世の人間の不幸なる姿として、
後の世の誡め草とはなりぬれ。

合唱一（向右舞唱歌）

おゝゼウスの神、
彼は並びなき技能を以て、
利き槍をひらめかし、
世に時めく幸運の獲物を手に入れつ。
怪しき歌をうたひ、
曲れる爪をもてる妖女を打殺し、
高塔の如く身を起して、
死より此國を防ぎぬ。
その時よりエディポスこそは、
われらの王と呼ばれ、
最上の名譽を擔ふて、
大テーベに君臨しぬ。

合唱二（向左舞唱歌）

されど人間の身に、
かほど慘ましき身の上やある、
生涯を悲運の波に漂はせて、

恐ろしき疫病と苦惱との捕虜となりし、
かばかり憐れなる人他にありや。
あゝ譽れ高かりしエディポス王、
人の子として父として、
心休むる廣き室も、
やがては婚禮の寢床となりつ。
汝が父の種蒔きし大地こそは、
默々として汝を苦しむる庭とはなりぬれ。

合唱二　（向右舞唱歌）

あらゆるものを見る時、
心にもなき汝を此世に生れ出でしめ、
一人の男子が子として生れ、
同時に子をば生ましめし、
淺ましの結婚に對し、嚴しき審判を與へつ。
あゝ、汝、ライオスの子よ。
われは汝を見ざりしを願ふ、願ふ。
われは葬ひの歌うたふ人の如く泣き悲しむ。

（三）エキソドス　（一二二三――一五三〇）

（突然表面の扉荒々しく開きて侍臣奥殿より走り出づ。）

侍臣　此國の最も名譽ある方々、恐ろしき事件が起りましたぞ。方々にして果して、己が民族に忠誠であり、今尚ラブダコス家に關心あらば、方々は何樣に悲慘な事實を見、どの樣な悲慘な事實を聽き、更にどの樣な悲慘な重荷を背負はねばならぬ事となつたか。思ふにイズドロンの流れも、ファデンの水も、この惡業に滿ちた館を淨める力はあるまい。さりながらその惡業が無意識に行はれしか、たゞしは意識的に行はれたかは、やがて光明にさらされる時が來るであらう。

歌舞團長　われらの知れる悲痛だけでも、十分であるに、尚此上如何なる悲痛を觸れ歩かうとはなさるぞ。

侍臣　お妃のヨカスタさまがおかくれなされた。

歌舞團長　あゝ、お氣の毒なお方。して如何してお死になされたのぢや。

侍臣　御自分の御手で。お妃は狂氣の如く兩手の指で髮をかきむしりながら、廊下傳ひに、婚禮の折の寢床へ

眞直にかけ込まれた。而して長い前におかくれなされたライオス王の名をよびつゞけ、御自分の悲しい運命を嘆たれた。それから後に此室で、お妃にどの樣な事が起つたかは、その時には知らなかつたが、やがてエディポス王がこれ又狂氣の如くに、扉の方へ進んで行かれ、その扉を蹴破つて部屋に入られた。と、いたはしや、そこにはお妃が一筋の繩をもて首をくゝり、宙に釣下られて居るのを見た。併し王はそれを見給ふや否、悲痛な恐しい沈んだ聲で叫びつゝ、妃の首を釣つて居る繩をゆるめられた。と、氣の毒な妃は床の上に落ちて、手足が伸びた。その恐しい有樣と申したら、見る目も物凄い程であつた。やがて、王は妃のお召物から、金の襟止を引きちぎり、それを振上げて、無殘や己が兩眼へふかくも突き込まれた。而してから云はれた。『おれがこれまで苦しめられて居た、此樣な恐ろしいものは、もう再び見せはせぬぞ。おれは此眼球が見てはならないものを長い間見て居たのだ。而して知りたがつて居たものを、知つたがために破滅した。だから是から後はおれは闇黑の中へ沈むのだ』と、かゝる恐ろしい呪ひの語をはきながら、王は手をふりあげて、その目をしたゝかに打たれた。その度毎に、眼球から流れ出づる鮮血が顏の上に傳はり、やがて黑き血潮は霰の如くに降りそゝいだ。此御二方の過去の幸福は、まことに華やかなものであつたが、今日になつては、悲歎、淪落、死、恥辱、名付け得る限りの、地上の邪惡は、すべて、すべて御二方のものとはなつた。

歌舞團長　してエディポス王は、傷の御手當でもしておいでか。

侍臣　王樣は大聲で誰かに命じてござつた。門を開いてあらゆるカドミヤの人々に、父殺しと、母——わたしはこんな汚らはしい語を口から出したくない——全市の人々にその淺ましい姿を見せ、此國より己を投げ出し、此館を己の呪ひで呪はせる爲め、もうこゝには止まらぬと仰せられた。されど王にはすでに力衰へて、手を引く者が必要なのだ。やつ、門があく。方々は間もなく、彼を恨む人でも憫まずには居られぬ光景を見

なければなるまい。

（エディポス從者に導かれてよろ〳〵と出で來る。歌舞團(コレウタイ)驚いて一同外衣で顏をかくし悲みの思ひ入れをなす。）

合唱(コロス)

お丶見るも恐ろしき人の運命、
お丶わが目が見たるあらゆる物の中でも、
いとも恐ろしの身の上。
あ丶、あ丶、汝不幸の人、
聞かまほしき事、尋ねたき事、數々あれど、
汝(なれ)をまともに見る勇氣なく、
たゞ一向(ひたすら)にその身を打ふるはすのみぞ。

エディポス　あ丶、あ丶、不幸なはわれ、淺ましきはわれ。何處へ、何處へ、おれは困苦の流轉をするであらう。おれの噂は、風の翼に乘つて、知らぬ他國へまでも吹きつけられるであらう。あ丶、おれの運命はどの樣な遠くまで放浪しなければならぬのか。

歌舞團長(コリファイオス)　人間の耳にも慘ましく、人間の目にも慘ましき怖ろしの鄕(さと)まで。

エディポス　（第一向左舞唱歌(ストロフィ)）

あ丶、われを包む闇黑(やみ)の無氣味(ぶきみ)さよ。
疾風(はやて)に乘つて、音もなくわれを襲ふ。
あ丶苦し、またも襲ひ來る。あ丶苦し。
あ丶わが魂は留針の尖(さき)と、
悲しき懷ひ出との爲めに、
ずた〳〵に引裂かる丶。

歌舞團長(コリファイオス)　如何にも、數知れぬ悲嘆の中に身を埋め、世の人の二倍の苦みをなげき悲む。わが王の御身の上、云ふべき語もござりませぬ。

エディポス　（第一向右舞唱歌(アンティストロフィ)）

あ丶、友よ。おみは尙われに忠實に仕ふ、
お身は尙此盲人(めしひ)に心をかくる。
われは常に御身を知る、
われ今闇黑(やみ)の裡にあれど、
お身の聲こそ忘る丶時なけれ。

歌舞團長(コリファイオス)　あなたは恐ろしい事をなされた。如何いふおつもりで目を潰してしまわれたのぢや。いかなる人間

以上の力があなたに此様な事を思ひ立たせたのぢや。

エディポス　（第二向左舞唱歌(ストロフイ)）

友よ。そはアポロなり。
わが不幸をかくまでにせしはアポロなり。
あゝ、わが苦しき〳〵不幸を。
されどわが目を打ちしはわが手なり。
他(あだ)し人(びと)の手をかりしにはあらず、
わが目すでに美しきものを見ず、
今更に何をか見るを願ふべきや。

歌舞團長(コリフアイオス)　まことに仰せの通り。

エディポス　友よ、俺には何を見る事が出來よう。何を愛する事が出來よう。わが心を慰むるいかなる言葉が俺の耳に觸れるのか。もう何の望みもない。友よ、どうか、この國から俺を引き出してくれ。俺にはもう何もない。唯三重に呪はれて居るばかりだ。さうだ。おれは天から最も憎まれて居る人間なのだ。

歌舞團長(コリフアイオス)　王の運命も御感覺も、何といふお氣の毒な事ぢや。今更この樣にお近づきでなかつたならと、思ふばかりでござります。

エディポス　（第二向右舞唱歌(アンテイストロフイ)）

誰にもせよ、わが足枷を取はづして、
われを牧場より解放し、
死よりわれを救ひ出し、
われに生命(いのち)をふき返させし男よ。
その男(おとこ)にのろひあれ。
われ若しその時死してあらば、
わが友にもわが魂にも、
かゝる悲しみはなかりしものを。

歌舞團長(コリフアイオス)　わたしもさうであつたらうと思ひまする。

エディポス　あゝ、キタイロンよ。何故わしに隠れ家を與へてくれたか。俺がおまへの手に渡つた時、何故おまへは直ぐに殺しては呉れなかつたか。さうさへすれば、俺は自分の身の上を人に暴露せずに済だものを。あゝ、ポリボスよ。あゝ、コリントよ。わが父上の宮殿と呼ばれた、古王宮よ。外見は如何に美しくとも、その下には如何な罪悪が醸されて居た事か。あゝ汝、

三岐（みつまた）よ、汝、密林の幽谷よ、雜木林よ、三本の街道が落合ふ狹き道よ、おまへらは俺の手で流した父の血を呑んだのぢや。而しておまへらは、俺がそこで何をしたか、こゝへ來てからも、どんな新しい惡事を働いて居るか。おまへ方はそれを記（おぼ）えて居るか。友よ、神の御名によつて願ふ。何卒この國を離れたどこぞへ、俺を隱してくれ。さもなくば俺を殺してくれ。或は海の中へ投げ込んでくれ。すれば二度と再び、此わしを見ずに濟まう。側へ來て此憐（あは）れな男の手を執つてくれ。さ、怖れずに、わしのいふ事を聞いてくれ。これ程の苦しみが、他の人間に我慢がなるものか。

（舞歌團（コレウタイ）は躊躇して手を出しかねてゐる。）

歌舞團長（コリファイオス）　（下手の方を見ながら）恰度よい處へ、クレオン殿が見えられました。あなたのお賴みの事を能く御相談致しませう。あなたの代りに此國を守るのは、あの方御一人でござります故。

エディポス　（逃げるにも逃げられず外衣で顏をかくしながら）あゝ、俺は彼人に何と挨拶したらよからうぞ。こちらからは信用をして貰ふ資格はない。わしは全く彼人（あのひと）を裏切つて居たのだ。

（クレオン家來をつれて登場。）

クレオン　（エディポスの傍によつて）エディポスどの、先刻來のあなたの態度を根にもつて、あなたを嘲弄に參つたのでも誹謗にまゐつたのでもござらん。（家來どもに）若しそちたちが最早人の子を尊敬せぬやうになつたとしても、少くとも大日輪の生々化育の炎を尊む事を忘れはしまい。されば大地も、清淨の雨も、光りも、顏をそむくる如き汚れたるものにても、赤裸々に人に曝す事を愼まねばならぬ。それ故に此方も匆々に、奧殿内へお伴ひ申せ。血緣のもののみが、血緣の惱を見且つ聞くは、最もよく敬神の意に適ふて居るのぢや。

エディポス　意外にも御身は、かくまで崇高（けだか）い心をもつて、こよなき惡人なるわしの許へ來て下された。さすれば何卒神の御名によつて、わしの賴みを聞いて貰ひたい。それといふは、結局お身の爲めになる事なのぢや。わし自身のためにいふのではない。

クレオン　而してどの樣な事を、身に賴まうとして居られるのぢや。

エディポス　速かにわしを此國から追放してくれ。誰一人としてわしに言葉をかけるもの丶ない鄕へ。

クレオン　それとて爲まいものでもないが、身はその前に爲すべきあらゆる道を、神に伺ひを立て丶置いたのぢや。

エディポス　神の命は既によう解つて居る。わしの樣な親殺しの、汚れた人間は死ぬより外に道はないのぢや。

クレオン　いかにも、神の御心はその通りであつたが、か丶る場合に際會した以上は、如何爲ねばならぬかを、明かに心得おくが上分別ぢや。

エディポス　御身は、わしの如き極重悪人の爲めにすら、託宣を伺ふてくれると云ふのか。

クレオン　左樣。なれども今となつては、お身みづからも神に信仰が持てる筈ぢや。

エディポス　それは左樣ぢや。したが、兎に角わしの賴みを聞いてくれ。それは、奥殿に横はり居る妃をお身の思ひ通りに葬つてくれる事ぢや。これはお身に取つても、最後の儀式となるかも知れぬ。それにわしは、父上の此都を、わしが住むが故に人の呪ひの的とはしたくない。わしはあのキタイロンの山邊に住みたい。かしこは兩親がこの世にありし頃より、わしの生ける墓所と定めてあつた所ぢや。彼處へ行けば俺を殺さうとした人々の命令に從つて死なれる樣なものぢや。が、わしの運命などは如何なつてもよいのぢやが、唯心殘りは二人の娘が事。クレオン、お願ひぢや、御身に賴む。（クレオンこの間に己が從者に命じて二人の娘を迎へにやる。エディポスは心附かずに語りつゞける。）男の子等の世話迄は賴まぬ。彼等の勝手に捨ておけばとて、男子なれば食ふ道には事を缺くまい。が、わしの二人の娘、可哀さうな不幸な奴等ぢや。わしはお身に賴む。何卒二人の世話を燒いてくれ。では、わしの手を二人に觸らせて、思ふさまわしに泣かせてくれ。賴む、心の崇高いわしの兄弟、賴むぞ。あ丶、若し最後にたつた一度、二人に手を觸れる事が出來たなら、このわしの目

が……。

（この時、クレオンの從者等、アンチゴーネとイスメーネとを伴ひ來る。）

やつ。神樣、今泣聲を聞いたは、わが愛しの子供等でござりましたか。あゝ、クレオンがわしを憐れと思ふて、わしのところへ子供——可愛い奴等をよこしてくれたのぢやな。その通りであらうな。

クレオン （二人の娘をエディポスの方へ押しやりながら） いかにも、私が呼んだのぢや。私はあなたが子供に對する喜びを知つて居りました。しかもあなたは今その喜びを己のものにする事が出來た。

デエィポス おゝ忝けない。御身の親切の酬いには、天はわしに對するより、一層親切な保護をお身に下し給はらう。あゝ、娘たちは何處に居る。さあ、此處へ來てくれ。此處へ來て、一度爽かに輝いて居たそなたゝちの父の眼を、このやうに淺ましい形にした、此おそろしい手にさわつて見てくれ。そなたの父親はもう何も見えず、何も分らないのぢや。そなたゝちの將來の憐れな生活の事を思ふと、わしも泣きたくなる。が、そなた達はわしにはそれの出來ない事を見て居よう。そなた達は如何なる町の人と交際することが出來るのぢや。如何なる祭典に連なる事が出來るのぢや。よし、出かけて行くとも、町の人々と樂みを共にするかはりに、涙にくれつゝ家路につく事にならねばよいが。而してやがて結婚の年齡ともならば、娘たちよ、わしの後裔や、そなた達の子孫が、世間より浴せらるゝ忌はしき非難を、身に引受けてくれる程の人が何處にあらう。（クレオンの方に向ひて） あゝ、メノエキウスの子よ、聞いて下され。御身一人が此子達に殘された父親ぢや。この子達の兩親は父母共に既になくなつてしまふたので、二人は、貧しい、夫ももてぬ淺ましい身となりさがり、浮世の巣をさすらひ歩くが如き事の無い樣、親の悲哀を又繰返す事の無い樣、御身の血緣の女として、何卒可哀がつてやつて下され。（クレオンの方へ兩手を突出して） クレオン、わしにお身の手をさわらせて約束の證據を見せてくれ。

クレオン （靜かに歩みよつてエディポスの手を握つて） 悲哀(なげき)は盡きぬ。いざ、奥へ參らう。

エディポス 心は進まねど、辭(いな)みもなるまい。

クレオン これで萬事うまく行く時が來たのぢや。

エディポス しかし、行くからにはわしに條件がある。

クレオン 云ふて見て下されえ。

エディポス 此國外に住むやうにわしを逐放して貰ひたい。

クレオン それこそ神よりあなたに與ふべきものでござらう。

エディポス いや、わしは神々の憎まれ者ぢや。

クレオン されど、あなたの望みは、やがて遂げられるでござらう。

エディポス 御身も神に同意するのか。

クレオン 私は思ふても居らぬ事を、下らなく口には出さぬ人間でござります。

エディポス さらば、これより連れて行つて貰はう。

クレオン いざ、參りませう。但し、子供達は彼方へ遣しませう。

エディポス いや、この子達はわしが側を離すまいぞ。

クレオン この期に及んでまで、萬事に我意を振ふ事をお愼みなされえ。あなたが通された我意は、生涯あなたについては居りませぬぞ。

（クレオンはエディポスを促して正面入口の中へ消える。クレオンの從者等は二人の娘の手をとりて後に續く、次にエディポスの侍臣、最後にデエィポスの從者が入つて靜かに扉を閉ざす。後には歌舞團(コレウタイ)のみ殘る。）

合唱(コロス)

故國テーベに住む人達よ。
見よ。これぞエディポスなる。
彼は名高き謎を釋き、
偉大なる人として世に知られ、
その好運に對しては、
美み嫉まぬ人とてなかりしに、
恐ろしき不幸の海原に、

荒波凄じく立騷ぎ、
奈落の底に落ちたる人を見よ。

さればわれ〳〵の目が
最後の運命の日を待ち設くるその間は――。
限りある生命の人間に對しては、
何人にも幸福といふ語を用ゆる事勿れ、
その人が幽明の境を超越し、
あらゆる困苦の世界より解脱するそれ迄は。

――幕――

ソフォクレスとエディポス錯綜（コムプレクス）

此不朽の戯曲『エディポス王』は、わがフロイド博士によつて、精神分析學的解剖を受け、所謂エディポス、コムプレクス問題を描寫せる點によつて、一層新らしく、一層興味ある不朽の戯曲となつた。ところが面白い事には、此作者自身と、その長子との間に、エディポス、コムプレクスを、事實に行つて居たのであつた。ソフォクレスは、腹違ひの二人の男の子をもつて居た。長子をイオフォーンといひ、次男をアリストーンと呼んだが、ソフォクレスは次男の方を偏愛してその所生の孫におのが名ソフォクレスを名のらせた。そこで長子は、世襲財産が甥の手に渡らん事を虞れ、父を精神衰耄者で、遺言狀を認むる能力なき者として法廷に訴へた。ところがソフォクレスは、自己の精神健全なる證據として、自作戯曲『コローナスのエディポス』の一幕を法廷に朗讀し、わが子に勝つ事を得た。

（松　翁）

執筆者紹介

大槻憲二氏　は早稲田大學文學部大正七年出身の人。分析學者として、フロイド全集の譯者の一人として、また詩人ヰリアム・モリスの研究者として、文學批評家として既に人々のよく知るところであります。近來は又時に劇作に筆を染めらる。さきに『伊達政宗』(三幕七場)の大作を公にせられ、今次の『養父』はその第二作である。

長谷川誠也氏　は早稲田大學前敎授、博文館前編輯部長、また天溪の雅號の下に自然主義文學運動の大立者として活躍された歴史は讀者諸氏の悉く知られるところでありませう。近著『文藝と心理分析』は好著の聞え高いものであります。

中山太郎氏　は民俗學の大家として幾多の名篇大著あることは我々の説明を俟つまでもない。民俗學は精神分析と共に新興の科學であつて、これ等兩者は切つても切れぬ因緣にあります。この學問の專攻家なる氏が我等の一團に加はられたことは、誠にこの上もない喜びであり、誇りであります。

荒川龍彥氏　は早稲田大學文學部英文科昭和四年出身の逸材。英語英文學の各雜誌に盛んにその研究を發表せられ、斯學界注目の對象となつてゐる人、分析學よりの英文學研究を續々本誌で發表せむと意氣込んでゐられます。

田内長太郎氏　は早稲田大學文學部大正六年出身者。篤實なる學風と温良なる人格とは人々の囑望するところ。ミュンスターベルクの研究は氏の近來會心の論篇と聞き及びました。

江戶川亂步氏　は早稲田大學政治科出身の異彩、心理小說家として令名高き人。この度突如として英文壇の異色ある天才J・A・シモンヅの研究を公にせらる。恐らく文壇學界驚異の眼を見はることであらう。

伊東豐夫氏　は東京高等學校を先年病氣のため途中退學せられ、目下は專ら當研究所にて分析學を研究せらるる若き學徒。その譯せられたるフリウゲルは英國學界の分析者として、殊に家族心理の研究家として名高き人。

小山良修氏　は東京帝大醫科大正十三年出身の醫家。昭和五年ホルモンの研究に依りて學位を得られた。この度の論はその專攻の一端を僅かに洩らされたに過ぎぬもの。現職江戶橋病院（過般白木屋火災の際に受難者を收容した、有名な病院）小兒科主任。

棚谷伸彥氏　は慶應大學英文科昭和四年出身の文學士。

松居松翁氏　は劇作家として、松竹株式會社の顧問として、劇壇の泰山北斗。今更喋々するまでもない人。豫ねてエーテル療法なるものを試み、それと精神分析との關係を研究せんとせられつゝあるこの度の『エディポス』譯は永くわが國の定本となるであらうことを期待する。譯者はギリシア原本は勿論、英、獨、佛の各種を參照せられての苦心の譯との事であります。モンタージュせられた桃多郎氏はその令嗣であります。

編輯後記

創刊號の編輯を終つてこの後記を認めようとしてゐるのだが、さて何から書いてよいやら迷ふ。若い時分に雜誌の編輯をして、散々神經を費したが、それ以來十年ほど、自分は專ら執筆者の方に廻つてゐた。今度また、執筆者にして編輯者を兼ね、あの苦勞を再びせねばならぬかと思ふと、いさゝか胸が重くなる。執筆者諸賢よ、乞ふ期日を守れ、讀者諸君子よ、乞ふ本誌を支持せよ。

★

創刊號であるためばかりでなく、フロイド喜壽祝祭劇の上演用臺本なども載せたりして頁數に狂ひを生じ、通常の號と編輯体裁を異にしたが、來月號からは、『時評欄』と『相談欄』と『講座欄』とを設けるから、御承知願ひたい。『相談欄』と云ふのは、目下各新聞雜誌に流行の身の上相談に類するものであるが、我々は平生、それ等を拜見して、その答辯者諸氏の答辯ぶりの失禮ながら非科學的なるを遺憾としてゐるので、いさゝか科學的な答辯を供して見ようと思つてゐるわけである。相談者はなるべく本誌月極讀者となつて下さることを、たゞ諸氏の德義心に愬えて希望したい。

『時評欄』には社會各方面の事象に對する分析的見地からの批評を輯める。また書物の批評を載せることもある。

『研究欄』と『講座欄』と『文藝欄』とには、讀者諸氏からの投書を歡迎する。諸氏の見られた夢の話や、觀察せられた無意識現象などは殊に我々の期待し希望するところである。本名を出すことを好まぬ人々は匿名でもよろしい。但し記述はなるべく科學的正確を期して頂きたい『文藝欄』への投稿は非常に優秀なものであることを要求します。『講座欄』には質疑應答欄を設けます。

★

各地方に支部を設けたいと思ひます。五名以上熱心な讀者のゐるところ、從つて本誌を月極に五冊以上直接購讀せられる方々のゐられるところには、支部の存在を認めます。支部の方々に對しては本部は種々特別の便宜を取計ひます。

★

國內に支部を設けるばかりでなく、また各方面の學者、實業家にしてその方面から斯學に關心を持ち、興味を寄せてゐる方々とも連絡をとり、大いにわが國精神文明の顯揚と、精神衛生の實施とに資したいと思つてゐる。それ等諸方面の權威、識者にして本研究所の相談役たり、提携者たることを約束せられた個人又は團体の尊名は來月號から逐次發表して行くであらう。

★

國內の連絡ばかりでなく、本誌は更に進んで海外の斯學研究團体とも提携して行きたいと思ふ。能ふべくんば、原稿の相互提供や、問題の相互討議をまでも試みるやうになりたいと考へてゐる。

本誌に載せた『印度に於ける分析運動』は讀者諸氏にも多大の印象を與へたことゝ思ふ。同じ東洋人に斯學へのかゝる情熱を發見することは、我が國の人々にも自省せしめるものがあるであらう。精神分析學が、佛敎の敎儀と共通するところ甚だ多いことを思ふとき、印度にかくば

編輯後記

かり斯學の榮えることは、偶然でないであらう。とにかく印度が研究に於いて、日本よりも時間的に一足お先に失禮してゐることだけは事實である。

★

フロイド全集最後の卷『精神分析總論』の校正と、祝祭劇の準備と、機關雜誌創刊の用意とが、三つ重なつたばかりでなく、種々な雜用が殺倒してこの一ヶ月ほど云ふものこの數年來經驗したことのない多忙さを經驗した。併し多忙は人間にとつて慥に一種の藥である。苦き快樂である。これまた人生の一つのアムビヷレンツ！（大槻）

★

ヰーンから發生した一つの新しい學說たる斯學は今日既に廣汎な範圍にまでその適用性を認められてゐる。しかしフロイド敎授が主としてその學的立場をプシコパトロギイに置く如く誤解され、リビドオの概念を性の意味に限定すると曲解されたりする結果として、ともすれば、精神分析學領域が世紀末的なものとして解されたり、單なる生理的現象の臨床的觀察以外に解されなかつたりもする。チューリヒ學派の精神分析學は種々な意味でさうした誤解から脱することのできる展開を與へてゐることは、ユングの心理的タイプの解釋を見ても分るであらう。だが今日、この學は一般の世界觀から余りにも隔離されて考へられてゐる。神話や、宗敎や、文學に關しての一つの新しい研究の途を寄與し得たのに反して、一般現實の問題からはその世界觀としての存在を認められてゐないやうに思ふ。唯物論、或は存在論、又は觀念論のそれぞれの哲學に關聯しては甚だその存在を無視される。

イデオロギイに對してパトロギイの意義が探り上げられるならば、（三木清氏『イデオロギイとパトロギイ』（作品）三月號參照）自分は少くともこの學もパトスの問題に最も多くの關聯を有つものではないかと思ふ。確か『コギト』の四月號にもパトスと愛の問題を扱つた論文を見たが、自分がこゝでいひたいのは、パトスと愛の問題が、これまで精神分析學が中心のテーマとして取扱つたもので、エディポス・コンプレクスの理念はそれを證明するであらうことだ。精神分析はその學としての對象をアブノーマルに限らないで、ノーマルなものにも及ばなくてはならぬとカザミアン敎授はいつてゐるが、こゝに自分は存在論としての連なりを見出す。

精神分析が文學研究のメトードとしてその功績を齎したことは、何人も認めるであらう。リチアヅ氏などは未だ拙劣でその價値を認め兼ねるといつてゐるが、しかし彼の故國では既にジョオンズ博士のハムレット研究の貢獻がこれまでの多くのハムレット研究の未解決の問題に新しい光を抛げ與へてゐる。カザミアン敎授は、シエリの『アラスタア』を、ハアバート・リイド氏はブロンテ姉妹の作品に、それぞれ精神分析的研究を試みてゐる。文學批評と精神分析との關係については本號の拙文に於いて簡單に論じて置いた。次號からも英文學を主材にして、この方面の問題を考へてゆき度いと思つてゐる。この國に於て現在ユリシイズやハクスリや、ロオレンスの作品が讀まれ

てゐるにも拘らず、その系統的な觀察や研究が行はれてゐない。本誌はこれも一つの殘された課題としてそれぞれ新進の人々に乞うて研究發表をして貰ふつもりだ。この方の開拓だけでも本誌の獨自な存在の價値があると思ふ。大槻氏は既に昨年、シエイクスピアの一二の作品について研究を發表されたが、今後は本誌によつてそのシエイクスピア研究を果される豫定になつてゐる。これも大に期待してい〻事實である。又、本號に力作を寄せられた長谷川氏は、現代英文學に對しても深い造詣を有してゐられる。次號よりはその研究の一端が發表される。これも吾々の大に期待するところである。

（荒　川）

譯者の詞

松居松翁

□希臘語の出來ない愚老が、希臘詩聖の劇詩を飜譯しやうといふのは、餘に大膽過る業である。が、今度はそんな事を云つて居る暇は無かつた。倅の桃多郎が演出一切の責任を負ふ事になつて見ると、勢ひ子供の喧嘩へ親が出ないわけには行かない羽目となつた。で、英譯本を主として飜譯にとりか〻る事にした。

□英譯では、一八八六年版のトーマス・フランクリンのと、一九三一年版のジョーヂ・ヤング卿のと、一九一四年版のリチヤアド・ジエッブ卿のを用ひ、佛譯はルイ・アンベル、日本譯は村松正俊、中村吉藏兩氏のを參照した。

□併しだん〱やつて見るとフランクリンのも、ヤング卿のも、餘りに奔放な自由譯なので、二つ突合せるとまるで別な詩人の詩を修む様な氣さへされた。この點ジエッブ卿のは、散文譯ではあるが、原文の忠實なる逐語譯らしいので、後には重にこれに據る事にした。この爲めに當年六十四歳の老人が、俄仕込の希臘學生となつて、覺束ないグリーク・レキシコンを振廻したのは一寸御茶番だつた。こんな事で非常な手數がか〻つたのに、今月は芝居の方が忙がしかつたので、此飜譯に費やすべき時間が少く、五日ばかりの間にバタ〱とやつてしまはなければならなかつたので、甚だ杜撰なものになつたらしい。

□が、ジエッブ卿の綿密周到な對譯と、註譯とは、大に愚老を助けてくれた。他の英譯者が原作のマヌスクリプトを讀み違ひ、エデイポスとクレオンとの台詞を何行が入れ違ひにしてあるのを、すつかり訂正する事が出來たのは痛快だつた。こんな事で、例の凝性から、可成忠實な飜譯をしたつもりだつたが、演出者の桃多郎に色々の註文があつて、文章のスタイルにまで干渉され、大分手荒いカットをされた。とは云ふもの〻、彼が貳百冊の參考用書の中に首を埋め、泰西の演出——上は一八八一年の有名なハアバアト演出から、ラインハルトの一九一〇年の伯林演出、近くは去年のピトイフ演出などまで、該博な考證の蒐集をして居るのを見ると、こつちから讓歩してやるのが當然なやうな氣がして、彼の改訂に全然同意を表する事にした。彼の『上演覺書』は可成廣汎に渉る研究であるが、それは五月號の『舞台』に出る筈になつて居る。併せて讀んでいたゞけば、倅はさぞ嬉しく思ふであらう。

□こんな譯で、飜譯の劇詩といふよりは

編輯後記

全然演出の爲めの台本となつたので、曲中人物の發言なども『日本人が日本語の間に入れる地名人名は、必らずしも原語通りなる事を要さない。いやそれでは却つて聞にくい場合が多い。例へば主人公の名にしてからがオイデポスでは、小出法師と聞えて、聞き苦しくもあり、云ひにくゝもある。エデイポスならば日本語らしく操れる』といふ桃多郎の議論に盲從して、すべてその流儀にしたがつた。それから最後の幕になつて、原作通り登場人物が饒舌を弄して居たのではキヤタストロフが遲緩になるといふので、演出者は父の折角の飜譯に對して大虐殺を企てた。松居家の中にさへ、一種のエデイポス・コンプレクスが起つたのは、此場合興味ある問題だつた。わが小エデイポスは、この大カットに滿足せず、全く原作を無視した演出をやらうなどゝ云つて居る。ソフオクレスには甚だしい冒瀆ではあるが、そんな演出も見たいやうな氣がしないでもない。兎に角、四月二十日の晩が待遠しい。

不二出版社から

★天和二年、私の遠祖、古久屋紋右衛門正重が、『印刷・出版』の業を創めてから恰度二百五十年。私が、父祖の業を紹いで二十年になります。

★こんど更に、工場設備を擴充し、日本橋事務所を開設して、『出版・印刷』界に一歩を進めましたに就いては、切に、大方江湖の御同情に縋つて、幸ひに、父祖の名を辱しめたくないと考へて居ります。

★『出版部』として、長谷川誠也・大槻憲二兩先生の御高配を得まして、雜誌『精神分析』を出させて戴いたことは、自分として望外の光榮で、茲に、兩先生を初めとして、精神分析學研究所各位に、虔んで、御禮を申し上げて置きます。

★匆々の際で、編輯諸先生にも、大變、御苦勞をお掛け致しましたが、次號からは、工員の心持も落付いて來ませうし、從つて、一層いゝものが、生れるであらうことを申し上げ、大方讀者諸賢の御諒解と御期待を乞ひ、併せて大槻先生に謝したいと存じます。（依田生）

昭和八年四月二十日 印刷
昭和八年五月 一日 發行 創刊號
定價六十錢（郵稅四錢）

編輯者 東京市本郷區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷兼發行者 東京市日本橋區通三丁目七番地 依田初男
印刷所 東京市日本橋區通三丁目七番地 不二印刷出版社

定價一部 五拾錢 郵稅四錢
半年分 參圓 增大號及稅共
一年分 六圓 增大號及稅共

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京三八六九〇番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割增に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第社員を伺はせます。

發行所 東京市日本橋區通三丁目七番地 不二出版社
電話日本橋(24)四三四七番
振替口座東京三八六九〇番

二、宗教の將來　第一章以下第十章まで
三、文明と不滿　第一章大海原のやうな感情、第二章宗教は幸福を與へるか、第三章文明とは何か、第四章文明の缺陷、第五章攻擊慾と文明、第六章エロスと死の本能との闘爭、第七章良心の起源、第八章余論

（第四卷）快不快原則を超えて
定價一圓五十錢
送料十二錢
對馬完治譯

一、快不快原則を超えて　第一章以下第七章まで
二、强迫神經症の一例　一、臨床記錄の抽出（a治療の開始、b小兒の性感、c大强迫恐怖、d治療に誘導すること、e强迫觀念とその說明、f强迫神經症の起因、g父性コンプレクス及び鼠の觀念の解除）二、理論（a强迫形成の或る一般的特性、b强迫神經症の或る心理的特性、c强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑念との根源）
附錄　快不快原則に關する譯者の解說

（第五卷）性慾論・禁制論
定價一圓七十錢
送料十二錢
矢部八重吉譯

（口繪）原著者肖像及び筆蹟
一、性說に關する三論文　第一論文、性の錯誤（第一章性的對象に關する變態、同性愛、性的對象としての性的未熟者及び動物、第二章性目的に關する變態、解剖的違反、豫備的目的の定着、第三章あらゆる變態に一般的なもの、第四章神經症患者の性本能、第五章部分本能と性的帶域、第六章神經症患者に於いて性的變態が分見的には目立つ所以の說明、第七章幼兒性感について）第二論文、幼兒の性感（幼兒時代の性的潛在期間とその中絕、幼兒性感の顯現、幼兒性感の性目的、性的顯現としての自慰、幼兒の性研究、性組織發達の諸段階、幼兒性感の源泉）第三論文、思春期に於ける性感の變化（性器帶域の變化と豫備快感、性的亢奮の問題、リビドー說、男女の別對象發見）論旨要約
二、禁制と徵候と杞憂　第一章以下第十一章まで
三、附錄　フロイド先生會見記（譯者）

（第六卷）分析藝術論　●定價一圓九十錢 送料十二　大槻憲二譯

一、機智とその無意識に對する關係と（第一章以下第五章）二、フモール　三、詩人と空想　四、レオナルドとモナ・リーザの微笑　五、原始語に於ける相反意義について　六、筐擇みの動機　七、ミケルアンヂエロのモーゼ　八、ゲーテの幼兒期記憶　九、氣味惡さ　十、夢と童話（挿圖十三枚――寫眞版七枚凸版六枚）

（第七卷）トーテムとタブー、自我とエス　●定價一圓八十錢 送料十二　矢部八重吉譯　對馬完治譯

一、トーテムとタブー（一、近親姦恐怖　二、タブーとアムビバレンツ　三、アニミスムスの魔法及び思想の全能　四、幼兒に於いて復活するトーテミズム）

二、自我とエス（一、意識と主意識　二、自我とエス　三、自我と超自我　四、二種の本能　五、自我の從屬的關係）

（第八卷）分析療法論　●定價一圓九十錢 送料十二　大槻憲二譯

（口繪）原著者肖像メタル寫眞

一、フロイドの精神分析法、精神療法について、精神分析療法の將來、分析の『仕荒し』について、精神分析に於ける夢の解釋の使用、轉嫁の動力性、分析醫に對する處置上の注意、精神分析操作中に於ける誤てる再認識に就いて、精神分析處置法、想起・反覆・並びに徹底操作、醫者に對する婦人患者の轉嫁愛に就いて、精神分析療法の道、分析技法前史に就いて

二、非醫者の分析可否の問題、はしがき、分析は醫療にして醫療に非ず、分析療法の現論的根據、神經症の發生機制とその處置法、精神分析と性慾、精神分析技法の難點、精神分析への法律的干渉、精神分析への三種の興味、『非醫者の分析可否の問題』への附言

三、性格と肛門性感

（第九卷）分析戀愛論　●定價一圓八十錢 送料十二　大槻憲二譯

フロイド全集完成記念
『精神分析』誌創刊記念

フロイド喜壽祝祭劇（趣意書）

我々はこの度フロイド全集の完成と機關雜誌の創刊とを記念する意味に於いて、また斯學の弘通と研究所事業の進展を期する意味に於いて、更にまた人類の精神史上に偉大な事業を創成して本年喜壽に入られた斯學父祖フロイド博士を祝福する意味に於いて、左記プログラム通りの催しを致すことになりましたにつき、精々御聲援の程お願ひ申上げます。我等の研究所は既に創立以來六年に亘り、飜譯に、研究に、批評に、治療に、多少の事績を擧げて來たと信じますが、この度の擧はまた、科學と藝術との純粹なる提挈、交渉と云ふ意味に於いても、わが國文化史上の、實に劃期的な事業にならうと存ぜられますにつき、何卒大方の高庇を得てこの試みに精華あらしめ給はむことを希ひます。

昭和八年四月

東京精神分析學研究所員

演劇と講演プログラム（大要）

時日……｛四月二十日（木）／四月廿一日（金）｝午後六時半開演

會場……朝日講堂

會費……壹圓

一、音樂……大槻憲二氏

一、開會の辭……長谷川誠也氏

一、（講演）（第一日）エディポス傳記に於ける東西の交渉……矢部八重吉氏

（第二日）フロイド會見の印象

一、（講演）エディポスの演出に就いて……………………………………松居松翁氏

一、（演劇）養　　父……………………………………作　者　大槻憲二氏
演　出　竹中莊一氏
裝置、照明　松居桃多郎氏
俳　優　劇團東京太陽座々員

解説　可憐なる夕刊賣りの少女を、老判事が救ひ上げて養女としたその記念の日の丁度一ヶ年後の朝の出來事。老判事の心境に母コムプレクスに由る救助願望と愛慾の本源性とを描き表はし、本邦最初の精神分析劇。中村吉藏氏が非常に推賞せられる傑作であります。

一、（演劇）エディポス王（ギリシヤ悲劇ソフオクレース原作）……………分析譯及び舞臺監督　松居松翁氏
作曲並びに指揮　山崎祐康氏
裝置、照明、演出　松居桃多郎氏
俳　優　劇團東京太陽座々員

解説　エデイポスは遂に精神分析學とは切つても切れぬ因緣あるものとなりました。父を殺し母と婚したエデイポス王が悲しき運命は、夢の解釋法を傳說に適用することに依り、運命に非ず、幼兒的願望なることが明かになりました。偉大にして永遠なる古典の新しい解釋と劃期的演出とを見落し給ふこと勿れ。

（配役は別紙、詳細のプログラムに讓り、當日會場にてお渡しいたします。）

主　催　東京精神分析學研究所　本郷區駒込動坂町三二七

後　援（全集發行所）春陽堂書店　日本橋區通三丁目八
（雜誌發行所）不二出版社　日本橋區通三丁目七

（切符は、神田三省堂、銀座プレーガイド、精神分析學研究所、春陽堂、不二出版社などにて取次ぎます。）

大槻憲二氏著作鈔

ヰリアム・モリス原著
藝術のための希望と不安
大正十四年十二月（絶版）
聚芳閣

アルトゥール・シュニッツレル小説集
ギリシアの踊女
大正十三年九月（絶版）
新潮社

ベネデット・クローチェ原著
美學及び美學史
（世界大思想全集　第四十六卷）
春秋社

精神分析概論
（昭和七年三月　定價三十錢・送料四錢）
小石川原町十三
雄文閣

＊當研究所又は不二出版社にて取次希望の方は郵券代用にても可。

昭和八年四月二十日印刷納本
昭和八年五月一日發行
每月一回一日發行
精神分析 第壹號

I. Jg., Heft I, Mai 1, 1933. erscheint monatlich,

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Organ des „Tokio Institutes für Psychoanalytische Forschung."

Herausgegeben von
Seiya Hasegawa, Momotaro Matsui,
Tatsuhiko Arakawa, Kenji Ohtsuki,

Mit 2 Kunstbeilagen :——

1. Sigm. Freud (Original gezeichnet von Prof. Schmutzer.,)
2. Mitglieder des Institutes.

Inhalt

Studien:——

Berichte und Neuigkeiten:——

Literarische Werke:——

Preis des Einzelheftes, 50Sen. (Spezialpreis dieses Heftes, 60sen.)

Fuji-Shuppansha Verlag,
Nihonbashi, Tohri 3 chome, 7.
Tokio Japan.

本號に限り 定價金六拾錢 郵税四錢